

九州横断自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

— 3 —

甘木市所在 西原C遺跡の調査

1 9 8 4

福岡県教育委員会

九州横断自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

— 3 —

甘木市所在 西原C遺跡の調査

序

この報告書は、福岡県教育委員会が日本道路公団から委託を受けて、昭和54年度から実施している、九州横断高速自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録であります。

今度の報告は、甘木市所在の西原C遺跡についてのもので、その内容は、弥生・古墳時代の集落・墓地等の遺構・出土遺物であります。

本報告書を文化財愛護思想の普及、教育・研究等の資料としてご活用いただければ、幸甚に存じます。

発刊にあたり、地元の方々をはじめ、数々のご協力をいただいた関係各位に深甚なる謝意を表します。

昭和59年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 友野 隆

例　　言

1. 本書は、昭和57年度に福岡県教育委員会が日本道路公団から委嘱されて、九州横断自動車道建設に伴い破壊される遺跡の、事前調査を実施した、第3冊目の報告書である。
2. 本書に収録したところの遺跡は、^{くじらき}西原C遺跡（所在地～福岡県甘木市大字屋永字西原）である。
3. 本書掲載の現場における遺構実測図は、高田一弘、日高正幸、中間研志が作成し、他に平嶋文博の助成を得た。更に、遺構・遺物の製図及び原稿清書等には手柴淳子・塩足さとみ・本田ひろみ各氏の多大なる協力を得た。
4. 遺物整理は、九州歴史資料館の岩瀬正信氏の指導のもとに、福岡県教育庁管理部文化課甘木発掘事務所及び九州歴史資料館にて行なった。出土遺物の実測は、中間が行なった。
5. 遺構写真・出土遺物の写真は、中間が担当した。
6. 本書中の図版に掲載した遺物の写真的右下の番号は、挿図における番号と同一である。
7. 本書掲載の遺構図中の方位は総て真北（G・N）である。
8. 本書の執筆・編集は、中間が担当した。

本文目次

	頁
I 調査に至る経過	1
II 位置と環境	4
III 各遺構と出土遺物	6
1. 積穴住居跡	8
2. 袋状積穴	35
3. 木棺墓・石棺墓・土塙墓	57
4. 土 塙	66
5. 溝	72
6. 棚列及び柱穴群	114
7. その他の遺構と遺物	117
IV 各 論	
1. 集落の盛衰	119
2. 出土遺物について	122

挿 図 目 次

	頁	
第1図	路線図（縮尺 1/780,000）.....	2
第2図	西原遺跡とその周辺遺跡分布図（縮尺 1/50,000）.....	4～5 折込み
第3図	西原遺跡地形図（縮尺 1/2,000）.....	7
第4図	遺跡全体遺構配置図（縮尺 1/100）.....	8～9 折込み
第5図	1, 2, 4号堅穴住居跡実測図（縮尺 1/60）.....	9
第6図	1号堅穴住居跡出土土器実測図（その1）（縮尺 1/4）.....	10
第7図	1号堅穴住居跡出土土器実測図（その2）（縮尺 1/3）.....	11
第8図	2号堅穴住居跡出土土器実測図（その1）（縮尺 1/4）.....	13
第9図	2号堅穴住居跡出土土器実測図（その2）（縮尺 1/4）.....	15
第10図	2号堅穴住居跡出土土器実測図（その3）（縮尺 1/3）.....	16
第11図	2号堅穴住居跡出土石器実測図（縮尺 1/2）.....	17
第12図	3, 5号堅穴住居跡実測図（縮尺 1/60）.....	18
第13図	3号堅穴住居跡出土土器実測図（縮尺 1/4）.....	19
第14図	4号堅穴住居跡出土土器実測図（縮尺 1/4）.....	20
第15図	5号堅穴住居跡出土土器実測図（その1）（縮尺 1/3）.....	23
第16図	5号堅穴住居跡出土土器実測図（その2）（縮尺 1/3）.....	25
第17図	5号堅穴住居跡出土土器実測図（その3）（縮尺 1/3）.....	26
第18図	5号堅穴住居跡出土铁器実測図（縮尺 1/2）.....	27
第19図	6, 7, 8号堅穴住居跡実測図（縮尺 1/60）.....	28
第20図	6号堅穴住居跡出土土器実測図（その1）（縮尺 1/4）.....	29
第21図	6号堅穴住居跡出土土器実測図（その2）（縮尺 1/3）.....	30
第22図	7号堅穴住居跡出土土器実測図（縮尺 1/4）.....	31
第23図	7号堅穴住居跡出土石斧実測図（縮尺 1/2）.....	31
第24図	8号堅穴住居跡出土土器実測図（縮尺 1/4）.....	32
第25図	8号堅穴住居跡出土纺錐車・砾石実測図（縮尺 1/2）.....	33
第26図	1号袋状堅穴出土土器実測図（縮尺 1/4）.....	35
第27図	1～5号袋状堅穴実測図（縮尺 1/60）.....	36
第28図	2号袋状堅穴出土土器実測図（その1）（縮尺 1/6）.....	37
第29図	2号袋状堅穴出土土器実測図（その2）（縮尺 1/4）.....	38

第30図	2号袋状竖穴出土土器実測図（その3）（縮尺 1/4）	39
第31図	2号袋状竖穴出土土器実測図（その4）（縮尺 1/4）	41
第32図	3号袋状竖穴出土土器実測図（その1）（縮尺 1/4）	44
第33図	3号袋状竖穴出土土器実測図（その2）（縮尺 1/4）	45
第34図	3号袋状竖穴出土土器実測図（その3）（縮尺 1/4）	47
第35図	4号袋状竖穴出土土器実測図（縮尺 1/4）	49
第36図	4号袋状竖穴出土土製品実測図（縮尺 1/2）	50
第37図	5号袋状竖穴出土土器実測図（その1）（縮尺 1/4）	52
第38図	5号袋状竖穴出土土器実測図（その2）（縮尺 1/4）	53
第39図	5号袋状竖穴出土土器実測図（その3）（縮尺 1/4）	56
第40図	1号木棺墓、2号土塙墓実測図（縮尺 1/30）	58
第41図	1号木棺墓副葬鉄施実測図（縮尺 1/2）	59
第42図	1号木棺墓埋土中出土土器実測図（縮尺 1/4）	60
第43図	1、2号箱式石棺墓実測図（縮尺 1/30）	61
第44図	1号石棺墓埋土中出土土器実測図（縮尺 1/4）	62
第45図	2号石棺墓埋土中出土土器実測図（縮尺 1/4）	63
第46図	2号石棺墓出土投弾実測図（縮尺 1/2）	64
第47図	1号土塙墓埋土中出土土器実測図（縮尺 1/4）	65
第48図	2号土塙墓埋土中出土土器実測図（縮尺 1/4）	65
第49図	1～6号土塙実測図（縮尺 1/60）	67
第50図	1号土塙出土土器実測図（縮尺 1/4）	68
第51図	2号土塙出土土器実測図（縮尺 1/4）	69
第52図	2号土塙出土土器実測図（縮尺 1/2）	69
第53図	3号土塙出土土器実測図（縮尺 1/4）	70
第54図	5号土塙出土土器実測図（縮尺 1/4）	70
第55図	6号土塙出土土器実測図（その1）（縮尺 1/4）	71
第56図	6号土塙出土土器実測図（その2）（縮尺 1/3）	72
第57図	大溝1土層断面実測図（縮尺 1/60）	73
第58図	大溝1下層出土土器実測図（その1）（縮尺 1/4）	74
第59図	大溝1下層出土土器実測図（その2）（縮尺 1/4）	75
第60図	大溝1下層出土土器実測図（その3）（縮尺 1/4）	76
第61図	大溝1下層出土土器実測図（その4）（縮尺 1/4）	77
第62図	大溝1下層出土土器実測図（その5）（縮尺 1/4）	78

第63図	大溝1下層出土土器実測図（その6）（縮尺 1/4）	79
第64図	大溝1上・中層出土土器実測図（その1）（縮尺 1/4）	87
第65図	大溝1上・中層出土土器実測図（その2）（縮尺 1/4）	88
第66図	大溝1上・中層出土土器実測図（その3）（縮尺 1/4）	89
第67図	大溝1上・中層出土土器実測図（その4）（縮尺 1/4）	90
第68図	大溝1上・中層出土土器実測図（その5）（縮尺 1/4）	91
第69図	大溝1上・中層出土土器実測図（その6）（縮尺 1/4）	92
第70図	大溝1上・中層出土土器実測図（その7）（縮尺 1/4）	93
第71図	大溝1上・中層出土土器実測図（その8）（縮尺 1/3）	94
第72図	大溝1上層出土土須恵器実測図（縮尺 1/3）	102
第73図	大溝1出土石庖丁・土製投弾実測図（縮尺 1/2）	103
第74図	大溝1出土砥石実測図（縮尺 1/4）	104
第75図	大溝2土層断面実測図（縮尺 1/60）	105
第76図	大溝2（中央・東半）出土土器実測図（その1）（縮尺 1/4）	106
第77図	大溝2（中央・西半）（北端）出土土器実測図（その2）（縮尺 1/4）	107
第78図	大溝2（北端）出土土器実測図（その3）（縮尺 1/4）	108
第79図	大溝2（北端）出土土器実測図（その4）（縮尺 1/4）	109
第80図	大溝2（北端）出土土器実測図（その5）（縮尺 1/3）	113
第81図	溝3出土土器実測図（縮尺 1/4）	113
第82図	排列状造構実測図（縮尺 1/150）	114
第83図	柱穴群出土土器実測図（その1）（縮尺 1/4）	115
第84図	柱穴群出土土器実測図（その2）（縮尺 1/3）	115
第85図	柱穴群出土石器実測図（縮尺 1/2）	116
第86図	表面採集土器実測図（縮尺 1/4）	117
第87図	造構変遷図（縮尺 1/300）	120

図版目次

- 図版1 (1) 遺跡全景(東より)
(2) 遺跡全景(西より)
- 図版2 (1) 1・2号竪穴住居跡付近(西より)
(2) 1号竪穴住居跡(北より)
- 図版3 (1) 2・3号竪穴住居跡, 1号袋状竪穴, 3号土塙付近(北より)
(2) 2・3号竪穴住居跡(北より)
- 図版4 (1) 5号竪穴住居跡, 2号袋状竪穴(東より)
(2) 5号竪穴住居跡(北より)
- 図版5 (1) 6・7号竪穴住居跡付近, 及び作業風景(東より)
(2) 6・7号竪穴住居跡(東より)
- 図版6 (1) 8号竪穴住居跡(北より)
(2) 1号袋状竪穴(東より)
- 図版7 (1) 2号袋状竪穴(北より)
(2) 6号土塙付近(西より)
- 図版8 (1) 石棺, 土塙墓群(西より)
(2) 1号木棺墓(北より)
- 図版9 (1) 1号箱式石棺墓(南より)
(2) 2号箱式石棺墓(西より)
- 図版10 (1) 2号土塙墓(西より)
(2) 大溝1全景(北より)
- 図版11 (1) 大溝1南半(北より)
(2) 大溝1南半(南より)
- 図版12 (1) 大溝1北半・南半(北より)
(2) 大溝2全景(北西より)
- 図版13 (1) 大溝2東半(西より)
(2) 大溝2中央, 5号袋状竪穴(西より)
- 図版14 (1) 2号竪穴住居跡出土土器
(2) 5号竪穴住居跡出土土器
- 図版15 (1) 5号竪穴住居跡出土土器(上半)

- (2) 2号袋状堅穴出土土器(下半)
- 図版16 2号袋状堅穴出土土器
- 図版17 3・4・5号袋状堅穴出土土器
- 図版18 大溝1出土土器(その1)
- 図版19 大溝1出土土器(その2)
- 図版20 大溝1出土土器(その3)
- 図版21 (1) 大溝2出土土器
(2) 表土中出土土器
- 図版22 (1) 各遺構出土鐵器
(2) 各遺構出土砥石・投彈・紡錘車
- 図版23 (1) 各遺構出土石庖丁・石劍
(2) 各遺構出土磨製石斧・砥石
(3) 各遺構出土打製石器

表 目 次

	頁
第1表 九州横断道路関係遺跡一覧表	2～3 折込
第2表 堅穴住居跡一覧表	34
第3表 袋状堅穴一覧表	57
第4表 大溝1下層出土土器觀察表	80
第5表 大溝1上・中層出土土器觀察表	95
第6表 大溝2出土土器觀察表	109
第7表 出土變形土器分類表	123

I 調査に至る経過

高速自動車国道九州横断自動車道（長崎～大分間）のうち、長崎県大村市から大分県日田市にかけての基本計画は、昭和44年1月22日に決定された。

昭和48年10月19日には、佐賀県鳥栖市～大分県日田市間にについての施工命令が建設大臣から発せられ、その後、建設計画が進められた。

当委員会においては、埋蔵文化財を中心とした事前の遺跡分布調査を昭和44年度に行ない、ルート決定に先立っての資料を供した。この間及びその後の埋蔵文化財調査と横断自動車道建設に関連する諸経緯については、既刊の『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告一―』中の「I 調査に至る経過」（福岡県教育委員会 1982）に詳しく述べてあるので、参照されたい。

さて、本遺跡は、昭和54年7月から12月にかけて当委員会が発掘調査を実施し、調査報告書も既刊している、西原遺跡（A・B地点）の東に隣接する。A・B両地点は、台地線辺からやや中央寄り（C地点からすると西方）に在り、第2次世界大戦時の高射砲部隊陣地跡により削平を受けており、おもだつた検出遺構は火薬臺2基のみであった。

今回調査を行なったC地点は、A・B両地点発掘調査の際には、北半に家屋が残っており、調査に着手し得ないままの地点であった。昭和57年8月、道路公団から、工事用道路の建設にかかりたいが、西原遺跡発掘調査は、完了しているかとの確認の照会があった。当委員会は、A・B地点のみ終了しており、C地点は全く未着手の状態であることを申し入れ、協議が行なわれた。後、直ちに当委員会職員による試掘調査を行ない、弥生・古墳時代の集落関係の遺跡であることが確認された。遺跡北半は、A・B地点同様、高射砲陣地関係の建物のコンクリート基礎が縦横に走り、遺構は大きく擾乱・削平を受けていた。北半の家屋の立ち退きが遅れていたため、遺構の残る南半部に工事用道路を通したいとの意向であったので、直ちに発掘調査の準備にとりかかった。西原遺跡全体が調査完了という道路公団側の勘違いにより工事開始時期が目前にせまっており、かなりあわただしく発掘調査開始となつた事実は、今後の双方の連絡・協議のより緊密化の必要性を考えさせる良い教訓となった。

以上の経過のもとに、発掘に着手した次第であるが、調査期間中は、重機の優先的導入、作業員の大量投入、そして、他に例を見ない程の各種の内外の協力を得て、順調に作業は進展した。大溝等の深い遺構の困難な掘削、期間後半の雨続きの悪条件にも関わらず、1ヶ月間という調査予定期間そのままで無事終了することが出来た。ひとえに、関係各位の御協力の賜物である。記して感謝したい。

I 調査に至る経過



第1図 路線図(縮尺 1/780,000)

調査期間、面積、調査関係者は以下のとおりである。

調査期間

自 昭和57年9月1日

至 昭和57年10月2日

調査面積 1,160m²

調査関係者(昭和57年度)

第1表 九州横断道路関係遺跡一覧表

(単位 m)

地点	遺跡名	所在地	内 容	面積	調査地区と面積				備考	報告書
					54年度	55	56	57		
1	正尻遺跡	小郡市小郡	弥生集落・歷史牆	10,000					5,000	
2	" "		弥生・古墳散布地	10,400						
3	" 大板井		弥生・吉、小郡宮圓墳	910						
4	" "		大坂井城跡	9,200						
5	" 井上		散布地	3,600						
6	" 藤原町		弥生・古墳散布地(首御源)	32,000						
7	" 今隈		弥生散布地	7,200						
8	大刀洗町大字山鹿		中盐散布地	4,000						
9	" "		弥生・古墳・壁塀	10,800						
10	" 甲糸水郡	"		34,400		700				完了
11	宮原・立野遺跡	甘木市大字中原	弥生・古墳・奈良・平安 墓葬	33,800		13,860	13,500	約10,000		2集
12	小石原川西条里	" 上猪	中世	48,000		810				完了
13	" 東条里	" 上猪馬田	"	56,000	200	7,600				完了 1集
14	上々浦遺跡	" 上浦	弥生・古墳集落	18,400	200					完了 1集
15	西原・下原遺跡	" 一つ木・屋永	弥生・古墳集落	54,800	A,B地点 3,850	下原 4,200	C地点 1,400			完了 1+2集
16	高原遺跡	" 屋永	興文・弥生・古墳集落	7,800				1,400		
17	" 牛鶴		墳墓	100						
18	" "		散布地	2,550						試掘の結果なし、完了
19	甘木市大字中島田	"		70,000						
20	朝倉町大直	"		8,400						
21	大森(乙王丸)		弥生・古墳集落	34,800		800				
22	銀塚南遺跡	" "	古墳集落	10,400						
23	" "		散布地	2,600						
24	" 鳥集院		中世散布地	2,400						
25	" "	" "	"	2,400						
26	" 箕川		散布地	1,600		70				未調査なし、完了
27	長島遺跡	" "	興文・弥生・古墳・奈良 墓葬	16,000		C地点 5,000	C地点 6,640			
28	" "		興文・歷史聚落	2,400		200	458			完了
29	原の東追跡	" 遠野	興文・弥生集落・墓地	16,800				600		
30	" "		箱式石棺	4,000						
31	" "		"	2,000						
32	" "		"	2,400		300				未調査なし、完了
33	" 山田		古墳	2,000						
34	" "		散布地	3,600						
35	" "		弥生・散布地	2,600						
36	" "		古墳散布地	2,000						
37	" "		"	2,400						
38	" "		弥生・中世・箱式石棺	125						
39	紀木町大字志波		弥生・古墳・中世散布地	22,000						
40	" "		中世・散布地	2,500						
41	" "	" "	"	18,000						
42	" "	"	一丁一石経	8,000						
43	" 久喜宮		古墳群	12,000						
44	" "		古墳4~5基	1,800						
45	" "		散布地	2,400						
46	" "		"	1,800						
47	" 林田		弥生・古墳・中世散布地	4,000						
48	" "		散布地	1,800						
49	" "		"	3,200						
50	" "		"	2,400						
51	" "		"	5,200						
52	" "		"	2,000						
53	" "		"	3,500						
54	" "		"	1,800						
55	" "		古墳	1,600						
56	" "		散布地	2,400						
57	細原古墳群	甘木市大字細原	古墳群、興文集落	8,000	測量 14,700	900	8,300	15,000	土取場	
58	山田サービスエリア	朝倉町大字山田	"	7,500	測量 4,435					

日本道路公团福岡建設局

局長	持永竜一郎
総務部長	田代勝重（前任）落合一彦
管理課長	布川 兼（前任）梅田道人
管理課長代理	野口利夫

日本道路公团福岡建設局甘木工事事務所

所長	江口正一（前任）乗松紀三
副所長	矢野浩司
" (技術担当)	中村義治
庶務課長	森本太助（前任）松下幸男
用地課長	鴻口萩男（前任）岩下 剛
工務課長	深町貞光（前任）山口宗雄
小郡工事区工事長	田口 裕
甘木工事区工事長	瀬戸邦雄
朝倉工事区工事長	吉永英一（前任）平沢 正

福岡県教育委員会

總 括

教育長	友野 隆
教育次長	守屋 尚
管理部長	森 英俊
管理部文化課長	藤井 功
" 課長補佐	中村一世

調 査

管理部文化課庶務係長	内山孝之（前任）松尾 満
" 事務主査	三島洋輝（前任）
" 主任主事	長谷川伸弘
" 調査第2係長	栗原和彦
" 主任技師	石山 繁
" 同	浜田信也
" 同	児玉真一
" 同	新原正典
" 同	中間研志（調査担当）
" 同	小池史哲

II 位置と環境

西原C遺跡は、福岡県甘木市大字里永字西原 4299-3・4, 4300, 4303~4307 番地に所在する。

北部九州の一大鉱倉地筑後平野に南面する朝倉山塊のうち、甘木市街地後背の安見ヶ城山・大平山（三角点所在～標高 315.1m）より舌状の洪積台地が南々西に約 5km 延びる。この台地の西縁は小石原川とその旧氾濫原となる。東縁は、南流して筑後川へと合流する佐田川によって削られており、その縁辺は、段崖状をなしている。

西原C遺跡は、現佐田川河道より西へ 300m の、前述の洪積台地の最東縁に位置し、眼下の佐田川旧氾濫原の水田面より 6 m の比高差を測る崖直上を占める。

本遺跡周辺の代表的な遺跡を概観してみよう。洪積台地の西南縁辺には、大正14年及びその後の度々の調査で鉄戈・貝輪等を出土した斐椎墓地である栗山遺跡（註1）があり、さらにその東南には弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての大集落跡である小田道遺跡（註2）が発掘調査されている。その南方の台地南端部には、代表的な前方後円墳 2基、すなわち、三角錐神獣鏡を副葬していた古式古墳である神藏前方後円墳（註3）、古式須恵器を供献し、線刻装飾を施した小田茶臼塚前方後円墳（註4）が占地する。更に本遺跡北方の大平山山麓の小支尾根上には、現在調査終了中の袖原古墳群（註5）を代表とするような数多くの群集墳とともに、形象埴輪をもつ鬼の枕前方後円墳（註6）、数多くの陶質土器の供獻・副葬がみられた特異な墳墓群である池の上・古寺遺跡（註7）が存在する。

以上の代表的な古墳群・遺跡のうちで、西原C遺跡に関連する時代（弥生時代中期初頭～後期、古墳時代前期）の遺跡について、更に詳述してみよう。

弥生時代中期前後

この時期の特に西原C遺跡で多く出土した中期初頭前後の出土遺物・遺構の様相についてみてみよう。

本遺跡の南々西 1.25km には小田集落遺跡（註8）が調査されている。A~D 地区に別れて、計 42軒の竪穴住居跡、土器窯状の土爐を含めた所謂貯蔵穴 84基、その他が検出されている。住居跡は円形、大型円形、隅丸方形、方形、長方形の各種プランを呈するものがあり、円形・大型円形が大旨弥生前期末～中期前葉～中葉の所産で、方形のものに明らかな後期のものがある。隅丸方形のものに中期前葉とされるものがある。更に長方形のものは特異であるが、時期



1. 西原遺跡
2. 上ノ浦遺跡
3. 栗原遺跡
4. 小山遺跡
5. カンノクラ古墳
6. 小瀬古墳
7. 小田茶臼塚古墳
8. 馬田遺跡
9. 宮原古墳
10. 石成古墳
11. 朝倉孤塚古墳
12. 古熊古墳群
13. 烏越古墳群
14. ヤツエ塚古墳
15. 城深古墳群
16. 田中原古墳
17. 板塙大郷古墳群
18. 植原古墳群
19. 野田・柿原遺跡
20. 追谷古墳群
21. 大岩東部古墳群
22. 大岩南部古墳群
23. 鬼追古墳群
24. 池の上遺跡
25. 鬼ノ枕古墳
26. 特丸古墳群
27. 持丸東部古墳群
28. 名古古墳群
29. 宮ノ前東部古墳群
30. 牛木遺跡
31. 依井遺跡
32. 天神社古墳
33. 乃木松古墳群
34. 天神山古墳群
35. 会比羅山古墳群
36. 師古墳群
37. 馬田りんりん石古墳
38. 高原遺跡
39. 山陽遺跡
40. 大久保古墳群
41. 小瀬古墳
42. 小隈古墳群
43. 松馬古墳
44. 桜の内古墳
45. 大郷金古墳
46. 西下野古墳
47. 高原遺跡
48. 宮原・立野遺跡

第2図 西原遺跡とその周辺遺跡分布図(縮尺 1/50,000)

に明確さを欠き、これに対する意見は「このようなものこそ朝鮮半島や春日市伯玄社遺跡に見られるように前期的な住居跡」であるという意見（註9）もある。近辺の平塚大麻寺遺跡1号住居跡が隅丸方形プランで中期前半とされるものと合わせて、当該地の特異性を物語るところとされる。

以上の中期段階における円形・隅丸方形乃至長方形プランの堅穴住居跡の混在とでも言うべき現象は、上記各遺跡の詳細な土器の検討結果を知り得ない筆者にとっては、現段階では判断に慎重を期したいとしか言い得ない。

弥生中期段階の集落は前記2例の他は明らかでないが、いずれも分布状況などから台地縁辺部近くに占地するようである。これに対して、墓地は、栗山壇棺墓地が西原C遺跡の南西2kmの台地西縁に調査されている。中期初頭～後期初頭の壇棺墓群で、当然周縁に、各期の大小の集落が想定される。上述の小田集落遺跡の東側の台地縁部にも弥生中期の壇棺片が散在しており、壇棺墓地が想定されている。これは西原C遺跡より南へ1kmの位置にある。西原C遺跡では、壇棺墓は発見されなかったが、弥生中期～後期の壇棺片が各遺構に混入しており、近辺に更に1つの壇棺墓地の存在を推定せるところである。

弥生時代後期前後

この時期の遺構・遺物は、小田道遺跡・小田集落遺跡等に、堅穴住居跡が多く発見されている。小田道遺跡では計64軒のうち、多くが弥生後期後半～古式土師器の時期のものである。ベッド状遺構を有するものも多く、西原C遺跡の同様遺構との比較において参考となる。

以上の各周辺遺跡と、本書報告の西原C遺跡との比較検討は、後章において詳述したい。

なお、昭和34年に西原遺跡の農道脇から、灰色凝灰岩質の石戈片が表面採集されている。

（註9）

- 註 1) 中山平次郎「筑前国朝倉郡福田村平塚字栗山新発掘の壇棺内遺物」考古学雑誌15-4 大正14年
「福岡県史跡名勝天然記念物調査報告書」第一輯 大正14年
「埋もれていた朝倉文化」福岡県立朝倉高等学校 1969
「栗山遺跡」甘木市文化財調査報告 第12集 甘木市教育委員会 1982
- 註 2) 「小田道遺跡」甘木市文化財調査報告 第8集 甘木市教育委員会 1981
- 註 3) 「神藏古墳」甘木市文化財調査報告 第3集 甘木市教育委員会 1978
- 註 4) 「小田茶臼塚古墳」甘木市文化財調査報告 第4集 甘木市教育委員会 1979
- 註 5) 福岡県教育委員会が、1981年度より九州横断自動車道建設の土採場の事前調査として継続中の古墳群である。本年度その一部が報告される予定である。
- 註 6) 前掲註1の「埋もれていた朝倉文化」

III 各遺構と出土遺物

- 註 7) 「池の上墳墓群」甘木市文化財調査報告 第5集 甘木市教育委員会 1979
「古寺墳墓群」甘木市文化財調査報告 第14集 甘木市教育委員会 1982
「古寺墳墓群 II」甘木市文化財調査報告 第18集 甘木市教育委員会 1983
- 註 8) 「小田集落跡」甘木市文化財調査報告 第2集 甘木市教育委員会 1974
- 註 9) 柳田康雄「甘木市史」上巻 甘木市史編さん委員会 1982

III 各遺構と出土遺物

当該地周辺は從来より縄文晩期～弥生時代を中心とした散布地として知られていた。（「位置と環境」の章を参照）試掘の結果も、弥生後期の遺物を中心とした遺構と考えられた。

そのため、路線幅を全面発掘することとしたが、路線中心杭より北半は、旧陸軍高射砲部隊の陣地関係の建物基礎によって著しく擾乱されていたため、南半部のみの調査となった。

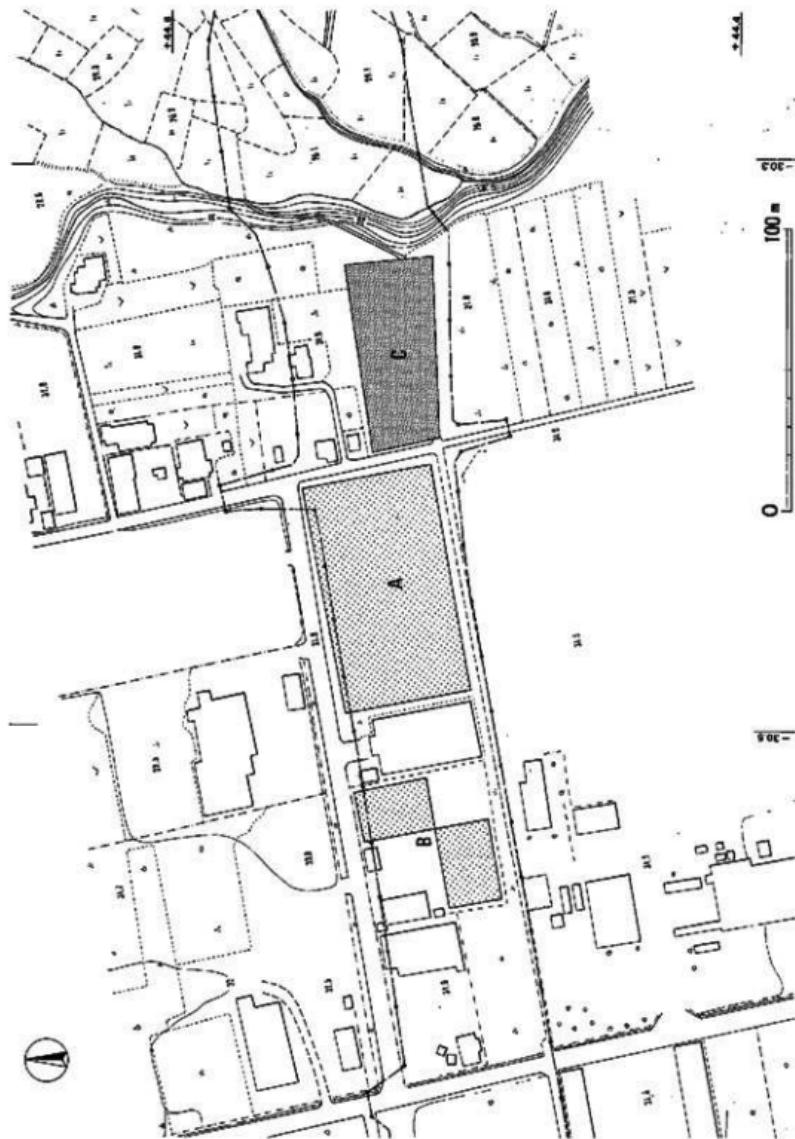
重機を投入して、表土耕作を行なった。20～30cmの耕作土の下に、厚い部分でも10cm程度の薄い黒色包含層が認められ、弥生中期初頭を中心とした土器細片が出土した。この下に古墳～弥生時代各遺構面が検出された。

東端では遺構面が深く、現地表面より1m前後の部分もあった。これは、もともと東縁崖方向へ傾斜していた旧地形を、後世・開墾等によって整地・盛土したものである。これに対して西端寄りでは浅く、地表下30cm前後で暗紫褐色の砂質土層となり、遺構は皆無の状態である。

発掘範囲の中央を東西に新しい溝（コンクリート塹等を含む）が走り、東北隅には鉄筋コンクリートの建物基礎が走る。

遺構は、南北に大きく弧を描いて延びる大溝1があり、それと中央部北端で切り合って西北西から東南東へ直線的に走る大溝2が検出された。竪穴住居跡8、袋状竪穴5、箱式石棺墓

第3図 四郷遺跡地形図(縮尺 1/2,000)



Ⅲ 各遺構と出土遺物

2, 木棺墓 1, 土塙墓 2, 土塙 6, 柱穴群などの遺構は絶て、大溝 1 の東側に認められ、これより西側は A・B 地点同様、後世の削平によるものか皆無である。

地山（遺構検出面）は、大溝 1 より西半では前述の如く、暗紫褐色砂質土で、東半のうち 4 号竖穴住居跡～6 号竖穴住居跡～8 号竖穴住居跡から北東隅までは、黒灰色粘質土、それ以南は黄褐色ローム質粘質土層である。

主な遺構どうしの切合の関係は下記の如くである。（矢印は古→新を示す）



1 竖穴住居跡

1号竖穴住居跡（第5図、図版2）

西辺の南北長372cm、北辺の東西長340cm + α を測る方形プランの竖穴住居跡である。最大深さは33cmを測り、北東側で4号竖穴住居跡を切る。

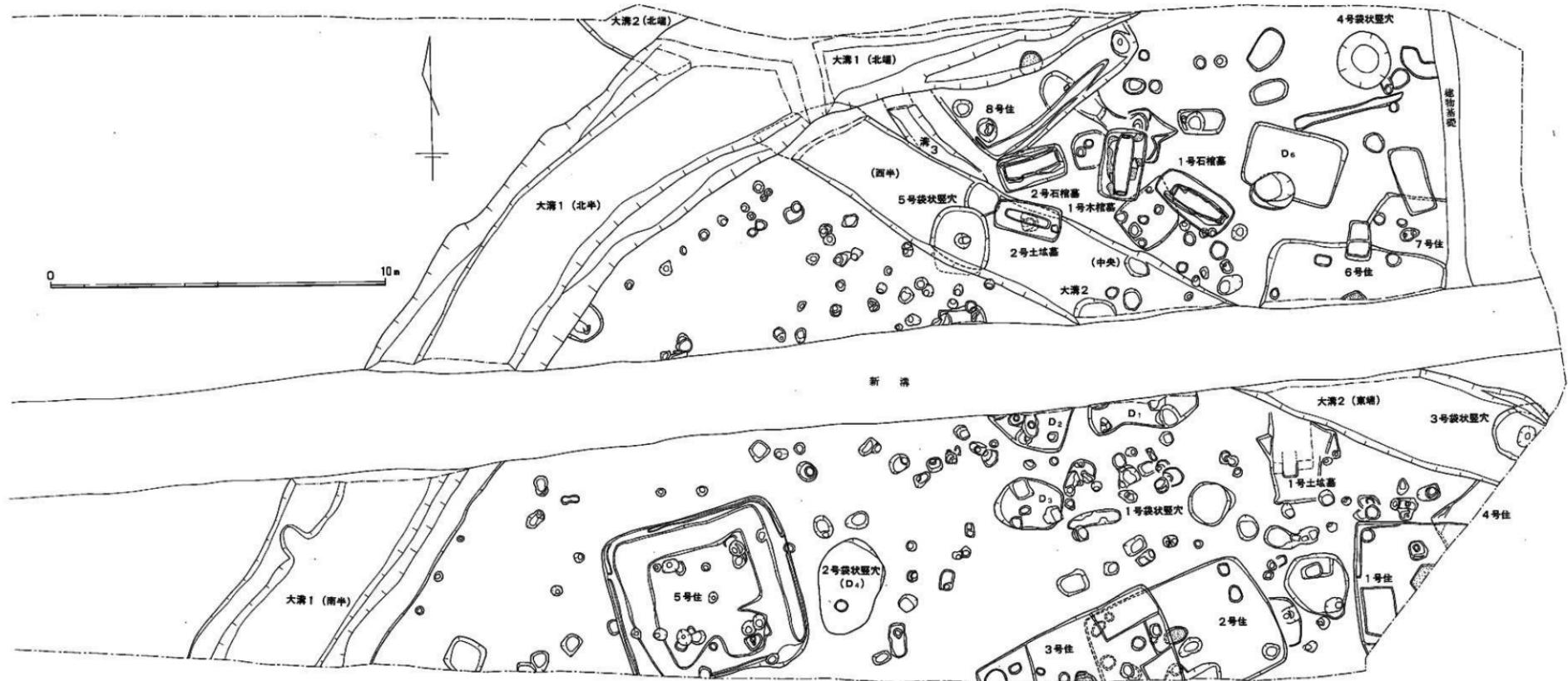
炉は中央に在り、径90cm、深さ5cm内外の不整形の浅い穴を掘っており、中には炭・灰が充填されていた。主柱穴は、炉の北側に検出され、床面よりの深さ33cmを測る。炉をはさんで対になる位置に、もう一本存在するものと推定される。

ベッド状遺構が、南西隅に検出された。100cm × 150cm の長方形で、床面からの高さ10cmで、黄色土地山を割り出したものである。住居跡の壁との間は周壁溝が巡る。北西隅にはみられないが、おそらく発掘区外の南東隅に対応するように設けられていると推定される。

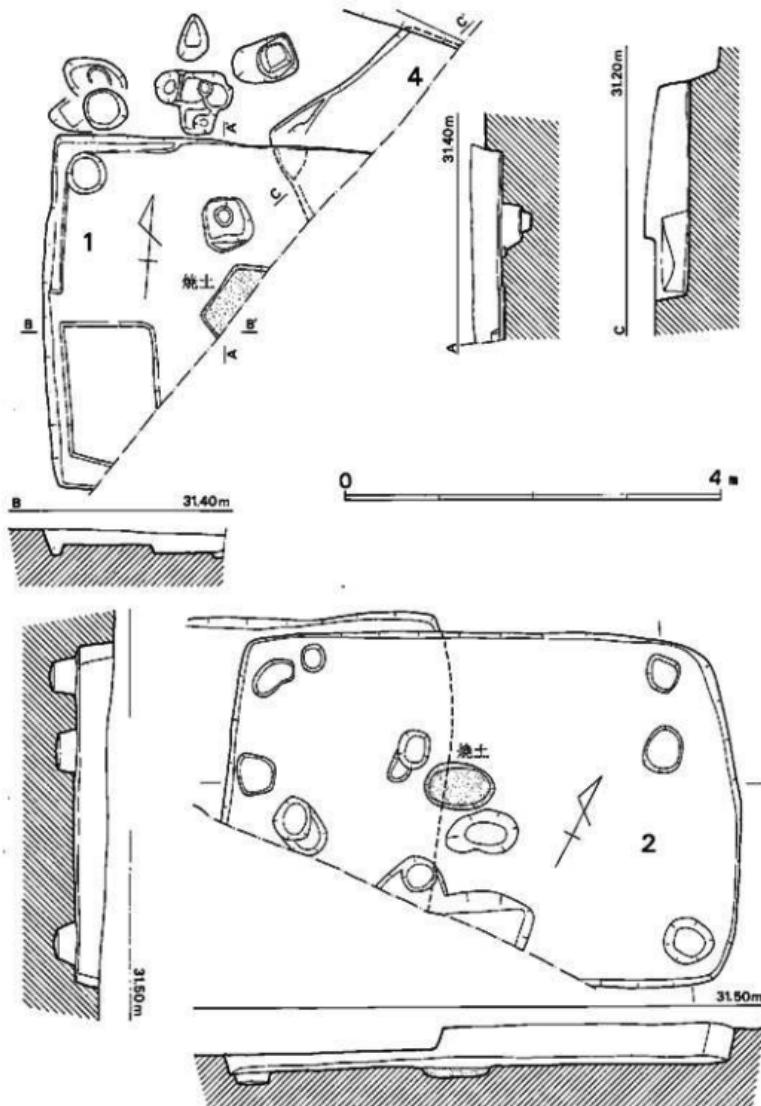
周壁溝は、北西隅付近と、上記のベッド状遺構周縁に認められる。幅7～15cmのやや広いタイプで、深さも5cm内外と浅い。

出土遺物（第6・7図）

甕（1～3）1は、頸部内面で稜をつくらずに丸く外反する口縁部片である。口径20.6cmに復

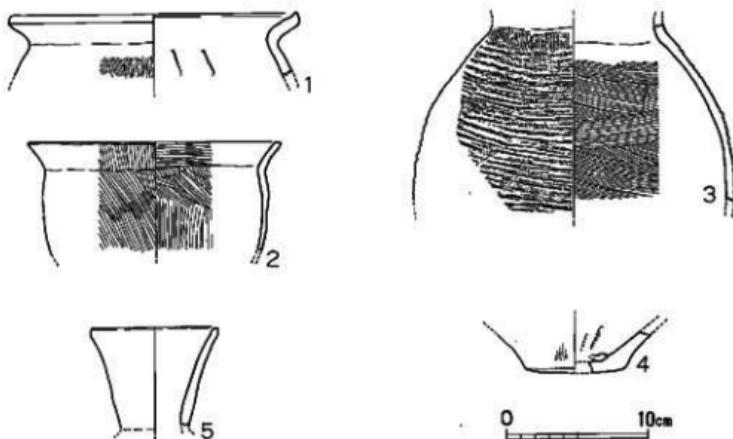


第4图 遗迹全休造情形配置图 (缩尺 1/100)



第5図 1・2・4号墳穴住居跡測定図(縮尺 1/80)

三 各遺構と出土遺物



第5図 1号竖穴住居跡出土土器実測図(その1) (縮尺 1/4)

元でき、胸部は丸味を帯びて張るものと考えられる。口縁上端を短かく突出させるようにつまみ出す特徴を有する。口縁内外面は、横ナデ、胸部外面は細かい縦ハケ調整を施す。胸部内面は横或いは斜め方向のハケ工具端座痕を残しており、その上から斜め方向のナデを行なう。胎土に粗砂粒をかなり含み、焼成良好で、内面は淡褐色、外面は暗褐色を呈する。

2は、全体に薄手の小型壺で、ほとんど張らない胸部から、屈折して直線的に開く口縁につくる。口径18.0cm、胸部最大径16.0cmを測り、口縁上端は小さい平坦面をなす。外面は粗い縦ハケ調整を施し、口縁内面は横方向の粗いハケを行なう。胸部内面は、上半が斜め方向の縦なハケ、下半は粗い縦ハケ調整を施す。口縁～胸部上半の外面には煤が付着する。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で、内面淡灰褐色、外面は暗褐色を呈する。口縁周のうち1/4のみ残存する破片である。

3は、やや下ぶくらみ気味に丸く張る胸部をなす。頸部内面には稜を残し、胸部最大径22.6cm、頸部径12.0cmを測る。全体にやや薄手で、頸部から胸部上端までの外面は粗い縦ハケ調整を施す。胸部外面は横位のやや粗い叩きを全面に施す。叩き調整が先で、上端のハケ調整はその後に施している。頸部から胸部上端の内面は横ナデ調整を施し、胸部内面には細かい横ハケを行なっている。胎土に細砂粒を若干含むが、かなり精良である。焼成良好で、内外面ともに淡灰白褐色を呈する。全体の1/4のみ残存する。

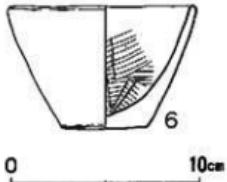
底部(4)底径7.0cmを測り、底外面がやや凸レンズ状にふくらむ類である。胸部外面は、粗

1 号竪穴住居跡

い縦ハケ調整の上をナデ消しており、内面は横位のハケの上をナデ消している。底内面には指オサニ痕がみられる。以上の調査法や、器形などから、壺の底部かと考えられる。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成は不良で、白褐色を呈する。1/2弱のみ残存する。

長頸壺（5）頸部つけ根からやや直線的に開く類の長頸壺口縁～頸部片である。口径9.0cm、頸部径4.8cm、つけ根までの高さ7.2cmを測る。口縁端部は丸くおさめ、その内側はややへこむ。口縁内外面は横ナデ調整を施し、頸部は内外面ともに縦方向のナデ調整を行なう。胎土に粗砂粒をかなり含み、焼成良好で、淡白褐色を呈する。1/4のみ残存する。

手捏ね鉢（6）やや厚い底部から直線的に開くタイプの小型鉢である。口径10.0cm、器高6.5cm、底径4.7cmを測り、底部外面はわずかに凸レンズ状にふくらむ。口縁周辺の内外面は横ナデ、外面は縦ナデ調整を施し、肩から底部内面は粗い横から斜めのハケ調整を施す。底部外面はナデツケ状を呈する。口縁上面はやや波状をなし、全体に手捏ね状である。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成やや不良で、淡褐色～灰褐色を呈する。口縁部の1/2を欠くのみである。



第7図 1号竪穴住居跡出土土器
実測図（その2）
(縮尺 1/3)

以上の出土遺物についてみてみると、1は、やや跳ね上がり的な口縁に、内面に縦をつくらす丸く屈曲して、肩の張る器形から、弥生時代後期のうちでも、最終末期までは下らない様相を示す。2は内外にハケを残し、3も外面の叩きと内面のハケが特徴的である。5の長頸壺、4の底部の形態などから、1以外は後期終末期の特徴を如実に示す。

住居跡もベッドを持った2本主柱の形態をなし、出土遺物から考えても、弥生後期終末の所産と考えられよう。

2号竪穴住居跡（第5図、図版3）

1号竪穴住居跡の西南側に、3号竪穴住居跡に西半を切られて存在し、長方形プランをなす。南西隅付近は発掘範囲外で、調査していないが、四隅に主柱穴を認めると考えられる。東西に550cm、南北に377cmを測り、隅のコーナーのプランはやや丸味をおびる。床面の深さは、最大44cmを残し、ほぼ中央に75×49cm、深さ10cmの楕円形炉が検出され、炭、焼土がつまっていた。南辺の中程に、床面からの深さ35cm程のやや大きめの土塗状の掘込みがみられ、土器もかなり出土した。

住居跡内全体に炭化物が多量にみられ、焼失家庭と考えられる。出土土器量も多く、全体に散乱する。ベッド状遺構・周壁溝は検出されなかった。床面は、基盤面が黄褐色砂疊層であるためか、踏み締められた形跡は認められない。

III 各遺構と出土遺物

出土遺物（第8～11図、図版14）

甕（1～7）1は、長胴化したいくらか張る胴部から、内面に明確な稜線をつくり、屈折して口縁に開く。口縁部は、やや大きく開き、口唇部近くで更に水平方向へ曲がって伸びる。口唇外端面は浅い沈線状をなし、口縁外面下位でわずかに外方へふくらみをみせる。口径28.6cm、胴部最大径28.8cmを測る。口唇部内外面は横ナデ調整、胴部外面は粗い縦ハケを施す。口縁内面は横ナデ、胴部内面は粗い斜め方向のハケ調整を行なうが、下半はナデ消す。胴部外面上半には部分的に煤が付着する。胎土に粗石英粒、長石、雲母片等を多く含む。焼成はやや良好で、外面淡褐色から暗褐色、内面は黄褐色を呈する。口縁部の一部を欠損するのみである。

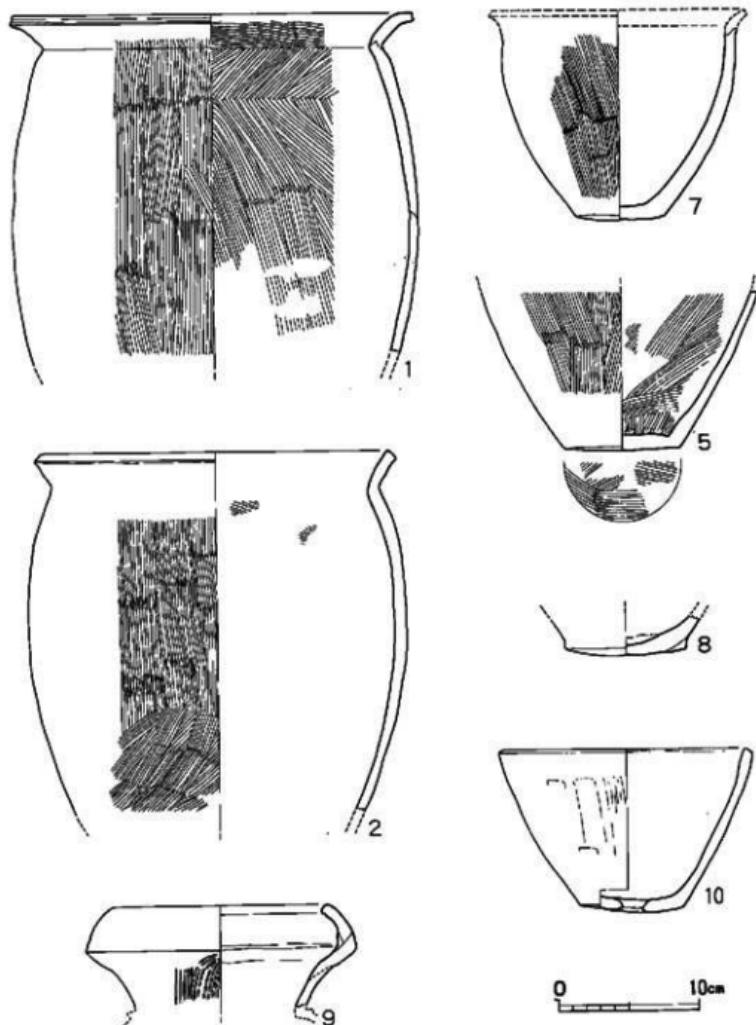
2は、やや長胴化しており、いくらか張る胴部から、内面に稜をつくる。丸味をおびて軽く外反するのみの口縁を有する。口縁外面中途でわずかに外ぶくらみをみせる。口径25.7cm、胴部最大径26.9cmを測る。口縁内外面は、横ナデ調整、胴部外面はやや細かい縦ハケを施すが、下半は粗な斜め方向の施法となる。胴部内面は、斜めハケの上を丁寧にナデ消してあり、わずかにハケを残すのみである。胎土に粗石英粒、長石、黒雲母片を多く含む。焼成はやや良好で、内面は淡茶褐色から暗褐色をなし、外面は淡灰褐色から淡茶色乃至暗褐色を呈する。口縁～胴部上半の外面には煤がこびりつく。縦方向に1/2弱残存する。

3は、上位で張る胴部から、内面に稜をつくり、屈折して口縁へと開く。口唇部には沈線を巡らせ、口縁外面はわずかに中ぶくらみする。口径25.6cm、胴部最大径28.1cmを測る。口縁内面は横ハケの上を横ナデ、口縁外面は横ナデ調整を施す。胴部外面は粗い縦ハケ、内面は横から斜め方向の粗いハケ調整を行なう。胎土に粗石英・長石・雲母片を多く含む。焼成は良好で、内面は黄褐色から淡茶褐色、外面は黄褐色から黒褐色を呈する。煤は殆んど付着していない。全周の3/4残存する。

4は、胴部が3ほどには張らない類で、頭部内面に稜をつくり、口縁はやや長く直線的に開く。口唇外端部は突出して、口縁外面中途で極くわずかに中ぶくらみをみせる。口径25.2cm、胴部最大径24.5cmを測り、胴部より口縁部径の方が大きい。胴部外面にはやや目の細かい縦ハケ調整がみられるが、内面は丁寧なナデによりハケが消されて、板状工具端の圧痕のみが残る。口縁部内外面は横ナデ調整が施されている。口縁外面付近には煤が付着している。胎土に粗石英粒、長石をかなり含む。焼成良好で、内面は淡茶褐色から灰黄褐色、外面は淡灰黄褐色を呈する。全周の1/2弱が残存する。

5は、胴部下半～底部付近で底部外面が極く僅かに凸レンズ状にふくらみをみせる。底径8.3cmを測り、胴部外面は粗い縦ハケ調整を施し、下端近辺はナデ消している。胴部内面は粗く縦な斜めハケを施し、底外面にも縦なハケがみられる。胴部外面下半は二次火熱を受け赤変する。胎土に粗砂粒を多く含む。焼成は良好で内面は黄褐色から暗黄褐色、外面は暗赤褐色から暗黄褐色を呈す。

1 整穴住居跡



第8図 2号整穴住居跡出土土器実測図（その1）（縮尺 1/4）

Ⅲ 各造構と出土遺物

6は、厚手の底部を有する胴部下半で、底径9.4cm、胴部最大径31.1cmを測る。底部は中心寄りが上げ底状をなし、全体にやや大型の壺であることをうかがわせる。胴部外面は粗い縦な継ハケを施し、内面はナデている。板状工具端圧痕が多く残る。内面底部付近には指オサエ痕を残す。黒漆部が底部と、胴部中位の片側のみにみられる。胴部中位には煤が若干付着する。

胎土に粗砂粒が多く含み、焼成良好で、内面暗褐色、外表面は淡褐色から暗褐色を呈する。

7は、口縁部のみを欠く小型壺で、胴部の最大径16.7cm、底径6.4cm、推定器高14.7cm前後で復元される。胴部の壁は厚く、凸レンズ状にふくらむ底部はやや薄くなる。胴部外面はやや細かい縦ハケ調整を施し、内面は丁寧にナデしている。胴部外面上半には部分的に煤が付着する。胎土に粗石英粒、細雲母片を多量に含む。焼成は良好で、外表面は暗黄色から黒褐色、内面は茶色をなす。

壺(8・9)9は、複合口縁壺の口縁部片で、外面に稜をつくり、口縁部は内窪状に内傾する。口径15.0cm、口縁接合部径19.1cmを測り、口縁内外面は横ナデ調整を施す。頸部外面は粗い縦ハケ、内面は粗い横ナデ調整を行なう。胎土に粗砂粒が多く含み、焼成は良好で、内面は淡茶色、外表面は淡茶褐色をなす。全周の1/4弱のみ残存する破片である。

8は、壺底部と考えられ、凸レンズ状にふくらむ類である。底径8.6cmを測り、器表面は全面が磨滅しており、調整法は不明である。胎土に粗砂粒が多く含み、焼成良好で、全面が二次火熱を受けて淡灰赤色をなす。

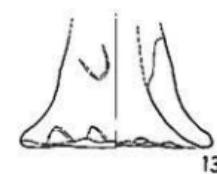
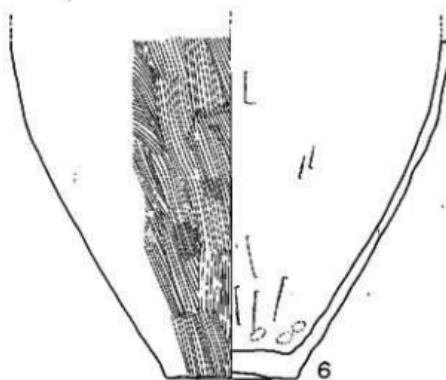
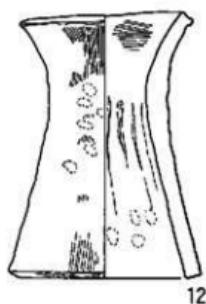
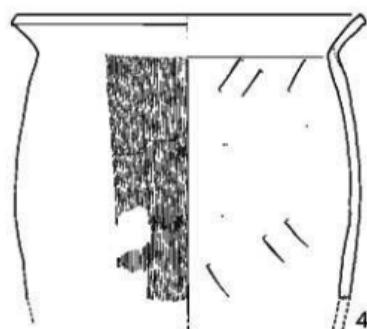
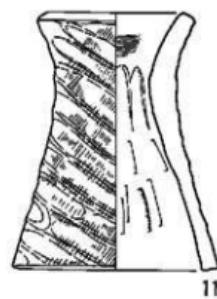
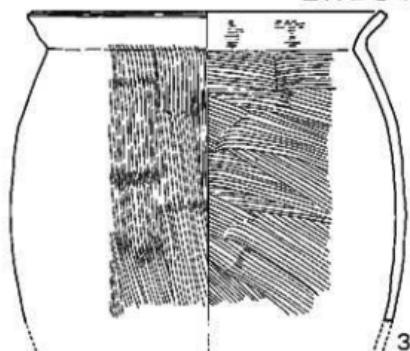
器台(11~13)11は、体部上位でくびれて、受け部がいくらか開く類である。脚端は内端で接地する。受け部径11.2cm、器高18.1cm、下端部径14.7cmを測る。受け部縁辺は横ナデ調整、体部外面は、シボリによる斜めらせん方向の指圧痕を強く残し、その上に粗い斜めハケを施す。内面上部には粗な横ハケがみられ、くびれ部内面はシボリ痕のシワを消すように縦方向のナデ上げがみられる。内面下半は横ハケの上を丁寧にナデ消している。胎土に粗砂粒をかなり含み、焼成良好で、外表面は暗褐色、内面は暗黄色から暗褐色をなす。受け部付近を2/3ほど欠損するのみである。

12は、体部上位でくびれる類で、受け部が水平ではなく、やや斜めになる。受け部端面は凹状となる。受け部径12.3cm、器高18.4cm、下端部径13.7cmを測る。体部外面は縦ハケの上をナデ消しており、指オサエの凹凸が著しい。内面上位には横ハケがみられ、中位にはシボリ痕シワを残す。内端で接地する下端面にも回転方向のハケが施される。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、外表面は暗褐色から暗赤褐色、内面は暗茶褐色を呈する。外表面には著しい二次火熱痕はみられない。上端受け部のかなりを欠くのみで他は殆んど完形である。

13は、部厚い手捏ね的な感じのする類で、下端部径13.6cmを測る。全面ナデしており、指圧痕が各所に残っている。胎土に粗砂粒多く含み、焼成良好で、暗茶褐色を呈する。

鉢(10・14)10は、底部が凸レンズ状にふくらむ類の鉢で、底部中央に焼成後一孔を穿つ。口

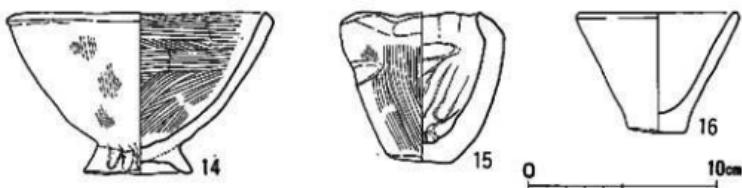
1 壓穴住居跡



0 15cm

第1図 2号竪穴住居跡出土土器実測図(その2) (縮尺 1/4)

III 各造構と出土遺物



第10図 2号窓穴住居跡出土土器実測図（その3）（縮尺 1/3）

径18.0cm、器高11.7cm、底径7.4cmを測る。口縁内外面は横ナデ調整、体部外面は板状工具による縦方向擦痕が残る。内面はナデしている。胎土に粗石英粒を若干含むが、わりと精良である。焼成やや良好で、暗褐色から黒褐色を呈する。

14は、脚台付きの小形鉢で、口径14.2cm、器高8.5cm、脚部径5.7cmを測る。口唇部外端は部分的に粘土がはみ出す。脚部は手捏ね状で凹凸が著しい。口縁内外面は横ナデ、体部内面は粗い横～斜めハケ、外面は縦ハケの上をナデ消している。胎土に石英粒、長石、雲母片を多く含む。焼成良好で淡褐色から暗褐色をなす。2/3残存する。

ミニチュア土器（15・16）16は、部厚い器壁の鉢状土器である。口縁部の半分は内湾状をなし、底部は平底状をなす。口径8.7cm、器高7.8cm、底径3.3cmを測る。体部外面はやや粗い縦ハケを施し、半周ほどはナデして消えている。内面は指オサエナデ上げのままである。壳形であるが全体に手捏ねそのものである。胎土に粗砂粒多く含み、焼成やや良好で、内面は暗茶褐色、外面は縦半分は黒色で、他の半分は淡茶褐色をなす。

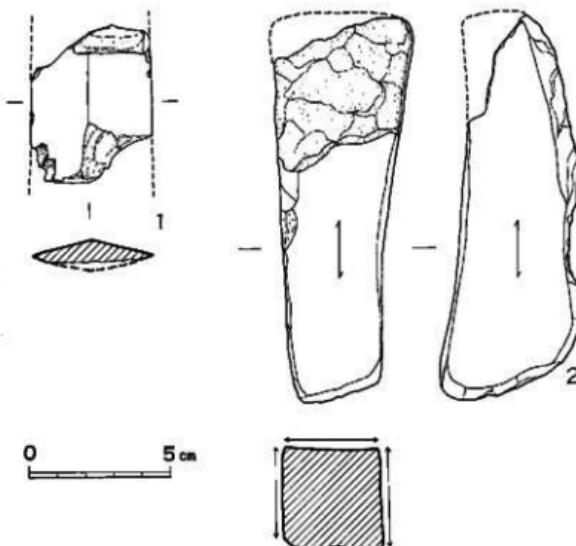
16は、小さな底部から直線的に開く鉢状の小品である。口径8.7cm、器高6.3cm、底径3.2cmを測る。内外面ともに丁寧なナデを施す。底部は厚く、やや傾斜しており、杏形器台のミニチュアかとも考えられる。胎土にいくらか粗石英、長石を含む。焼成良好で暗黄褐色をなす。

石劍（第11図-1）中央に鈎をつくる磨製の石劍、或いは石戈片である。石材は小豆色の輝緑凝灰岩を使用し、丁寧に研磨している。身幅4.3cm、厚さ1.1cmを測る。前時代のもので当住居跡内に混入したものと考えられる。

砥石（第11図-2）砂岩製の粗底で、三側面を使用している。上面はかなり使用して凹状になっている。長さ13.6cm、幅4.9～3.1cm、厚さ5.0～3.5cmを測る。

以上の2号窓穴住居跡出土遺物についてみてみよう。甕は1～3のように胴が張り、口縁部径より胴最大径の方が大きいものの方が多い、4のように胴があまり張らないものは1点のみである。甕底部も、6のようにしっかりした上部底状のもの、5・7のようにわずかに凸レンズ状を呈しきつた平底が主流で、丸底化するものは皆無である。複合口縁甕も、口

1 壺穴住居跡



第11図 2号壺穴住居跡出土石器実測図（縮尺 1/2）

縁が未だ丸味を帯びて内傾して、袋状口縁臺の傾向を残すが如くである。器台も部厚いボテボテのタイプのものは13のみで、他はわりと精製品である。以上の各器種の諸点より、弥生後期後葉のうちでもやや古相を残し、後期中葉により近い時期とされよう。

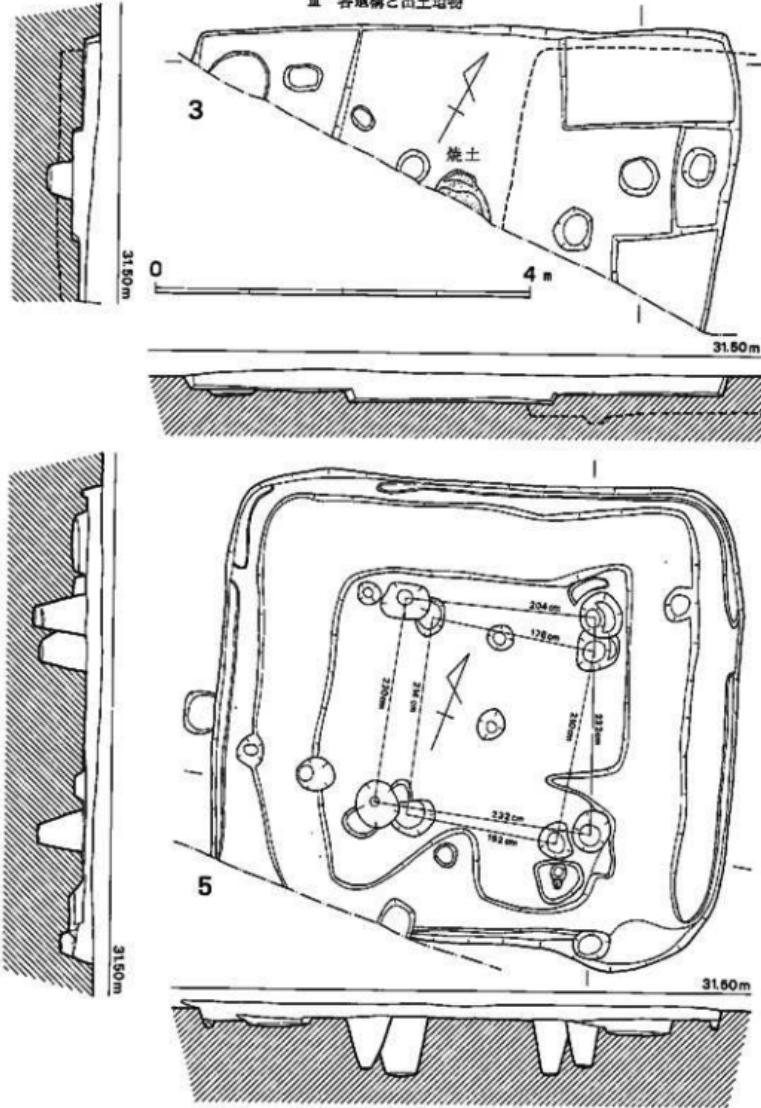
3号壺穴住居跡（第12図、図版3）

2号壺穴住居跡を切って西側に位置する。発掘範囲外にかなりを残すので全容は明らかではない。東西方向の長辺の長さ583cm、南北辺の長さ320cm+αを測る長方形プランを呈する。床面深さは34cmである。

中央に炭・灰のつまたが炉が検出され、炉の東側に柱穴があり、炉を挟んで対になる位置にもう一個の柱穴があると想定され、2主柱穴が考えられる。

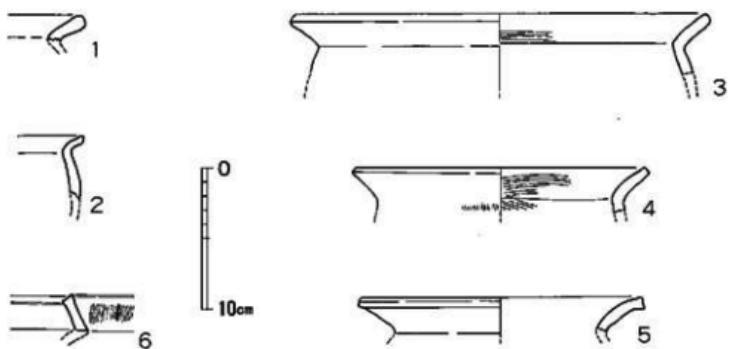
各コーナーにはペッド状遺構が削り出されており、規模のわかる東北隅のものは、長さ180cm、幅98cm、床面からの高さ10cmを測る。北西隅のものは東西幅が160cmあり、東北隅のものと同様に東西に長い類と考えられる。南東隅のものは東西幅が100cmで、南北に長いタイプであろう。このことからこの住居跡の南北長を推測すると370cm前後となる。周壁溝は検出されない。

III 各遺構と出土遺物



第12図 3・5号竪穴住居跡実測図(縮尺 1/60)

1 壁穴住居跡



第13図 3号壁穴住居跡出土土器実測図（縮尺 1/4）

出土遺物（第13図）

壺（1～5）1は、弥生中期末の口縁小片である。口縁部が丸く厚くなり、強く屈曲して開く類である。内外面ともに横ナデ調整を施し、外面には煤がわずかに付着する。胎土に粗砂粒をわずかに、細砂粒を多く含み、焼成やや良好で、内面は淡褐色、外面は暗褐色を呈する。

2はわずかに張る頸部から、頸部内面に稜をつくり、屈折して、丸味をおびて開く口縁をつける。口径15cm前後のかなりの小型品である。口縁内外面は横ナデ、頸部内外面ともに斜め方向のナデ調整を施す。胎土に粗砂若干含み、焼成良好で淡茶褐色をなす。

3は、頸部内面に稜をつくり、屈折してやや長めに延びる口縁となる。口縁内面はわずかにへこみ、頸部は少し張るだけとなるだろう。復元口径29.1cmを測り、器表は全体に磨滅して調整手法は不明であるが、口縁内面には粗い横ハケがわずかに残る。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で淡褐色をなす。

4は、あまり張らない頸部から、内面に稜をつくり、屈折してやや直接的に開く口縁となる。口縁部はわずかに凹状となり、復元口径21.0cmを測る。口縁内面は横ハケの上を横ナデ、頸部内面は粗い斜めハケ、外面は縦ハケ調整を行なう。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で淡褐色をなす。1/6残存の小片である。

5は、大きく外湾状に開く口縁片で、外面中途で中ぶくらみする。口縁外端面は凹状をなす。内外面ともに横ナデ、外面には煤がこびりつく。復元口径20.2cmを測り、粗砂粒を多く含む。焼成良好で、内面は暗～淡黄褐色、外面は暗褐色をなす。1/6のみ残存する小片である。

壺（6）複合口縁壺口縁小片である。接合部外面はシャープに稜をなし、直線的にやや内傾して立ち上がる口縁部を付ける。口縁部面はややへこみ、内外両端はそれぞれ突出する。外面に

Ⅲ 各遺構と出土遺物

は縦ハケが施され、他面は横ナデ調整となる。胎土に粗砂多く含み、焼成はやや不良で、淡褐色をなす。

以上の3号竪穴住居跡出土の土器は、すべて小片で確實に床面に残る完形品など皆無で、時期判定には良い状況ではない。1は中期末の所産で混入品であろう。3・4はあまり張らない胸部を有して、内面にハケを残し、5は口縁外面に中ぶくらみをみせる。6の複合口縁壺は口縁部が直線的に立ち、口唇内外端がつまみ出される。以上の諸点は、弥生後期終末期の特徴を示すものであり、ベッド状遺構を有する住居跡の構造も時期的に合致するところである。

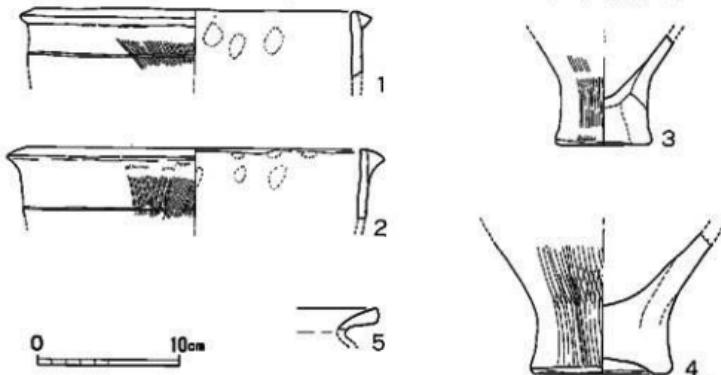
4号竪穴住居跡（第14図）

1号住居跡と大溝2にそれぞれ南半・北半を切られて、全容は明らかでない。両隅のみ確認出来て、方形住居跡となるかと考えられる。深さは47cmと深く、各辺の長さは230cm + α , 110cm + α を測る。

炉、柱穴等の構造は全く判からぬ。調査範囲内では周壁溝は認められない。

出土遺物（第14図）

甕（1～5）1～4は中期初頭の混入品である。1は、口縁外端に断面三角形の粘土を貼り付け、胸元上位にやや細めの沈線を一条巡らせたものである。復元口径24.9cmを測る。胸元外面には斜めのやや細かいハケ調整を施し、口縁内外面横ナデ、胸内面は丁寧にナデる。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、内面は明茶褐色、外面は暗褐色をなす。1/5残存する。



第14図 4号竪穴住居跡出土土器実測図（縮尺 1/4）

1 穫穴住居跡

2は、口縁外端に大きく断面三角形に粘土を貼り付け、頭上位に細めの沈線一条を巡らせたものである。復元口径26.6cmを測る。口縁内端は小さく突出しており、内面には指オサエ痕が多く残る。口縁内外面横ナデ調整、胴部外面にはやや細かい雜な様ハケを施す。胴内面は丁寧な継位のナデが行なわれる。胎土に粗砂粒多く含み、焼成良好、内面は淡褐色から茶褐色、外側は淡褐色から暗褐色を呈する。1/5現存する。

3は、中央がわずかに上げ底状となる充実した底部片である。底径6.9cm、底部厚さ3.3cmを測る。外面は粗い継ハケ、内面はナデ調整を行なう。胎土に粗砂粒多く含み、焼成良好で、内面は炭化物が付着して暗褐色をなし、外側は赤茶～暗黄褐色を呈する。

4は、かなりの大型甕の底部である。底径10.0cm、底部厚さ3.8cmを測り、大きく上げ底状となる。外面は極めて粗い継な様ハケ、内面はナデる。粗砂粒を多く含み、焼成は良好で内面は黄褐色、外側は黄～茶褐色をなす。

5は、強く屈曲して開く口縁小片で、端部へと肥厚する。口縁内面上位でごく僅かにへこみ、内外面ともに横ナデ調整が行なわれる。粗砂粒をいくらか含み、焼成や不良で、内面淡褐色～黒褐色、外側は淡茶褐色をなす。

以上の4号竪穴住居跡出土の土器は1～4の弥生中期初頭の土器と、5の中期末のものとに分類される。造構の切り合いからみると、弥生後期終末の1号住居跡より古く、更に、弥生中期末の大溝2より古いわけで、下限が決まる。出土土器により、新しい方の時期をとて、中期末の年代が考えられる。大溝2と同時併存したものではなく、僅かに前出する時期が与えられよう。

5号竪穴住居跡（第12図、図版4）

2、3号竪穴住居跡の西方に位置し、隅丸の方形プランを呈する。東西長557cm、南北長515cmで、深さは18cmしか残らない。

炉は検出されない。主柱穴は4本で、柱穴の切り合いより、建て替えが行なわれていたことが判明した。即ち、東西方向と北方へ各々20～40cm拡げた位置に新たに柱穴を掘っている。これら4主柱穴の外側で壁から60～25cmの間に幅広い浅い溝状の掘り込みがめぐる。この輪郭は明確で、壁の立ち上がりもしっかりしたものである。埋土はそれより上位の住居跡埋土と殆んど変わらない黒褐色土であった。住居跡壁とこの幅広い溝状の掘込みとの間には、中央部と同じ高さの平坦床面がある。これは東・西辺際で幅広く、北辺際では狭い。南辺際にはみられず、直接住居跡となる。当初、小郡市干渉遺跡・甘木市宮原遺跡で顕著にみられるような床面下の掘込みかと考えたこともあったが、輪郭のしっかりしていること、埋土が全く変わらないこと、底面もしっかりしていることなどから、住居跡の拡張によるものと確認できた。即

ち、初建時の柱穴の時の住居跡の輪郭が、この掘込みの外縁にあたるわけである。南辺際には前述した如き一段高い平坦面が無いこともこの辺の事情を如実に示している。つまり、南側の主柱穴2本は再建の際には東西には拡張するが、南方へは殆んど移動しておらず、住居跡自体も南側へは拡張していないということである。

住居跡壁廊の周壁溝は、やや狭い頸のものが全周各所に認められる。壁の保護の為の板材打ち込み痕の可能性も強い。

出土遺物（第15～18図、図版14・15）

弥生壺（1・2）1は、外面丹塗りの袋状口縁壺で、頸部上端に小さい断面三角凸脊をつまみ出している。口径6.0cm、袋部径8.6cmを測り、丹塗りは厚く丁寧である。袋部外面は横ヘラ磨き、頸部外面は継ヘラ磨きを行なう。孰れも丹塗り以前の調整である。胎土は精製されており、焼成やや不良で、地色は淡黄褐色を呈する。

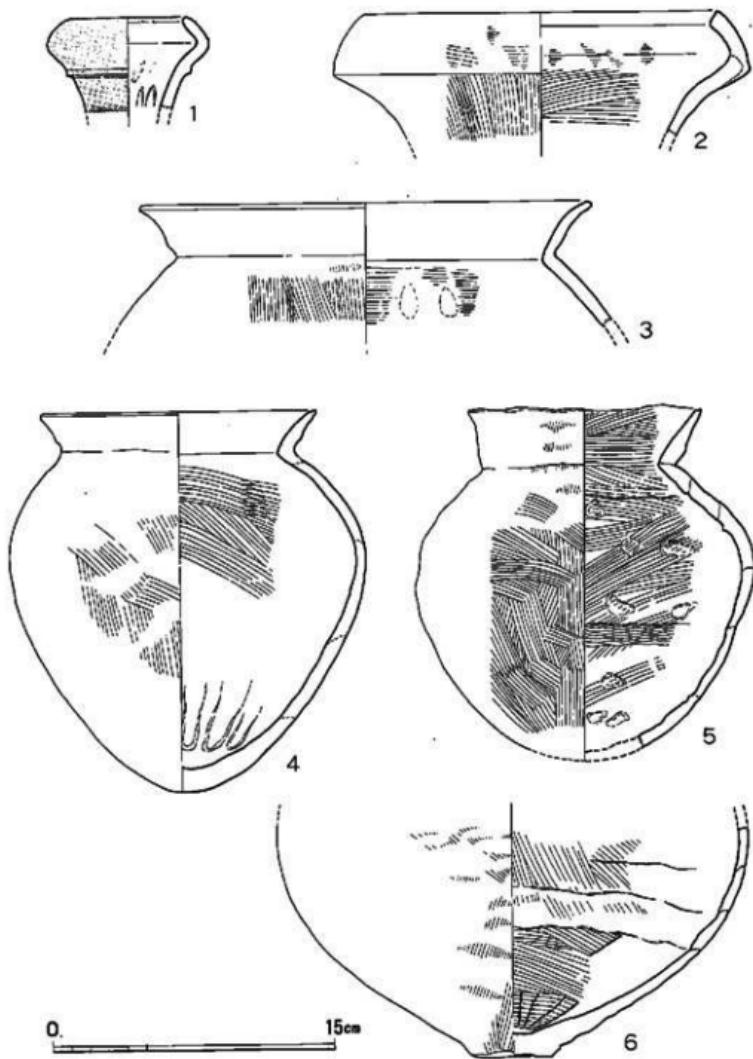
2は、外面に段をつくる複合口縁壺で、口縁部はやや内湾気味に内傾する。口径18.7cmを測り、口縁内外面は横ハケの上を横ナデする。頸部内面は粗い横ハケ、外面は粗い継ハケを施す。胎土に粗砂粒をかなり含み、焼きは良く、内面は黄褐色、外面は暗黄色から暗褐色をなす。1/4弱のみ残存する。

甕（3～11）3は、張る胴部から屈折してやや長く聞く薄手の口縁部をつける。口縁上半は更にわずかに外反し、外面下位で中ぶくらみをみせる。全体に薄手・精製な感じで、口径24.1cmを測る。口縁部内外面から胴部外面上端までは横ナデ、胴部外面はやや細かい継ハケ、内面は横ハケを施す。胎土に粗砂粒をかなり含み、焼成良好で、内面は淡黄褐色をなす。外面には煤がこびりつく。1/2残存する。

4は、完形で、胴上位に最大径を有し、尖底の如き丸底をなす類である。口縁外面中途で中ぶくらみして、頸部内面は綺い稜をつくる。口径14.8cm、器高20.1cm、胴部最大径18.9cmを測り、わりと小振りながら、器壁はやや厚く、底部も部厚い。口縁外面と、頸部直下の内外面まで横ナデ、胴部外面は粗い斜め、継方向のハケの上をナデ消す。胴部内面上半は横～斜めのハケ、下半はナデであり、更に底部近くは指オサエ痕が著しい。底部近辺は、二次火熱を受けて赤変しており、それ以上の外面は煤がこびりついて全面黒色をなす。胎土に粗砂粒を若干含むが、かなり精良である。焼成は良好で、内面は淡茶色から暗褐色をなす。

5は、口縁部の外傾度が弱く、やや肩が張り、最大径を上位に有する球形胴となる。口頸部の形態・傾きは、全周の8割方が断面図に示すとおりである。口縁外面下半で中ぶくらみし、口唇部は小さな面をなす。胴部は粘土糰巻き上げ痕が明瞭で、7段に巻き上げている。口径12.4cm、器高18.6cm、胴部最大径18.0cmを測り、全体に凹凸著しく、歪つとなる。口縁内面は雄な横ハケ、外面の胴部上端までは継ハケの上を横ナデ、胴部外面は極めて雄な横ハケ、内面は、指オサエ・ナデの上を雄な横～斜めハケを施す。胴部下半には黒斑部がみられる。胎土に

1 壺穴住居跡



第15図 5号壺穴住居跡出土土器実測図（その1）（縮尺 1/3）

III 各遺構と出土遺物

細石英、雲母をいくらか含むが、かなり精良である。焼成はやや不良で、内面は淡灰褐色、外側は上半が淡茶色、下半が暗褐色をなす。

6は、小さくきたない底部から、大きく張る胴部となる。胴部最大径25.0cm、底径4.8cmを測り、底部の中央は僅かにへこむ。胴部外面は斜め～継ハケの上を組み横ヘラ磨きが施され、内面は粗い斜めハケがみられる。胴中位では粘土縫接合痕が明瞭である。下半部の一端のみに黒斑部がみられる。胎土に石英、長石粒をかなり含み、焼成良好で淡褐色をなす。外面の磨き手法などから、壺下半部と考えられる。

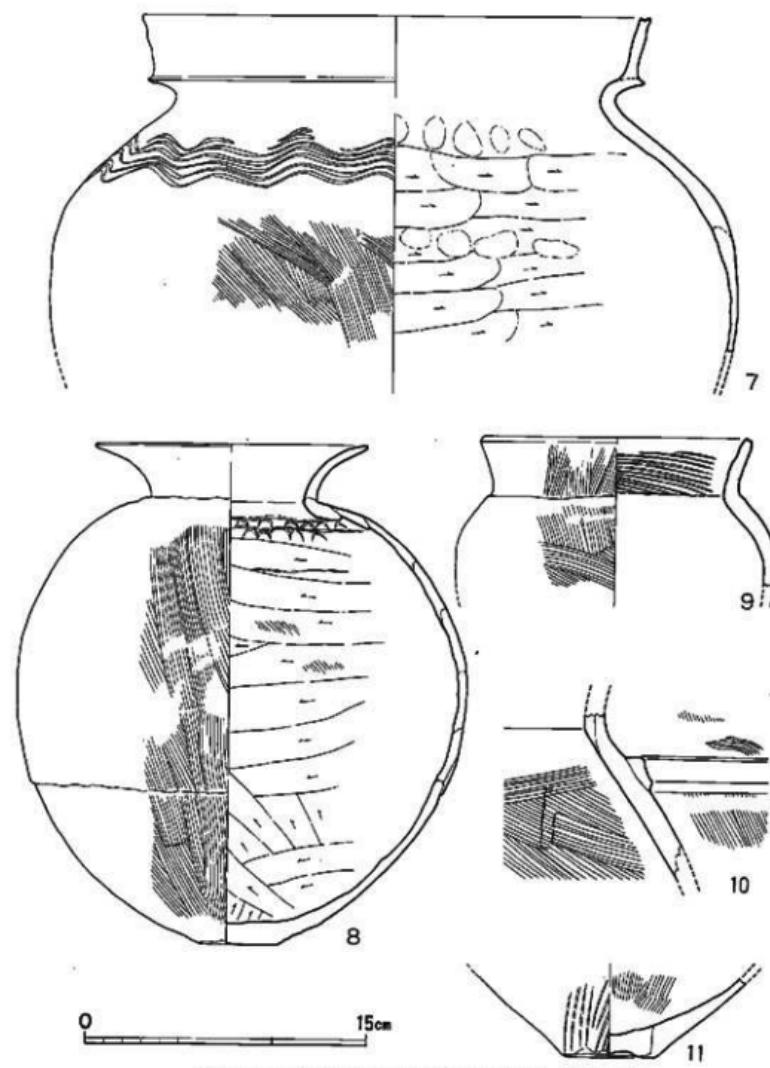
7は、肩が張り、口縁部がやや外傾して立ち上がる器形をなす。口唇面には沈線を廻らせ、口縁接合部外端はシャープに突出する。口径27.0cm、頸部径23.4cm、胴部最大径36.6cmを測る。口縁部内外面、及び胴部内面上端、胴部外面上半は横ナデ調整を施し、胴部外面上位以下には細かい斜めハケ、胴部内面は頸部から一段下がった位置から横方向のヘラ削りを施す。胴部内面にはヘラ削り以前の指オサエ痕が残る。外面肩部には彫刻波状文が廻らされる。これは、工具幅2.7cmで、櫛目の数7本、櫛目1本の幅及びその間隔はいずれも2.0mmのものである。口縁から頸部の外面、及び胴部中位以下には全周に煤がこびりつく。胎土に細石英、雲母片を多量に含み、特に雲母片が目立つ。焼成良好で、内面は褐色、外面の地色は淡褐色を呈する。胎土、焼成とともに本遺構出土の他例と遙を異にしており、他地域産であることは明らかである。煤の付着状況等から、明らかに煮沸容器として用いられており、器種としては、通有の二重口縁壺ではなく、やや扁平な釜型の甕と考えられる。

8は、長く大きく開く口縁に、やや縦長の球形胴部をつけた器形で、小さい不安定な平底につくる。口径14.5cm、頸部径8.8cm、胴部最大径24.0cm、器高26.6cm、底径4.1cmを測る。口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は細かいハケをかなり組み施すが、かなりの部分をナデ消している。胴部内面上端には指オサエ痕が顕著で、やや下がった位置から横方向のヘラ削りを施す。胴部内面中位には、ヘラ削り前に施されたハケが部分的に残る。胴部内面には粘土縫接合痕が明瞭である。中位よりやや下がった位置には、胴部下半をまず作り、その上に積み上げた際の接合後の粘土補強が外面全周にみられ、段状をなしている。胴部中位の片側と、底部周辺に黒斑部がみられる。胎土に粗石英粒をかなり含み、焼成良好で、内面は暗黄褐色、外面は淡黄色～黒色をなす。煤の付着は認められず、器形からも壺と言ってよかろう。

9は、口縁が直接的にやや外傾して立ち上がる小型の甕である。口径14.4cm、胴部最大径16.9cmを測る。口唇部周縁は横ナデ、口縁内面は極めて粗い横ハケ、外面は組みやや粗い継ハケ、胴部外面は継から斜めのやや粗いハケを施す。内面は組み横ナデ調整がみられる。粗砂粒を僅かに含み、かなり精良であり、焼きは良く、内外面ともに淡褐色をなす。

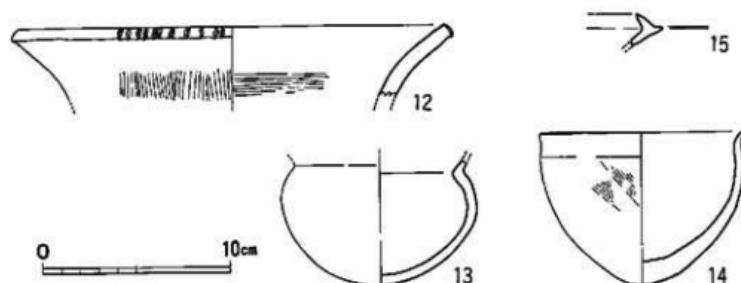
10は、弥生後期の大甕片で、埋土中に混入したものである。頸部よりやや下がって、無施文の広い梯形凸帯を付ける。頸部内面は積みなし、やや下がった位置までを横ナデ、以下内面は

1 壁穴住居跡



第10図 5号壁穴住居跡出土土器実測図(その2) (縮尺 1/3)

III 各遺構と出土遺物



第17図 5号竖穴住居跡出土土器実測図（その3）（縮尺 1/3）

粗い斜めハケを施す。外面は凸帯周縁が横ナデ、他は粗いハケ調整となる。粗砂粒をかなり含み、焼成やや良好で、内面赤茶褐色、外面は淡赤褐色～黒色をなす。

11は、6と同様な小さな底部をつくるタイプで、底部中央がへこむ。底径4.9cmで、外面はヘラ状の工具で縦に縦方向に擦っている。内面は粗い縦ハケがみられ、底部の接合面は明瞭である。粗砂粒をかなり含み、焼きは良く、灰褐色をなす。

壺(12)は口唇外面にハケ工具端による刻目を這らし、大きく開く口縁部である。小片であり、弥生終末期の混入品である可能性も強い。口径23.4cmに復元され、口縁上半の内外面は横ナデ、内面下半は粗い横ハケ、外面下半は粗い縦ハケが施される。粗砂粒を多く含み、焼きは良く、灰黄褐色をなす。

小型丸底壺(13)口縁部を欠くが、調上位で張る器形をなし、頸部内面に稜をつくり、口縁は内渦気味に聞く頬となろう。胴部最大径10.4cmで、胴部外面上半は横方向ヘラ磨き、下半から底部は丁寧なナデが施される。内面は横方向のヘラ磨きである。胎土に若干の粗石英、長石粒を含み、焼きは良く、暗褐色をなす。

鉢(14)口径10.8cm、器高8.1cmの小型の尖底状の鉢である。口縁付近で小さく屈曲して外開きして、底部は厚い。口縁内外面横ナデ、体部内面は丁寧なナデ、底内面付近はナデ上げている。外面は、ハケ目という程ではないが、明らかに板状工具の擦過痕がみられ、その上をナデ消している。胎土に若干の砂粒を含むのみで、焼きは良く、暗褐色から黒色をなす。全体に精製品の感じを受ける完形品である。

土師質杯身(15)胎土精良で、焼成軟質、外面が赤褐色、内面が灰白色を呈する杯身小片である。磨滅著しく、小片のため不明な点は多いが、共伴土器との時期的関係から考えても、陶質土器の生焼けか、或いは、赤焼きの朝鮮系土器かと考えられる。

鉄器(第18図)身幅2.7～2.5cm、厚さ0.3cmの片刃の薄手品破片である。薄いことや、身幅が

1 積穴住居跡

左方へ細くなっていることなどから、鉄錐片と考えられる。

以上の5号積穴住居跡出土遺物は、明らかな弥生期土器を除くと、よくまとまつた一括土器群としてとらえられよう。即ち、3～9、11、13～15の甕・小甕・釜状甕・壺・小型丸底壺・小型鉢・土師質杯身である。3～5の明らかに在地作製による模倣内系土器は、胴部上半で肩が張り、口縁は外湾的或いは直線的に開き、布留型陶器よりも、庄内式或いは最古期布留式にそのモデルを求める方が妥当である。また、

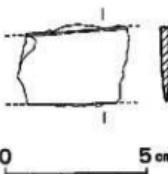
他地域からの外来品と考えられる7は、器形、波状文、各所のシャープさなどの諸点は、古期布留式の特徴を忠実に示している。また、8のような壺、また12のような前時代的な在地型壺も、浮羽郡吉井町塚堂遺跡B・B北地区溝状造構から「庄内式新段階併行」(註1)とする要群とともに出土しており、大旨の時期的位置付けは前述の他土器群と矛盾はない。

土師質杯身 更に、15の土師質焼成の杯身は、後代の須恵器等の混入が全く考えられない状況での出土であり、小片で判断に困難さを伴うが、発掘成果としては、一応前述の時期に伴うものと考えられる。糸島郡志摩町御床松原遺跡第15号住居跡(註2)からは、土師質焼成の杯蓋・杯身が4点出土している。この住居跡は、「御床松原V期」とされ、陶邑編年I型式1段階併行となるかとされている。本造構例とは年代差があるが、朝鮮系のものと考えられる貴重な例であり、この西原C 5号住居跡出土例も、この系統の中に含め得るものと考えたい。今後の類例の増加を待望したい貴重な一例である。

以上の遺物の検討から、前記の筑後川対岸の塚堂遺跡出土土器群との様相の類似点も認められ、在地的模倣土器の卓越性などから考えて、当5号住居跡は、庄内式(新)を共存するような布留式(古)期にあたると考えられる。

註1) 福岡県教育委員会「塚堂遺跡II」浮羽バイパス関係埋藏文化財調査報告 第1集 1983

註2) 志摩町教育委員会「御床松原遺跡」志摩町文化財調査報告書 第3集 1983



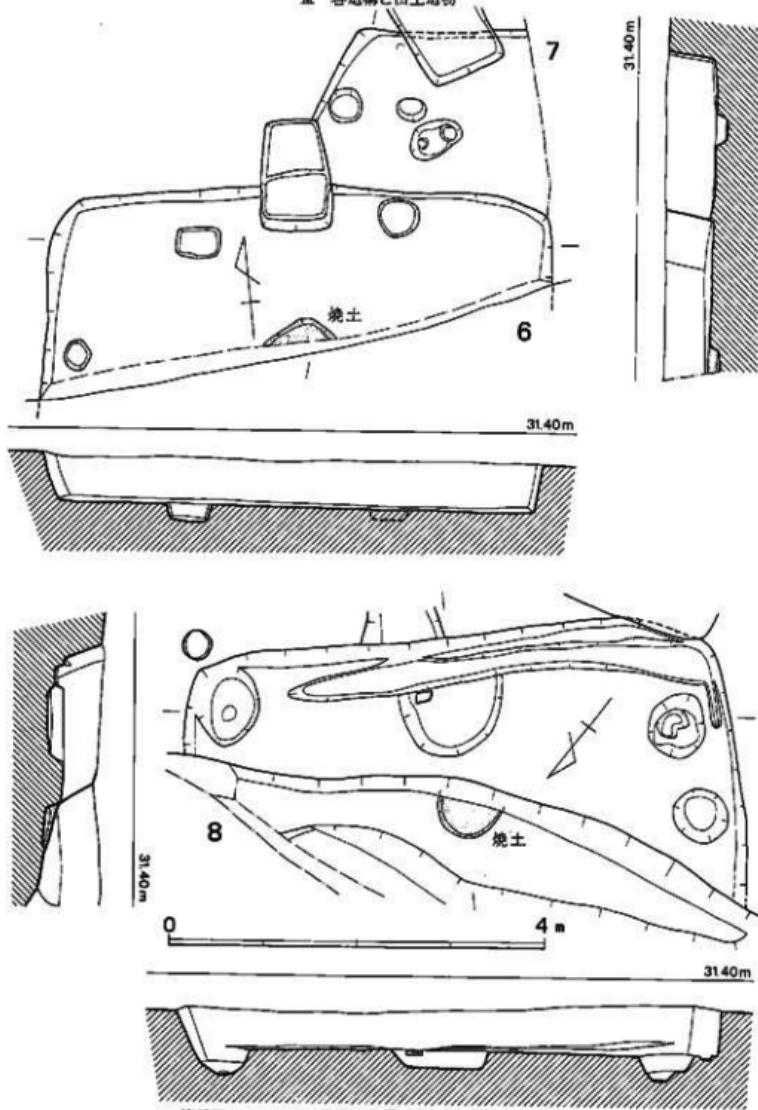
第18図 5号積穴住居跡出土
鉄器実測図(縮尺1/2)

6号積穴住居跡(第19図、図版5)

遺跡中央を東西に走る新溝に、南北を切られ、北東側で7号積穴住居跡を切っている。大溝2との切合の関係は不明であるが、出土遺物の比較から、溝より新しいと考えられ、大溝2東端部での切合が認められないことから、南北にやや幅のせまい長方形プランであったと考えられる。

東西長535cm、南北長は220cm+α、床面深さ57cmを測る。南北長は、上記の如き事情から考えて、370cm以内であったと推定できる。主柱穴は不明である。

重 各遺構と出土遺物



第10図 6・7・8号縦穴住居跡実測図(縮尺 1/60)

1 窪穴住居跡

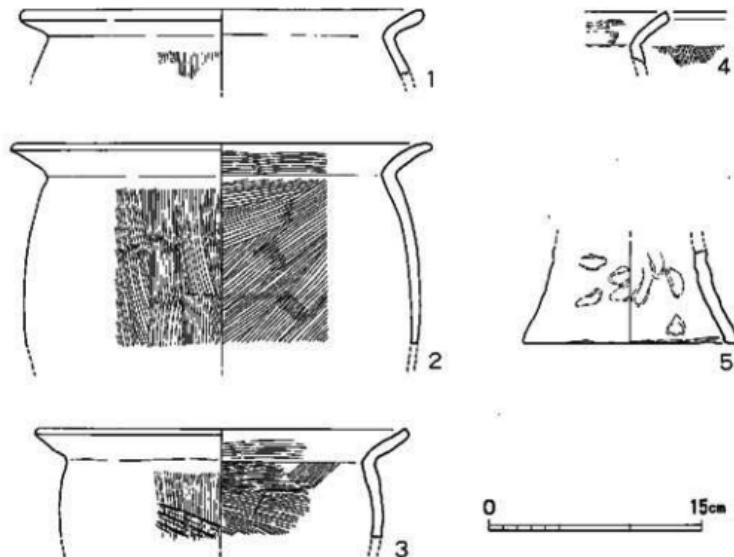
炉は中央に、炭・施土のつまた掘り込みが認められ、周壁溝は検出されなかった。東西に長い方形プラン、炉の位置等、構造的に2号窓穴住居跡に類似する。

出土遺物 (第20・21図)

甕 (1～4) 1は、頸部で丸く屈曲し直線的にのびる口縁片である。端部は丸く、口径28.7cmに復元できる。胴部外面は継ハケ、口縁から頸部内外面は横ナデを施す。粗砂粒が多く含み、焼きはやや良く、内面淡褐色、外面は暗褐色をなす。前時代の混入品である。

2は、床面出土品で、いくらか張る胴部から、頸部内面に稜を作り、外方へやや長めに外湾気味に開く口縁を付ける。口径30.0cm、胴部最大径28.2cmを測り、口縁内面上端から外面は横ナデ、口縁内面下半は横ハケを残す。胴部外面は粗い雑な継ハケ、内面は斜めハケが顕著である。粗砂粒多く含み、焼きは良く、内面は淡茶色から暗褐色、外面は淡茶色から淡黄褐色をなす。口縁～胴上端外面には煤がこびりつく。

3は、あまり張らない胴部から、内面に稜をつくり屈折してやや長めに開く口縁をつける。復元口径26.5cmを測り、口唇内側はわずかにへこむ。口縁内面上半から外面は横ナデ、内面下半は粗い横ハケ、胴部内面は細かい横ハケ、外面は太めの横位叩き目の上を粗い継ハケが施される。粗砂粒を多く含み、焼きは良く、内面淡黄褐色、外面は暗褐色をなす。口縁～胴部外面



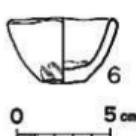
第20図 6号窓穴住居跡出土土器実測図(その1) (縮尺 1/4)

III 各遺構と出土遺物

には煤がこびりつく。

4は、頸部内面に稜をつくり、屈折して直線的に開く口縁となる小片である。口縁外面は横ナデ、内面は横ハケの上をナデ、胴部外面は細かい縦ハケが施される。口縁部外面には煤がこびりつく。

器台(5)下端径15.0cmを測り、外下端で接地し、内下端はわずかに突出する。器壁はこの器種としては薄手であり、内外面ともに雑なナデを施し、指オサエ痕で凹凸著しい。粗砂粒を多く含み、焼成良好で淡茶～淡褐色をなす。



ミニチュア土器(6)床面出土品で、口径5.8cm、器高3.5cm、底径2.4cmを測る。底部はふくらみ、不安定ながらも底面をなしている。指オサエ痕が若干残り、やや精品の感を受ける。粗砂粒を若干含み、焼きは良く、内面は肌色、外面は暗茶色をなす。

以上の6号竪穴住居跡出土土器は、1の中期末～後期初頭のものを除いて、2～4の甕は、2号竪穴住居跡出土のそれと酷似する。いずれも

第21図 6号竪穴住居跡 出土土器実測図(その2)

口縁の外反度が強く、弥生後期終末期及びそれ以降のものとは異なる。

(縮尺 1/3) よって、住居跡の構造の類似点などからも、当6号竪穴住居跡は2号竪穴住居跡と同時期の弥生後期後葉の所産とされよう。

7号竪穴住居跡(第19図、図版5)

南西側を6号竪穴住居跡に切られ、東側のほとんどをコンクリート基礎部によって破壊されており、その大部分の様相は知り得ない。

床面は、6号竪穴住居跡よりわずかに浅く、54cmの深さとなる。主柱穴、炉等は不明である。周壁溝は調査範囲に限っては検出されなかった。

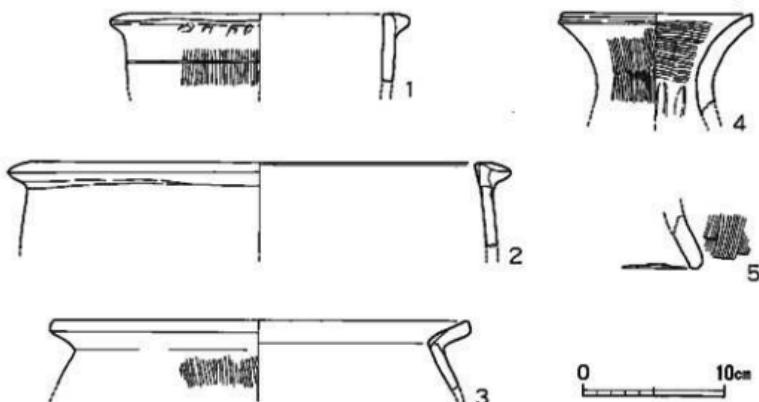
出土遺物(第22・23図)

甕(1～3)1は、口縁外端にやや大きな三角粘土紐を貼り付け、胴外面上位に細く深い沈線を這らせる。復元口径21.0cmで、小型の甕である。口縁内外面横ナデ、胴部外面は粗い縦ハケ、内面は丁寧にナデる。粗砂粒を若干含み、焼成良好で内外面ともに暗褐色をなす。

2は、口径35.6cmに復元されるやや大型の甕で、口縁外端を断面三角形に肥厚させるが、他の多くの弥生中期初頭のものとはその接合法が明らかに異なる。内端側にも薄く粘土を張りつけて、内側へわずかに突出させている。口縁内外面は横ナデ、胴部外面は磨滅して調整不明、内面はナデている。粗砂粒多く含み、焼成良好で淡褐色をなす。

3は、張る頸部から頸部に稜をつくり、強く屈折して開く口縁となるもので、口縁内面上半でわずかにへこむ。口径29.7cmを測り、口縁内外面とともに横ナデ、胴部外面は粗い縦ハケ、内面は雑な横～斜めのナデが施される。粗砂粒少量、細砂粒をいくらか含み、焼成やや不良で、

1 穹穴住居跡



第22図 7号穹穴住居跡出土土器実測図(縮尺 1/4)

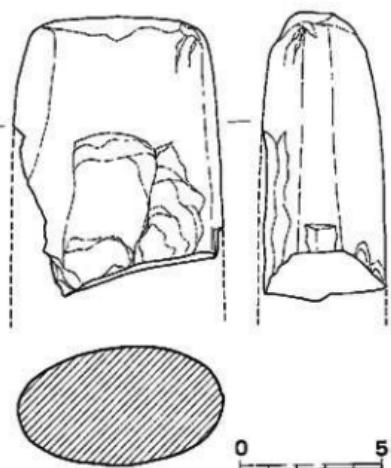
内面は淡白褐色、外面は淡褐色～暗褐色をなす。外面には焼が若干付着する。

器台(4・5)4は、受け部径13.6cm、

くびれ部径8.0cmを測る。口唇外面は凹状をなし、体部上半でくびれるタイプである。受け部端外面は横ナデ、体部上半内面は粗い縦な横ハケ、外面は粗い縦ハケを施す。内面中位は指オサエナデ上げがみられる。粗砂粒を多く含み、焼きは良く、内外面ともに暗褐色をなす。

5は、器台脚端部片で、外面は粗い斜めハケ、内面はナデている。下端部は丸く収め、内端部がわずかに突出する。粗砂多く、焼きは良く、内面灰褐色、外面は暗黄褐色をなす。

磨製石斧(第23図)玄武岩製大型蛤刃石斧の基部片である。表面は風化しており、前時代のものの混入品であろう。現存長さ9.9cm、幅7.4cm、厚さ4.4cmを測り、重さは480gである。



第23図 7号穹穴住居跡出土石斧実測図(縮尺 1/2)

III 各遺構と出土遺物

以上の7号堅穴住居跡出土の土器は、各時期にまたがる。即ち、1・2は弥生中期初頭で、中でも、2は内端がわずかに張り出しつつあり、弥生中期前葉に近くなるタイプである。3は、弥生中期末の傾向を残しながらも、「く」の字状口縁に近くなりつつあり、弥生後期初～前葉の所産である。4・5の器台は、上位でくびれるタイプで、受け部外端面を圓状とすることなどの諸特徴は弥生後期終末よりもより古相を示すものである。以上各時期の遺物より、より新期のものを採って、当7号堅穴住居跡は、弥生後期後葉前後のものであり、後期後葉の所産である6号住居跡に切られることから、そのうちでも若干古いものかとも考えられる。

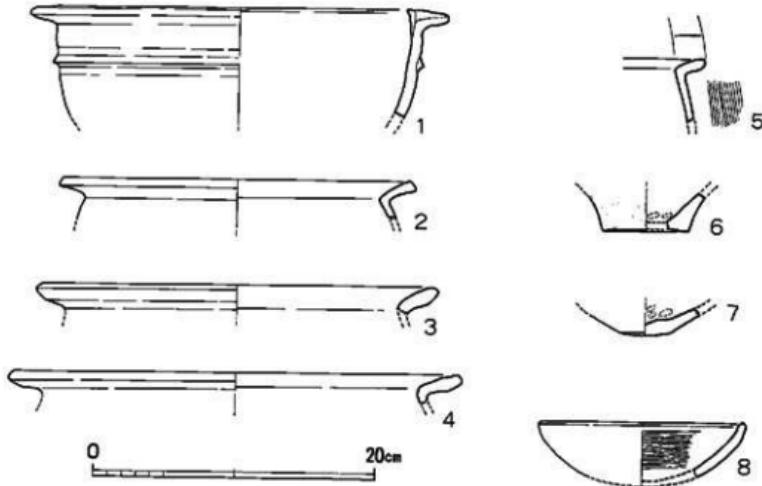
8号堅穴住居跡 (第19図、図版6)

遺跡の中央北端に近く位置し、大溝1に北半の大部分を切られ、2号石棺墓に南西隅をわずかに切られる。東西長587cm、南北長310cm + α、床面の深さは50cmを測る方形プランを呈する。

炉は中央に有り、主柱穴は明らかではないが、南西・南東隅に深い柱穴があり、四隅の4本主柱穴となるかと推定される。南辺壁際には幅の広い周壁溝がめぐり、壁下端部とは間隔を有する。1・5号堅穴住居跡のそれと性格の異なるものなのである。

出土遺物 (第24・25図)

甕 (2~5) 2は、頸部内面はシャープな稜をつくり、強く外反する口縁で、端部へと肥厚する。口径25.0cmを測り、口縁内外面は横ナデ、調部内外面は磨滅して調整不明である。粗砂粒



第24図 8号堅穴住居跡出土土器実測図 (縮尺 1/4)

1 墓穴住居跡

多く、焼きはやや良好で、淡褐色をなす。

3は、口径28.4cmに復元される口縁小片で、口縁外面中位でふくらみをみせる。細砂粒をかなり含み、焼成不良で、外面暗褐色、内面は淡褐色をなす。

4は、頸部内面で丸く屈曲し、口縁断面は3と酷似する。復元口径31.8cmを測り、内外面ともに横ナデがみられる。粗砂粒をかなり含み、焼きは不良で淡黄褐色をなす。外面に若干の擦が付着する。

5は、いくらか張る胴部から内面に稜をなして屈折し、短かく丸味をおびた口縁となる。口縁内外面は横ナデ、胴部外面は粗い縦ハケ、内面はナデている。口縁上面に縦めの一条の沈線が施される。

鉢(1) 口径29.5cmを測り、口縁内端が小さく突出する。口縁外面は横ナデ、胴部内面は細な横ナデ、外面は三角凸帯周縁が横ナデ、以下は粗な横ナデが施される。粗砂少量、細砂粒かなり含み、焼成良好、肌色をなす。胴部のカーブ、調整手法などからみて、通有の型ではなく、浅めの鉢形土器となろう。

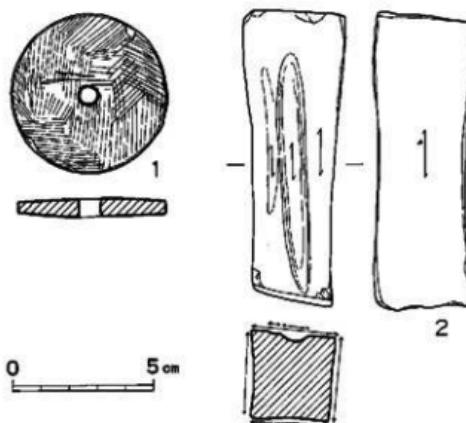
壺(6・7) 6は、底径6.0cmの丹塗り壺である。僅かに上げ底状となり、粗砂粒を僅かに含むが、胎土精良である。焼きは良く、内面地色は暗黄褐色をなす。

7は、径3.7cmと小さな底部で、凸レンズ状にふくらみをみせる。内外面ともにナデしており、内面は指オサエ痕が著しい。粗砂粒を僅かに含むが、大旨精良であり、焼きはやや良く、内外面ともに明確褐色をなす。下層床面出土品である。

鉢(8) 口径14.6cmの浅い皿状の器形をなす。口縁端は丸く、内面に稜をつくる。口縁内面から体部外面上半は横ナデ、外面下半は丁寧なナデ、内面は細かい横ハケを施す。

紡錘車(第25図-1) 黒色の片麻岩製で、表・裏面とともに粗い擦痕が著しい。直径5.5~5.7cm、孔径0.7cm、厚さ0.5~0.65cmと中心部がやや厚くなる。重量31.7gで、全体に精製品である。

砥石(第25図-2) 粘板岩



第25図 8号墓穴住居跡出土紡錘車・砥石実測図(縮尺 1/2)

III 各遺構と出土遺物

製の仕上げ低である。4側面ともに使用しており、上面には中心部に断面の丸い溝状の使用痕がみられる。箒、鐵等の刃先の小さいものを研いだものであろうか。長さ10.6cm、幅3.7cm、厚さ8.6cmを測る。

以上の8号堅穴住居跡出土の遺物は、各時期にわたっている。1は弥生中期前葉、2~6は中期末、7は弥生後期後葉以降、8も後期以降の所産であろう。うち2・3・7・8が下層床面出土品で、他は埋土上層出土である。これらのうちのより新期のものは7・8であるが、7の凸レンズ状にふくらむ底部は弥生後期後葉からしか出現せず、年代の上限が与えられる。下層に弥生後期後葉の土器を多量に含む大溝1に切られることから、当住居跡の年代もそれ以降に求めることはできない。よって、8号堅穴住居跡の年代は弥生後期後葉の範囲の中に収まるところであろう。

第2表 堅穴住居跡一覧表

(単位cm)

名	平面形	長辺×短辺 $+\alpha$	床面 深さ	主柱穴	軒	ベッド	周壁溝	出土 遺物	時 代	備 考
1	方形	372×340 $+\alpha$	33	2か	中央	有	有	弥生甕・長頸瓶 手捏ね鉢	弥生後期終末	4号住を切る
2	長方形	550×377	44	4か	中央	なし	なし	弥生甕・壺・ミニチュア土器 器合・石劍 片・鉢石	弥生後期後葉	3号住に切ら れる 焼失家屋
3	長方形	583×320 $+\alpha$	34	2か	中央	有	なし	弥生甕・壺片	弥生後期終末	2号住を切る
4	方形	230×110 $+\alpha + \alpha$	47	不明	不明	なし (不明)	なし	弥生甕	弥生中期末 (?)	大溝2・1号 住に切られる
5	方形	557×515	18	4	なし	なし	有	土器器甕・壺 鉢・鐵錐片	古墳前期	建て替え(主 柱穴)
6	(長)方形	535×220 $+\alpha$	57	不明	中央	なし (不明)	なし	弥生甕・器合 ミニチュア土器	弥生後期後葉	7号住を切る
7	方形?	250×180 $+\alpha + \alpha$	54	不明	不明	なし (不明)	なし	弥生甕・器合	弥生後期	6号住に切ら れる
8	方形	587×310 $+\alpha$	50	4か	中央	なし (不明)	有	弥生甕・壺・鉢 鉢石・紡錘車	弥生後期後葉	大溝1・2号 石棺墓に切ら れる

2 袋 状 壇 穴

1号袋状壇穴 (第27図、図版6)

2号壇穴住居跡の北1mに位置する。底面プランは円形をなし、底径123×106cm、深さ65cmを測る。断面形は上面が僅かに広い円筒状をなし、底面にはPitはみられない。出土遺物も少なく、埋土は黄褐色砂質土（地山土の一種）が殆んどで、埋め戻されたような状況であった。

出土遺物 (第26図)

壺（1・2）1は、口縁外端に断面三角に粘土を貼り付け、直下に太めの沈線を巡らせるものである。口縁内外面は横ナデ、胴部外面の沈線以下は粗い縦ハケが施される。粗砂粒多く含み、焼成やや不良で、外面ともに赤褐色をなす。

2は、平底で底径10.0cmを測り、外面にはわりと整然とした目の粗い縦ハケを施す。粗砂若干、細砂粒を多く含み、焼成良く、内面暗褐色、外面淡黄～茶色をなす。

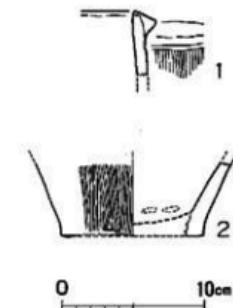
以上のうち、1は弥生中期初頭とされるが、2は、器形、調整手法とともに、中期前葉のものである。

2号袋状壇穴 (第27図、図版7)

5号壇穴住居跡の東隣に位置し、南北に長い楕円形の大形のタイプである。底径348×220cmの不整楕円形をなし、断面形はフラスコ状をなす。底面には、中心より南に寄った位置に小Pitがみられる。埋土は炭・灰を多く含んだ黒色土で、中間に灰層がレンズ状に堆積していた。土器も多量に出土したが、床面に置かれたようなものは無く、すべて中層以上に投棄されたような状態で出土している。貯蔵穴としての機能を終了した後、ちり焼き場、ごみ捨て場として埋没していったものであろう。

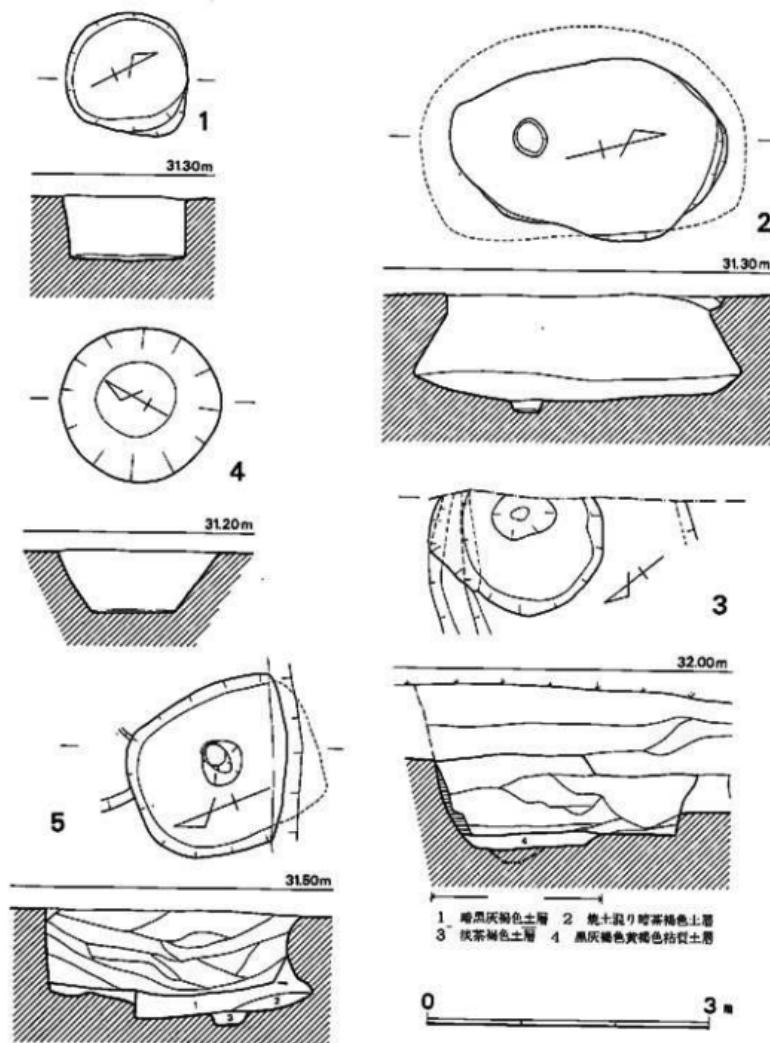
出土遺物 (第28～31図、図版15・16)

壺（1～12）1は、口縁外端とその下に凸帯を貼り付け、密な刻目を巡らせた大型壺である。口径40.8cm、器高49.4cm、底径10.6cmを測る。底部は厚いが、平底で、他の本遺跡出土の壺底部のように高く充実するタイプではない。口縁内外面から凸帯直下までは横ナデ、胴部外面は極めて粗い縦ハケ、内面はナデる。内面上端にはハケ工具端痕が残る。底部外面は粗なヘラ磨きを施す。胴部外面下半は二次火熱を受けて赤変し、



第28図 1号袋状壇穴出土土器実測図 (縮尺 1/4)

III 各造構と出土遺物



第27図 1～5号袋状竖穴実測図 (縮尺 1/60)

2 袋 状 穴

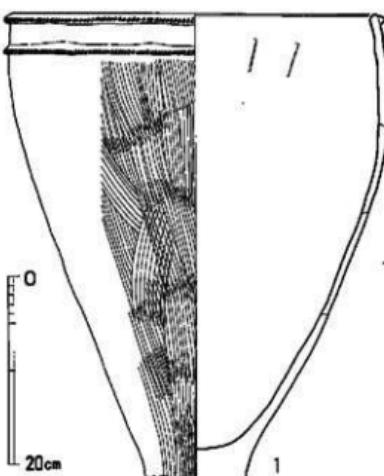
それ以上は煤がこびりつく。胎土に粗石英・長石を多く含む。焼成良好で、内面は暗黄色から暗褐色、外面の地色は暗褐色を呈する。下半部をいくらか欠くがほぼ完形品である。

2は、底部がやや充実して、外端部が張り出し、中央部が丸くへこみ、上げ底状になる。胴は張らず、口縁は短く外反する如意形口縁をなす。口唇端部は丸く、刻目は施さない。口径25.4cm、器高25.1cm、底径7.0cmを測る。口縁内外面は横ナデ、胴部外面は粗い雜な継ハケ、内面はナデている。胴下半部から底部にかけては、二次火熱を受けて赤変している。口縁上端から胴部下位までは、煤がこびりつく。粗石英粒、長石粒、茶色粒子を多く含む。

焼成良好く、内面淡黄褐色～暗褐色、外面の地色は暗褐色をなす。口縁の1/4を欠くのみの完形品で、全体に粗雑なつくりで、歪つになる。

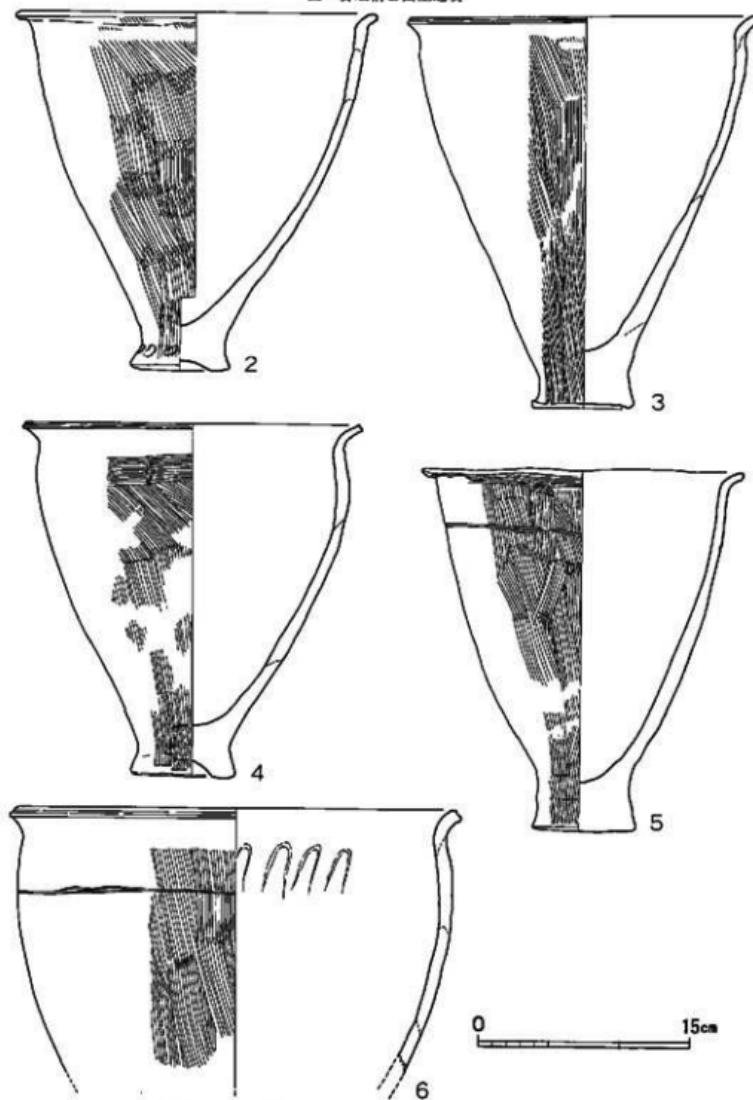
3は、底部が充実して、全体がわずかな上げ底となり、張らない胴部から、小さくS字状に屈曲して短く外反する口縁となる。口唇端面には沈線が巡らされる。口径24.9cm、器高27.3cm、底径7.2cmを測る。口縁内外面は横ナデ、胴部外面は、工具幅2.0cm(12本)の継ハケ、頸部内面は横位のヘラ磨き状痕跡がみられる。胴部内面は、縦方向の板状工具による擦過痕がみられ、丁寧で部分的にはヘラ磨き状となる。胴部下半は二次火熱を受け赤変し；口縁～胴上端外面には煤がこびりつく。胎土に粗石英粒を多く含み、雲母片もいくつかみられる。焼きは良く、外面暗褐色から淡赤色、内面は暗黄色から暗褐色をなす。胴部下半の一部を欠損するが、ほぼ完形となる。

4は、底部中央が丸くへこみ、胴部上端でいくらか張り、丸く屈曲してやや長めに外反する口縁となる。口唇外端面には沈線を巡らせる。口径24.0cm、器高24.9cm、底径7.3cmを測る。口縁内外面横ナデ、胴部外面上端は横ハケ、以下は斜めから縦方向の雜なハケを施す。内面は丁寧にナデしており、胴部下半は強い二次火熱を受けて赤変し、器表も剥落した部分が多い。口縁上面から胴部上半外面にかけては煤がこびりつく。胎土に粗砂粒・茶色粒子を多く含み、焼成良好で、内面淡黄色～暗黄色、外面は赤茶～黒褐色をなす。ほぼ復元完形品である。



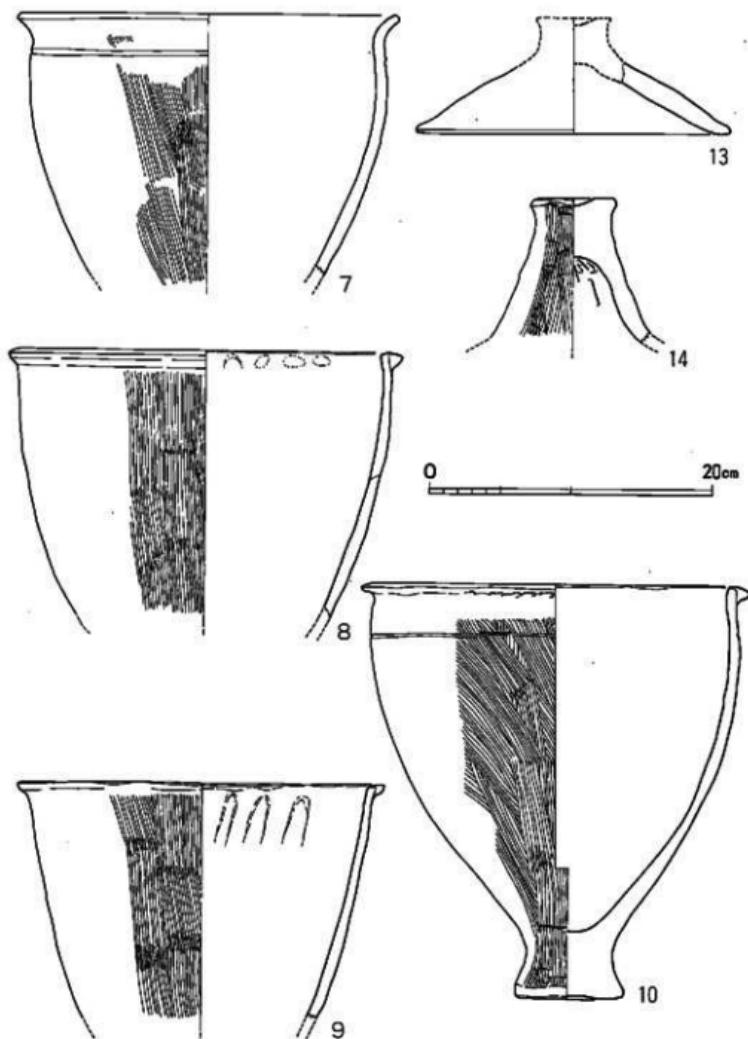
第20図 2号袋状窓穴出土土器実測図(その1)
(縮尺 1/6)

III 各遺構と出土遺物



第28図 2号袋状堅穴出土土器実測図（その2）（縮尺 1/4）

2 袋 状 穴



第30図 2号袋状穴出土土器実測図（その3）（縮尺 1/4）

Ⅳ 各造形と出土遺物

5は、充実した底部に、張らないスリムな胴部から短かく屈曲して外反する口縁となる。口縁端部は丸く、外下端へ粘土がはみ出し、胴上位には、全体にかなりずんだれた細い沈線を巡らす。底部は上げ底状にはならず、かえって凸面をなす如き平底をなす。口径22.7cm、器高25.4cm、底径7.3cmを測る。口縁外端から内面は横ナデ、口縁外面は横ハケ、以下の胴部外面は粗な細い継ハケ、内面は斜めナデが施され、下半は使用による器表面剥落がみられる。胎土に粗石英、長石粒、茶色粒子が多く含む。焼成良く、内面淡褐色、外面は下半に二次火熱を受けて赤変し、器表面もかなり剥落する。上半は煤がこびりつく。

6は、やや張る胴部からゆるやかに屈曲してわずかに外反する口縁となる。口唇面には沈線を入れており、胴部上位には、かなりよたる細い沈線を巡らす。口径32.1cmを測り、口縁内外面横ナデ、胴部内面はナデしており、部分的に横ヘラ磨きがみられる。外面は粗い継ハケが施される。粗砂粒をかなり含み、焼きは良く、内面は暗黄褐色、外面上半は煤が付着し、地色は淡褐色をなす。

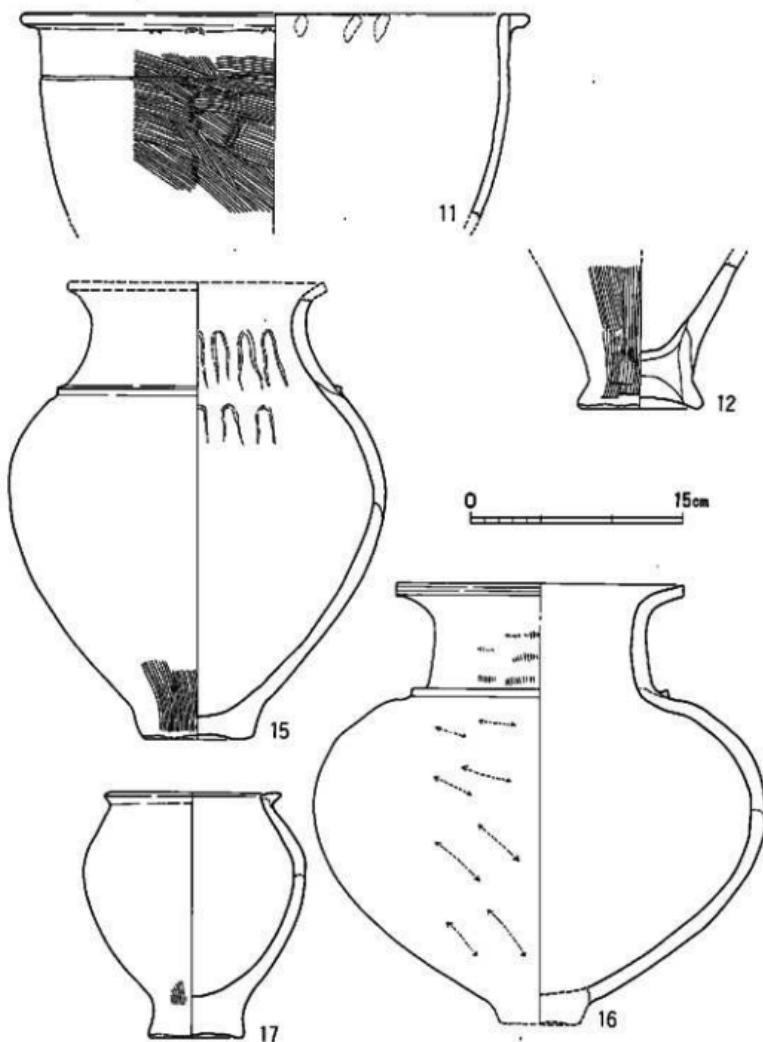
7は、胴上半でわずかにふくらみをみて、如意形口縁となり、頸部直下には太い沈線を巡らす。口縁外面横ナデ、頸部内面は粗い横ヘラ磨き、胴部外面は粗い継ハケ、内面は横～斜めナデが施される。胴下半は二次火熱で赤変し、上半には煤が付着する。内面下半には炭化物が付着して暗褐色となる。口径27.1cmで、胎土に粗石英粒、長石を多く含む。焼きは良く、内面上半は淡褐色から暗黄褐色をなす。

8は、わずかにふくらみを感じる胴部から、口縁外端に断面三角形粘土紐を貼り付けて肥厚させた口縁となる。口縁上面はやや外側へ傾斜する。口径27.9cmで、口縁内外面横ナデ、胴部外面は、やや粗い継ハケを施す。この継ハケは同期の他のものに比べるとわりと整然と施されている。上半には煤が若干付着しており、粗石英粒、長石、茶色粒子を多く含む。焼きは良く、内面暗黄褐色、外面は淡白黄褐色をなす。

9は、直線的に開き張らない胴部から、口縁外端を肥厚させた頸である。口縁上面は内傾し、口縁内外面は横ナデ、胴部外面は粗い継ハケ、内面はナデする。胎土には粗石英粒多量、茶色粒子、片岩紙片もかなり含まれる。口径26.0cmで、焼きはやや良く、内面黄褐色、外面は淡褐色から暗褐色をなす。

10は、中央部のみがわずかな上げ底の、充実した底部から、ふくらむ胴部に、肥厚させた口縁をつける。胴上端には沈線を巡らせる。口径27.5cm、器高29.2cm、底径7.7cmを測り、口縁を1/3欠損するのみである。口縁内外面横ナデ、胴部外面はやや細かいが粗なハケ、内面はナデしているが指押圧による凹凸がかなりみられる。胴部中位～上位の片方のみに黒斑部がみられる。底部～胴下端は二次火熱を受けて赤変しており、胴上位には煤が付着する。粗石英粒・雲母片・茶色粒子を多く含み、焼きは良く、内面淡白褐色～暗褐色、外面は暗褐色～淡褐色をなす。胴部下端内面は黒褐色をなす。

2袋状堅穴



第31図 2号袋状堅穴出土土器実測図（その4）（縮尺 1/40）

III 各遺構と出土遺物

11は、口縁外面を肥厚させるが、既に逆L字状に近くなり、胴上位に沈線1条を巡らす。口縁内外面横ナデ、胴部外面はやや粗い斜めの雜なハケ、内面は丁寧にナデる。口径36.0cmのやや大きめの甕で、胎土に粗石英粒・長石・金雲母片を多く含み、焼きは良く、内面暗茶褐色、外面暗褐色をなす。口縁上面から胴部外面には煤がこびりつく。

12は、全体にいくらか上げ底状となる充実した甕底部である。外下端部はやや強く張り、底径8.8cmを測る。外面は粗い継ハケ、内面はナデており、底外面は雑にナデる。外面下半は二次火熱を受けて赤変し、上半には煤が付着する。粗砂多く含み、内面は炭化物が付着して黒褐色を呈する。

甕(13・14) 13は、器壁の部厚い傘形の蓋で、口径22.3cmを測る。内面は継・斜めの不規則なナデ、口縁内外から体部外面は横ナデを施す。口縁外面には使用時の煤が付着する。胎土に粗石英・雲母片を多く含み、焼きは良く暗茶褐色をなす。やや小径の甕の蓋となろう。

14は、上半部のみであるが、上端は甕底部と同じ形態をなし、中央部が浅くへこむ。体部外面は粗く雜な継ハケを施し、内面にはハケ工具端圧痕を残して雜なナデが行われる。胎土に粗砂多く含み、焼成やや良好で、淡茶褐色をなす。二次火熱及び煤の付着は認められない。

甕(15~17) 15は、頭部が上方へすぼまり、肩部に三角凸帯を貼り付け、上位で張る継長の胴部となる。底部はやや厚く中央部が浅い上げ底状となる。復元口径18.5cm、器高32.0cm、胴部最大径26.6cm、底径7.8cmを測る。頭部外面は横ヘラ磨き、胴部上半外面は横ヘラ磨き、下半は粗い継ヘラ磨き、下端には継ハケを残す。頭部~肩部の内面は横ナデ、胴中位以下は丁寧なナデを施す。胎土に粗石英・長石粒を極めて多く含み、焼きはやや良く、内面淡茶褐色、外面は淡褐色~黒色をなす。頭部下半と肩部内面には指オサエ痕が残る。

16は、胴部が強く横に張り、頭部下に三角凸帯を貼り付け、頭部はほぼ直立気味に立ち上がる器形をなす。口縁外端面には沈線をめぐらせる。口径20.4cm、推定器高31.2cm、胴部最大径32.0cmを測る。口縁外面は横ナデ、頭部外面は継ハケの上を横ヘラ磨き、内面も横ヘラ磨きを施す。胴部外面は横から斜めヘラ磨き、胴部内面上半は極めて雑ではあるが横ヘラ磨きがみられ、下半には横ヘラ磨きが部分的にみられる。胴部中位の片側のみに黒斑部が認められる。胎土に粗石英・長石・雲母・茶色粒子をかなり含む。焼成やや不良で、内外面ともに灰褐色をなす。全体に器壁に厚手である。

17は、口縁が甕の如き肥厚させた形態をなし、底部も甕と似て厚く脚台状につくる。底部は全体に浅い上げ底状となり、口径12.5cm、器高17.2cm、胴部最大径15.8cm、底径6.9cmを測る。口縁内外面横ナデ、胴部外面上半は極めて雑な横ヘラ磨き、下半は継ハケの上をナデ消している。内面上半は横ヘラ磨き、下半は極めて雑な継ヘラ磨きを施す。胎土に粗石英・長石粒を多く含み、焼きは良く、内外面ともに暗茶褐色~暗褐色をなす。ほぼ完形で、全体にかなり歪つとなる。脚台付無頭甕とでも称せられるべき一品か。

2 袋状堅穴

以上の2号袋状堅穴出土土器について若干考えてみたい。まず壺は、口縁の形態から、亀ノ甲式（新）のタイプ5点と、如意形のもの6点に大別できる。如意形のものは、胴の張らないものと、張るものがあり、いずれも刻目は施さず、胴上位に沈線を施すものもみられる。

亀ノ甲式のものでは1のみが平底に近く、上下二段に刻目を施すもので、最古相を示しており弥生前期段階のものである。他はほとんど中期初頭の筑後地方的・福岡平野及び遠賀川流域的な南北双方からの影響を受けたものである。ただ、11のみが、口縁逆S字状に近くなり、中期前葉に近くなる。

壺も、新旧2種、即ち頭部が上方へすぼまるものと、直立に近くなり肩が横へ張るものに分けられる。前者は弥生前期の特徴を強く残す中期初頭のもの、後者は中期初頭の中でも前葉に近いものとされよう。

3号袋状堅穴（第27図、図版18）

大溝2の東端底面に上半を殆んど切られて検出された。かろうじて北東側わずかの壁面が残されており、断面は底面より95cmまで開き気味に立ち上がっている。中位から上方へ更にせばまってゆく断面算盤玉状の形態をとるかと考えられる。底面は径135cmの円形をなし、中心部に深さ10cm程の小Pitを有する。

最下脇部しか残らないので埋蔵状況は明らかではないが、土器片が多量に検出されており、貯蔵穴としての廻糞窓から、ごみ捨場として埋没していったものと考えられる。

出土遺物（第32～34図、図版17）

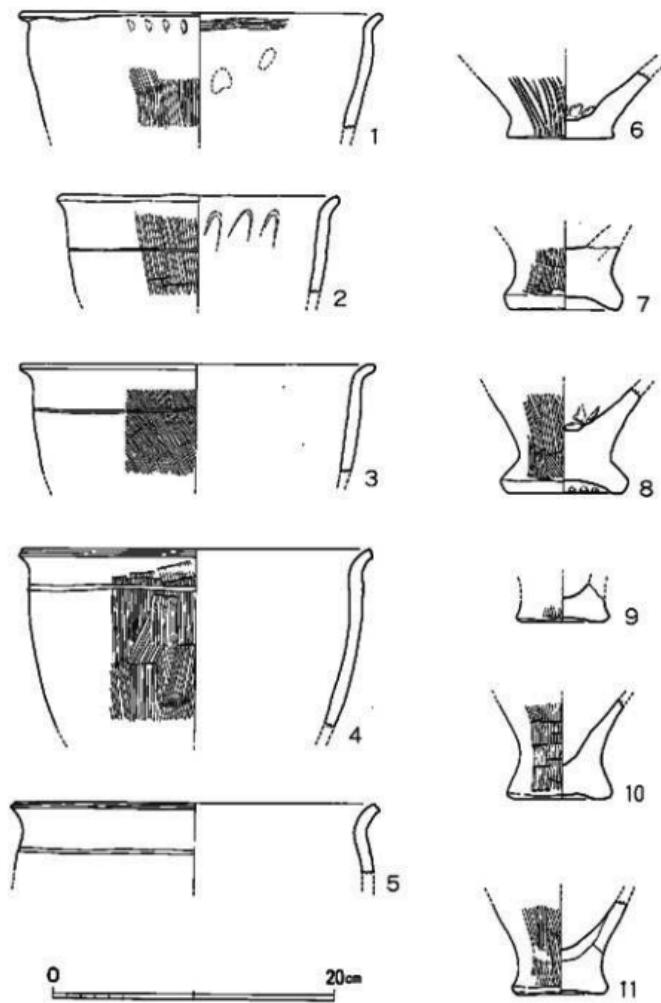
壺（1～16）1は、張らない頸部からゆるくS字状に外反する口縁となる。口径25.7cmで口縁下端は1/3ぐらいが粘土のはみ出しをみせる。口縁内外面横ナデ、頸部内面は横ハケ、頸部外面はやや粗い縦ハケ、内面は斜めナデ上げがみられる。口縁上面から頸外面には煤がこびりつく。粗砂粒をいくらか含むがかなり胎土精良で、焼きは良く、内面淡黄褐色～暗褐色をなす。

2は、口径20.0cmの小型品で、わずかに開く如意形口縁で、胴上位に細く深い沈線をめぐらす。口縁内外面横ナデ、頸部外面には粗い縦ハケを施す。粗砂多く含み、焼成良好で、内面淡黄褐色、外表面暗茶褐色～黒色をなす。

3は、口径25.1cmの如意形口縁で、胴上位に細めの沈線をめぐらす。口縁内外面横ナデ、頸部外面には目の細かい斜めのハケ、内面はナデている。粗砂粒多く含み、焼きやや良く、内面淡褐色、外表面は暗褐色をなす。外表面には煤が付着する。

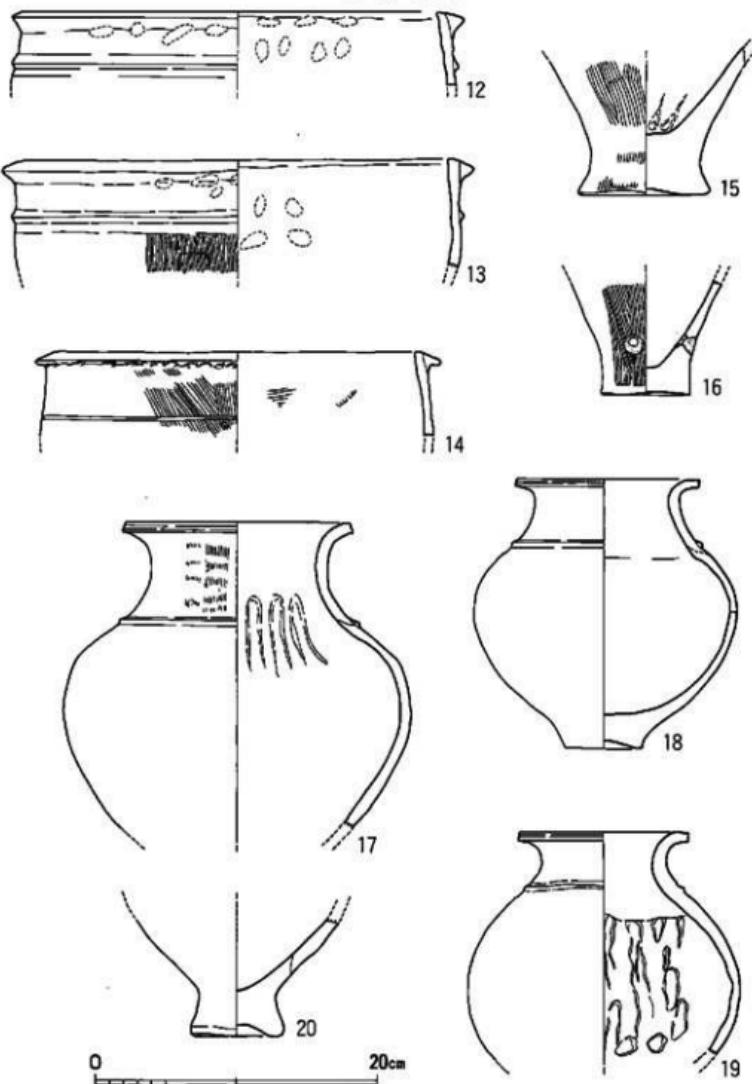
4は、ややふくらみを持つ頸部に、ゆるく外反する如意形口縁をつける。頸部直下には、太い沈線1条を施し、口縁外面には沈線を巡らす。口径24.9cmで、口縁内外面横ナデ、頸部外面はやや粗い縦ハケ、内面は丁寧なナデ調整である。粗砂多く含み、焼き良く、内面淡黄色、外表面は煤が付着して暗褐色をなす。

III 各遺構と出土遺物



第32図 3号袋状墓穴出土土器実測図(その1) (縮尺 1/4)

2 袋状竖穴



第33図 3号袋状竖穴出土土器実測図（その2）（縮尺 1/4）

III 各遺構と出土遺物

5は、丸くふくらみをみせる脇部に、屈曲してゆるく外反する口縁となる。頭部直下に幅広い浅い沈線を巡らす。口縁外面には沈線を施す。口縁内外面は横ナデを施す。粗砂粒多く含み、焼きはやや良く、内面暗褐色、外面は煤がこびりつき黒褐色をなす。口径26.0cmとなる。

6は、やや凸状となる平底をなし、外下端がわずかに張り出す。底径7.4cmを測り、外面には極めて粗い縦ハケが施され、内面はナデている。外下端のはみ出しあは、断面側の形態がほとんどである。胎土に粗砂粒が多く含み、黒鉢母も目立つ。焼きは良く、内面淡褐色、外面暗黄褐色をなす。

7は、外下端が張り出し、全体に上げ底状となるもので、底径7.5cmを測る。外面はやや細かい縦ハケを施し、底外面は雑なナデがみられる。二次火熱を受けて赤変し、上端には煤も付着する。粗砂多く含み、焼成良好、内面は暗褐色をなす。

8は、外下端が著しく張り出し、上げ底状に丸くへこむ。脚台部外面はやや粗い縦ハケ、外下端の側面は横ナデ、底外面上げ底部はナデ、接地面はヘラ切り状をなす。底径8.2cmを測り、粗砂多く含み、焼成良好で、内面は淡黄白色、外面は淡黄茶褐色をなす。

9は、底径6.5cmの、中央部分がわずかにへこむ類である。外面は粗いハケを施し、接地面はヘラ切りを行なう。粗砂多く含み、焼きは良く、内面暗褐色、外面は暗黄褐色をなす。

10は、中央寄りがわずかに上げ底状となり、底径7.4cmとなる。外面はやや細かいが雑な縦ハケを施し、内面と底外面はナデる。粗砂粒多く含み、焼きは良く、内面には炭化物が付着して黒色をなし、外面は、黄茶色をなす。

11は、底径6.6cmを測り、全体にわずかに上げ底状となる。外面は粗い縦ハケを雑に施し、内面と底外面はナデる。粗砂粒多く含み、焼成やや良好で、内面暗褐色、外面は淡赤茶色から黄褐色をなす。

12は、やや張る脇部で、口縁外端とその下方に断面三角凸帯を貼り付ける。脇部の凸帯の方は口縁部のそれと比べて小さくなっている。口縁内外面から脇外面は横ナデ、内面は斜めナデを施す。口径31.9cmを測り、口縁内端を押さえてわずかに内方へ突出させている。内外各所に指印压痕がみられる。胎土に粗砂多く含み、焼成良好で、内面暗黄茶色、外面暗褐色をなす。

13は、12と酷似する器形をなす。脇部上半の凸帯は著しく小さくなっている。口径33.4cmを測り脇部外面は細かい縦ハケが施される。胎土に粗砂粒をかなり含み、焼成やや良好で、内面暗黄褐色をなし、外面には煤がこびりつき、暗褐色から黒色をなす。

14は、口縁上面がかなり外傾するもので、脇上半に沈線1条をめぐらす。口縁外下面には指印压痕が連続する。口縁内外面横ナデ、脇部外面は粗い斜めハケ、内面はハケの上をナデ消している。胎土に粗石英粒多く含み、焼成良く、内面灰黄褐色、外面は煤がこびりつき暗褐色から黒色をなす。口径28.7cmを測る。

15は、やや大型壺の底部で、中央部がわずかにへこむ。底径9.3cmを測り、外面は粗い縦ハ

2 袋状空穴

ケを施して下半はナデ消す。内面には指オサエ痕がみられる。粗砂粒多く含み、焼成やや不良で、内面淡褐色、外面は淡黄色から暗褐色をなす。

16は、外下端で全く張らず、ストレートに柱状をなし、底外面は全体に僅かに上げ底状となる。底径 6.4cm を測り、側面に焼成後の穿孔 1 個がみられる。外面にはやや細かい縦ハケが施され、内面はナデている。外面上半は二次火熱を受けて赤変している。胎土に粗砂多く、焼きやや良く、内面淡褐色、外面は淡茶褐色をなす。

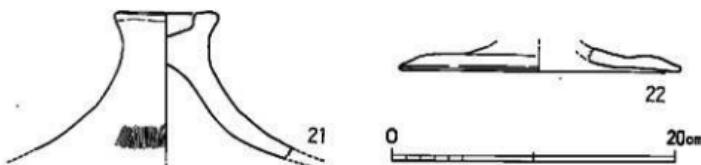
壺 (17~20) 17は、口径 16.5cm、胴部最大径 24.7cm を測り、頸部は上方へすぼまるが、中位から丸く屈曲して開く。頸部下端には三角凸帯を付け、胴部は上半で張る。口唇外面には沈線を入れ、口唇内外面横ナデ、頸部上半内面はやや密な横ヘラ磨き、頸部外面は縦ハケの上を極めて細な横ヘラ磨き、胴部外面は横ヘラ磨き、内面はナデる。胎土に粗石英・長石・茶色粒子を多く含む。焼成不良で、内面灰色から暗褐色、外面は淡黄褐色から黒褐色をなす。

18は、口径 13.0cm、器高 18.9cm、胴部最大径 18.5cm、底径 5.4cm を測るやや小ぶりのはば完形品である。頸部は上方にすぼまり、頸下端には断面三角凸帯を付け、胴部は上半で丸く張る。底部は厚く、全体にへこむ。口唇外面には沈線を入れ、口頭部は磨滅して調整不明である。頸部は横ヘラ磨きを施す。内面は丁寧にナデている。胎土に石英・長石粒をかなり含み、焼成不良で、外面下半は黒色、他面は淡褐色をなす。

19は、口径 12.2cm、胴部最大径 19.3cm を測り、頸部は短かく丸く屈曲・外反し、胴部は肩が張らずに下ぶくらみ気味になる。頸部下の凸帯は小さくつまみ出している。口唇外面には沈線を入れておらず、頸部内面から口縁外面は横ナデを施す。頸部外面は縦ヘラ磨き、胴部外面は横ヘラ磨き、内面は指オサエナデの上をザッと横ナデを施す。胎土に極粗大石英粒を多く含み、焼成良好で、内面淡褐色、外面は淡褐色～赤茶色～暗褐色をなす。

20は、底部は壺様の充実したもので、中央部のみが大きくへこむ。外面はナデしており、内面上半は細な横ヘラ磨き、以下はナデる。粗砂粒はわりと少なく、焼成やや良く、内面は暗褐色、外面は淡褐色から黒褐色をなす。胴部の開き方や、調整手法などから 2 号袋状空穴出土品(第31図-17)と同様の脚台付無頸壺となろう。

壺 (21・22) 21は、壺状の底部を上端につくり掘抜がりに開くタイプで、やや大型品である。



第34図 3号袋状空穴出土土器実測図(その3) (縮尺 1/4)

III 各造形と出土遺物

上端中央部は大きくへこみ、外面上半は縦な板状工具による掠過痕をみせ、下半は目の細かい縦ハケを施す。内面は縦にナデしており、胎土に粗砂粒多い。焼成良好で、内面肌色、外面は淡褐色をなす。

22は、口径20.0cmとなるやや小型品で、体部外面下半は縦な横ヘラ磨きを施す。他は、内外面ともに極めて縦なナデを施し、全体に手捏ね的粗雑さを感じさせる。口唇部内外から内面外周寄りには煤が付着して、小型甕の蓋となろう。胎土に粗砂粒が多く含み、焼成良好で暗茶褐色をなす。

以上の3号袋堅穴出土土器をみてみよう。すべて弥生中期初頭の範囲の中でおさめられる。甕は如意形口縁のもの5点、亀ノ甲系統(新)3点がみられ、ここでは後者の胴上位に僅小化した凸帯を付けるものが2点みられ、これは口縁内端がわずかに突出しており、新しい傾向を示す。如意形口縁のものでも、口唇面に沈線をいれるものは、胴部がふくらみをみせる傾向がある。底部は、外下端が張り出すものと、16の如き全く張らないものがみられる。16は、遠賀川流域系の城ノ越式の甕に系統を求めることができる。

蓋も大小の2種類があり、これは、2号袋堅穴出土品の例と同様である。少なくとも小径のものは両造形出土品とともに煤が付着して実際に煮沸容器にかぶせていましたことが明確である。

4号袋状堅穴(第27図)

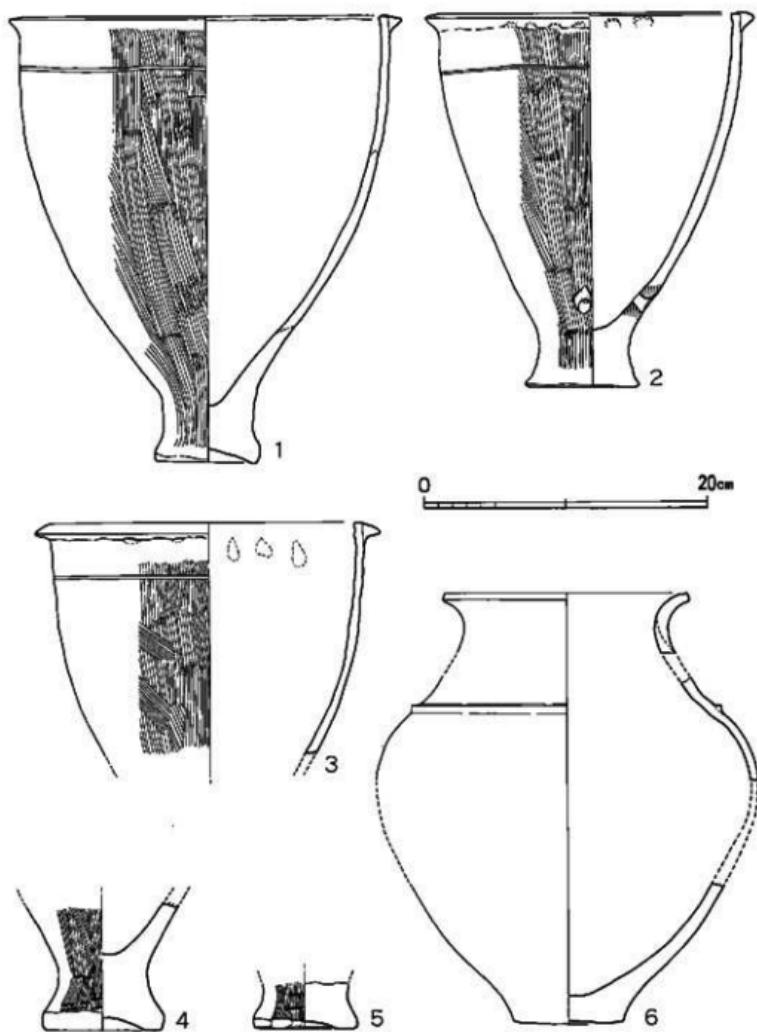
遺跡の北東隅に近い位置に検出された。底面は85×80cmの円形プランをなし、壁は上方へひろがる。現状深さ66cmと浅く、本来の断面形は上方へ反対にせばまって算盤玉状をなすかと推定される。底面のPitは検出されなかった。埋土は炭を含んだ黒色土で、土器もかなり出土しており、ごみ捨て場となって埋没したことと考えられる。

出土遺物(第35・36図、図版17)

甕(1~5)1は、口径27.8cm、器高31.3cm、底径7.2cmを測るほぼ完形品である。胴部はゆるやかにふくらみを感じさせ、口縁外端を断面三角形に肥厚させ、胴上位にやや太い沈線をめぐらす。口縁内端はわずかに突出し、底部は充実して、外面は大きくへこむ。口縁内外面横ナデ、胴部外面は目の粗い縦ハケ、内面は縦ナデが施される。底外面凹部は左廻りの回転方向の粗いヘラ削りが施される。口縁上面中央の一部にハケが残る。胴部中位の片側のみに黒斑部が認められる。胴部下位から底部へは二次火熱を受けて赤変し、胴部上半から口縁部にかけては煤が付着する。胎土に粗石英・長石粒を多く含み、焼成良好で内面暗黄褐色、外面は淡褐色から暗赤色をなす。

2は、1とほぼ同様の器形をなすが、やや小ぶりで、胴部下半の底部近くの側面に焼成後の穿孔1個がみられる完形品である。口径23.3cm、器高26.0cm、底径8.2cmを測る。胴上位の沈

2 袋 状 墓 穴



第35圖 4號袋狀墓穴出土土器實測圖 (縮尺 1/4)

III 各造形と出土遺物

縁は、やや細めでかなりよたっており、底部は厚く充実して、底外面は中央部がわずかに上げ底状となる。口縁内外面は横ナデ、腹部外面は粗い縦ハケ、腹部内面上半は斜め方向のナデ上げ、下半はナデる。胸部下半から底部は二次火熱を受けて赤変し、それ以上には煤が付着する。胎土に粗石英粒・長石・茶色粒子を多く含み、焼成良好で淡白褐色から暗褐色をなす。

3も、2と同様の亀ノ甲系の器形をなし、口径 24.4cm を測る。胴上位に太めの沈線を巡らし、口縁外端はいくらか長く下垂する。口縁内外面は横ナデ、腹部外面はやや粗い縦ハケ、内面はナデる。口縁上面から外面全部に煤がこびりつく。胎土に粗石英粒・金雲母片を多く含む。焼成良好で内面暗黄褐色、外面地色は淡褐色をなす。

4は、充実した脚台状につくる底部で、外面は中央部が丸くへこむ。底径 8.3cm を測り、腹部外面はやや目の細かい縦ハケ、内面は横ナデを施す。外下端側面は横ナデ、接地面は削り状をなす。胎土に粗砂粒多く含み、焼成良好で、内面暗褐色、外面は淡黄褐色をなす。

5も、充実した脚台につくる底部片で、底外面は中央寄りがいくらかへこむ。底径 7.3cm を測り、脚台部外面は目の細かい縦ハケ、外下端側面は面取り状のヘラ削り、接地面もヘラ削り、上げ底部はナデている。粗砂粒を多く含み、焼きは良く、暗褐色乃至暗黄褐色をなす。

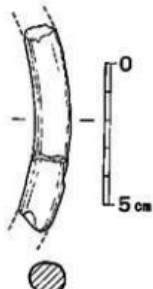
壺(6) 口縁、頸部、肩下半～底部の 3 破片が同一個体と確認されたので、図上復元を行なったものである。口径 17.5cm、頸部最大径 27.0cm、推定高 30.0cm、底径 7.9cm を測る。胸部上位に最大径を有し、縦長のタイプで、頸部下に断面三角凸帯を付け、頸部は上方へすぼまる。口縁外面は僅かにへこむ部分もある。底部はやや厚く、中央寄りがわずかにへこむ。器表全面の剥落が著しく調整は全く不明である。胎土に粗石英粒・長石を多く含み、焼成良好で、内外面ともに暗黄褐色をなす。

土製品(第36図) 断面が $1.25 \times 1.1\text{cm}$ の僅かに梢円状をなした湾曲する土製品である。表面には赤茶色の化粧土が残る。現存長 7.2cm で、胎土に粗砂粒を若干含み、焼きは良く、地色は淡褐色をなす。特形のジョッキ形土器の把手部分の可能性を考えられる。

以上の 4 号袋状堅穴出土土器は、いずれも弥生中期初頭の範囲に含まれるものである。1～3 の壺はほぼ同種で、如意形口縁のものはみられない。

6 の壺は頸部のしまり具合等に、より古い様相を残すが、壺との共伴状況から、他袋状堅穴出土土器共伴関係と同様に中期初頭となるのであろう。

壺下位の穿孔について 2 の壺の胸部下位の穿孔は注目に値する。この種の穿孔は、既述の 3 号袋状堅穴出土品(第33図-16)に



第36図 4号袋状堅穴出土
土製品実測図
(倍尺 1/2)

2' 袋状堅穴

もみられる。弥生前期壺の場合、よく底部中央に焼成後穿孔をみるとおり、所謂瓶としての機能への転化であるとの見解が多い。前期壺にみられる場合は、底部が未だわりと薄手で、穿孔はわりと容易である。本例のような厚く充実した底部中央に穿孔するということは至難の技であり、やはり、この場合、前期の習慣の名残りとして、瓶への機能転化によるものと考えたい。ただ、壺としての直接火にかけた煮沸容器としての使用は、焼・赤変等で、明らかであり、ある程度壺として使用したのちの便宜的転用であり、当初からのものではないことは明確である。なお、祭祀行為における意味での「仮器」へと化する為の穿孔という意見もあるが、本遺跡2例ともに、穿孔しにくい肩部下端近くの厚い部分にみられること、更に穿孔の容易な胴中位あたりへの穿孔例がみられないことなどから、反論され得る。また、穿孔自体も丁寧であり、打ち欠くというような所業ではないことも明らかであり、本例のような場合には、祭祀用仮器論には全く賛成しかねる。

5号袋状堅穴（第27図、図版13）

大溝2の中央部に、上半の殆どを切られて検出された。底面は195×150cmの梢円形をなし、深さは溝上面から考えると114cm内外となる。断面形は、上方へせばまるフラスコ状になるかと考えられる。底面中央には深さ約15cmの小Pitがみられる。

埋土は下層部分しか残らないが、焼土や炭を多く含む暗茶褐色土が認められ、出土土器量もありと多い。貯藏穴としての機能停止後に、ちり焼き場、ごみ捨て場として埋没していったことが考えられる。

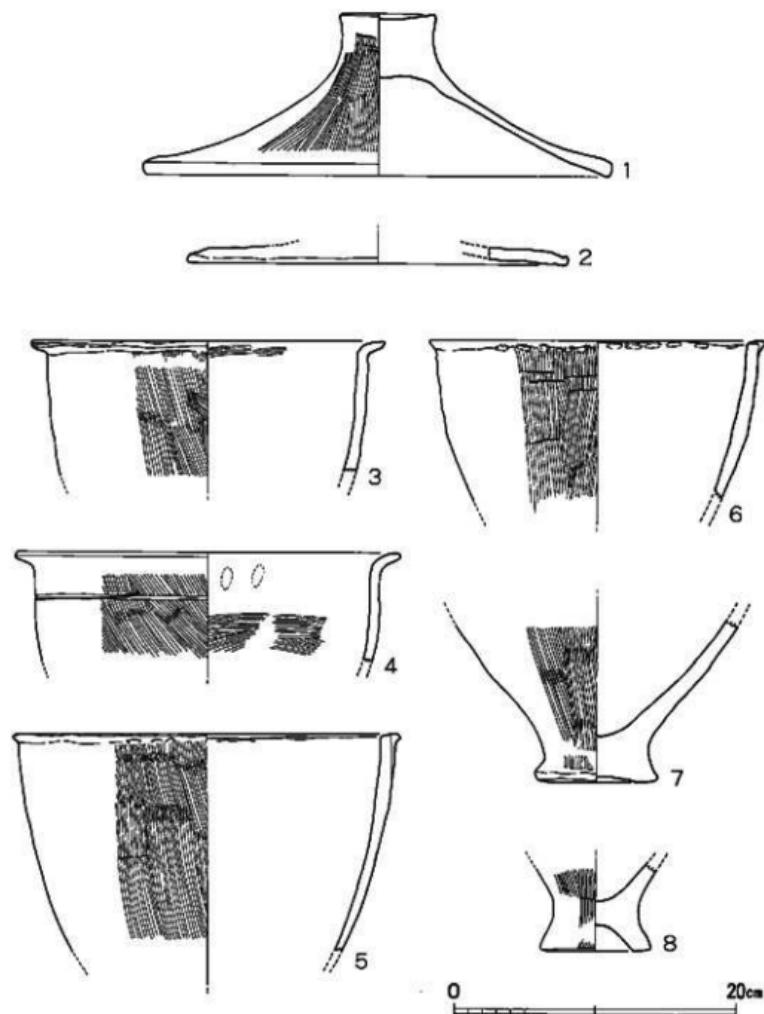
出土遺物（第37～39図、図版17）

壺（1・2）1は、上端部は壺の底部と同様につくり、裾拡がりに開く傘蓋状をなす。口径33.3cm、器高11.4cm、上端握り部径6.8cmを測る。握り部上面は全体にへこみ、口縁外面はいくらか、肥厚する。口縁内外面横ナデ、体部外面はやや粗い縦ハケ、握り部上端周縁は横ナデ、上面はナデる。内面は丁寧にナデしており、口縁内面から口唇外面まで煤が付着している。上端部と、体部下半の片側のみに、黒斑部が認められる。胎土に細石英・雲母・長石・茶色粒子をかなり含む。焼成や不良で、淡褐色をなす。

2は、1と異なり、錐なつくりの扁平となるタイプである。口径27.0cmに復元され、内外面とも極めて綿な横ヘラ磨きが施される。口縁内面から口唇外面にかけて煤が付着しており、胎土には粗砂粒を多く含む。焼成良好で、暗茶～暗褐色をなす。全体に手捏ねた感じさえ受けれる。

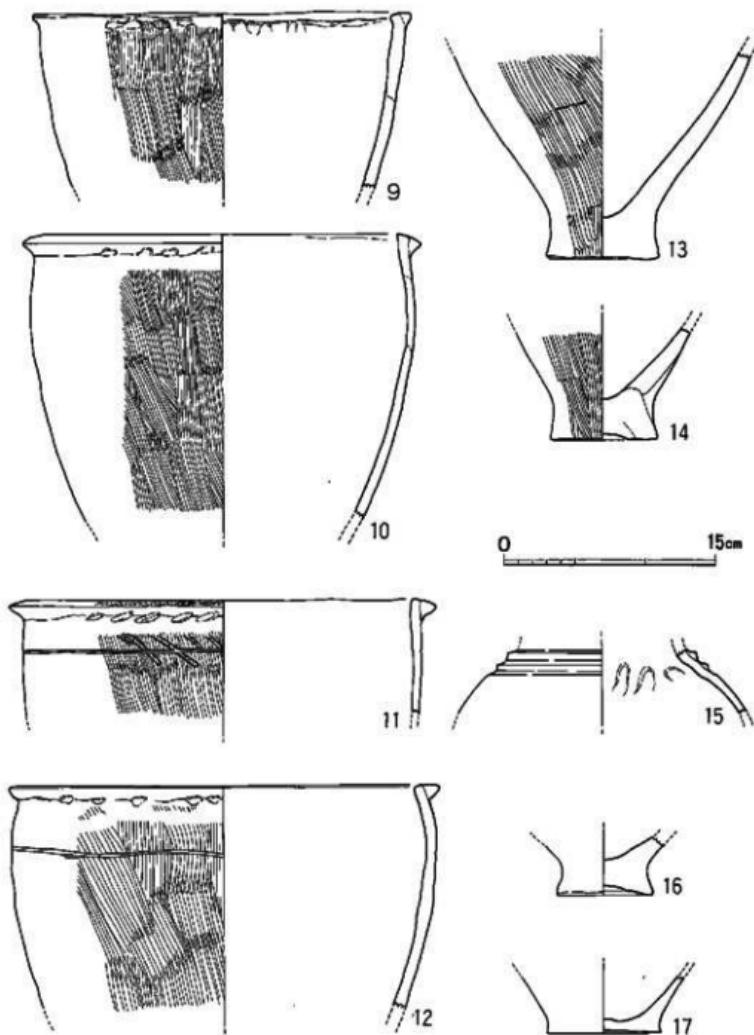
壺（3～14、18・19）3は、口径25.1cmで、口縁が短かく折れるようにして外反する類である。口唇外面には部分的に沈線を入れる。口縁内外面から腹部内面上半まで横ナデ、腹部外面は粗い縦ハケ、頸部内面には横ハケが残り、胴内面下半には縦ナデ上げがみられる。胎

III 各遺構と出土遺物



第37図 5号袋状竖穴出土土器実測図（その1）（縮尺 1/4）

2 袋 状 墓 穴



第38図 5号袋状墓穴出土土器実測図(その2) (縮尺 1/4)

III 各造形と出土遺物

土に粗砂粒多く含み、焼成良好で、内面暗茶褐色、外面は口縁上面から胴部にかけて全面煤がこびりつく。全体に歪つとなり、粗製である。

4は、如意形口縁で、胴上位に太い沈線を巡らすものである。口径27.4cmを測り、口縁内外面横ナデ、胴部外面は斜めの粗いハケ、内面は横ハケがみられる。胎土に粗砂粒多く、焼成良好で、内面明茶色、外面は淡黄褐色をなす。

5は口径27.5cmで、口縁外端に粘土を貼り付けて極く小さく肥厚させたものである。口縁内外面ともに横ナデ、胴部外面はやや粗い継ハケを施す。内面はナデており、胎土に粗石英・長石・雲母片・茶色粒子を多く含む。焼成やや良好で内面は暗黄褐色、外面は煤がこびりつく。

6は、5と同様に、小さく口縁外端を突出させる類で、口径24.0cmを測る。口縁上面は横ナデ、胴部外面はやや細かい継ハケ、内面は丁寧にナデしている。口縁内面上端と、外面下端には強い指オサエ痕が連続して残る。粗石英・長石・雲母片多く含み、焼成やや良好で、内面暗黄褐色、外面は煤が付着するが、地色は褐色をなす。

7は、底径8.8cmを測り、いくらか上げ底状となるやや充実した底部である。胴部下半は粗い継ハケが施され、内面はナデしている。外下端側面は横ナデ、下半から底部にかけては二次火熱を受けて赤変し、上半は煤がこびりつく。胎土に粗石英・長石・金雲母片が多く含み、焼成良好で内面暗褐色、外面地色は淡褐色をなす。

8は底径7.8cmを測り底外面中央部は大きくへこみ、外面はやや粗い継ハケを施す。内面はナデ、底部外面もナデしている。胎土に粗砂粒多く含み、焼成良好で、内面暗褐色、外面は淡茶褐色をなす。

9は、5・6と相通じるような、短かく外方へ突出させるような口縁につくる。内端側への小さな突出もみられる。口径26.8cmで、口縁上面はやや内傾する。口縁内外面横ナデ、胴部外面は工具幅1.8cmで12本の継ハケを施す。内面は丁寧にナデしており、外面は煤が付着してまっくろけである。胎土に粗大な石英粒・長石を多く含み、焼成はやや良好で、内面は淡黄褐色から暗茶色をなす。

10は、口径28.2cmを測り、胴部はふくらみをみせ、口縁外端に三角凸帯を付ける。胴部外面はやや細かい継ハケを施し、内面はナデしている。口縁外下端に指オサエ痕が残り、口縁内端部は部分的に小さく突出する。胴外面下半は二次火熱を受けて赤変し、上半には若干の煤が付着する。胎土に粗石英・長石・雲母片を多く含む。焼成良く、内面は暗茶色、外面は暗褐色から赤茶色をなす。

11は、口径30.2cmを測り、口縁外端に断面三角形の粘土紐を貼り付けた口縁につくる。頭部下にはやや深い沈線を巡らせる。口縁内外面横ナデ、胴部外面はやや粗い継ハケ、内面は丁寧なナデを行ない、口縁上面中央部には斜めハケを残す。口縁外端部から胴部外面には煤が付着しており、胎土には粗砂粒多く含む。焼きは良く内面は淡黄褐色を呈する。

2 袋 状 塵 穴

12は、張る脇部から口縁部が内窓気味となる。口径30.7cmで、脇最大径部にかなりよたるやや太い沈線を巡らす。脇部外面は粗い雜な紙、斜めハケ、口縁内外面は横ナデ、脇部内面は斜めナデ上げを施す。脇部下位は二次火熱を受けて赤変し、上半から口縁上端面までは煤がこびりつく。胎土に粗石英・長石・細雲母片を多く含む。焼成良好で内面暗黄色から暗褐色をなす。全体に粗い作りである。

13は、底径8.0cmで、底外面は浅く上げ底状となる。脇外面は極めて粗い雜な紙ハケ、内面はナデしている。下半から底部にかけては、二次火熱を受けて赤変し、上半には煤がこびりつく。胎土に粗砂粒多く、焼成良好、内面暗褐色、外面の地色は淡黄褐色をなす。

14は、底径7.6cmで、中央部のみ丸く上げ底状となる。外面はわりと整然として目の粗い紙ハケ、内面は丁寧にナデしている。接地面は割り状となり、上げ底面はナデ調整がみられる。外面上端には煤が付着している。粗砂多く含み、焼き良く、内面は暗褐色、外面は暗赤茶褐色を呈する。

18は、口径29.7cm、器高31.0cm、底径7.8cmを測るほぼ完形品である。口縁内外面横ナデ、脇部外面は極めて粗い雜な紙ハケ、内面は丁寧にナデしている。上げ底部外面もナデしている。口縁内端は小さく突出している。口縁外端部から脇部上半は煤が付着する。胎土に粗石英・長石を多く含み、焼成良好で、内面暗黄褐色から暗褐色、外面は淡茶色から暗褐色をなす。

19は、ややふくらむ脇部となり、口径27.5cmで、脇上半には太めの沈線を巡らせる。口縁内端はいくらか突出気味となる。口縁内外面横ナデ、脇部外面は極めて粗い雜な紙ハケ、内面はナデしているが指オサエの凹凸著しい。脇部外面は煤が付着する。粗砂粒多く、焼成良好、内面暗黄褐色、外面暗褐色をなす。

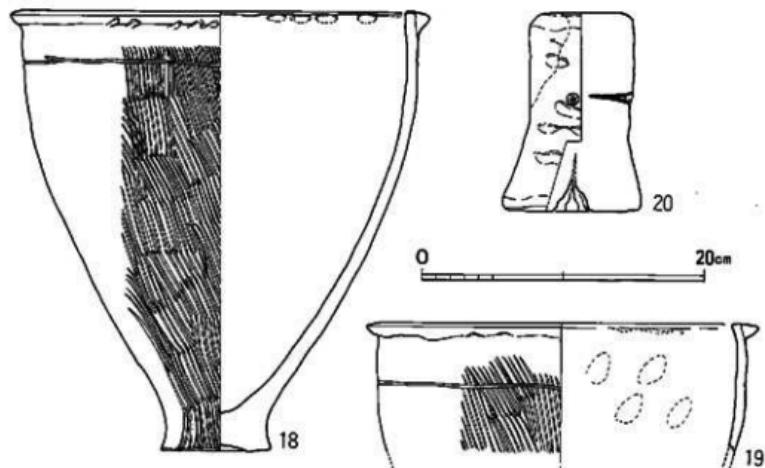
壺(15~17) 15は頸部と脇部の境目に、断面三角形凸部を2本連続して貼り付けている。脇部外面は横ヘラ磨き、内面はナデしている。胎土に粗石英粒・長石をかなり含む。焼成やや不良で、外面ともに黒褐色をなす。

16は、底径6.6cmを測り、二段に上げ底状となる。外面は紙ナデ、内面は粗い斜めヘラ磨きを施す。胎土に粗砂多く含み、焼成やや良好で、内面灰褐色、外面は暗褐色から黄褐色をなす。脇部の開き方、調整手法などから壺の底部と判断される。

17は、底径8.0cmを測る薄手のタイプで、全体にわずかに上げ底状となる。器表面は磨滅するが、外面ヘラ磨きらしく、内面はナデしている。胎土に粗砂粒若干含み、焼成良好で、内面暗灰褐色をなし、外面は茶褐色から暗褐色を呈する。

支脚(20) 粘土柱の如き感を呈し、上端が平坦面をなし、下端はやや開き、底面中央に孔を残す。上面径6.0cm、器高14.0cm、下端径9.8cmを測る。中位に中心へ向けて小円孔が、棒を突っ込んだような痕跡をみせる。上端から上半部へかけて片側のみに二次火熱を受けて赤変した跡(図中の点線・矢印範囲内)がみられ、煮沸時の支脚に使用されたことが明らかである。胎土

III 各遺構と出土遺物



第30図 5号袋状堅穴出土土器実測図（その3）（縮尺 1/3）

に粗石英・長石・雲母片を多く含み、焼成良好で黄褐色。全体に手捏ね風である。

以上の5号袋状堅穴出土土器は、殆んどが弥生中期初頭の範囲に収めらるべきものである。壺は如意形口縁のもの2点、亀ノ甲式系統のもの8点であり、各々肩部上位の沈線の有無の別がある。壺のうち17は、薄手の平底風のもので、中期前葉の新しいものであろう。18は、壺と同様の底部をもち、他袋状堅穴出土例にもみられる器形となろう。

支脚について 支脚は、この期のものとしては貴重品である。即ち、弥生中期前葉になると、円筒形に近い精製の器台が多量に出現する。この形態が後代の土師器に至るまで通継と変化しながら続くわけであるが、この発生については明らかにされていなかった。ただ機能的な意味を含んだ器種としては「器台」なのか「支脚」なのか各々意見の分かれる所であり、また、細分して成る時期のものは支脚であり、他は器台であるという分析も行なわれるところである。ここで図示した20は火を受けた状況から支脚と判断したわけであり、以後の時期のものの用途論については稿を改めることとしてここでは触れない。本遺跡の立地する洪積台地の西端にて調査された下原遺跡第3号堅穴（註1）からは、精製器台とともに粗製器台2点が屋内土塙内より出土している。中期前葉の所産であり、この2点は一応細い中空になっている。また筑紫野市山家の大島遺跡（註2）第30号貯藏穴・大溝上層においても精製品と共にボテボテの類が出土している。いずれも中期前葉期であり、この期に既に精・粗の二種が機能分化したと考え

3 木棺墓・石棺墓・土塙墓

ねばなるまい。この中期前葉における二種の共存は他にも各地に認められるところであり、粘製品においては火を受けたものは全体量としては極く少ない方で、かえって、祭祀的性格の土塙中より出土することが多い。粗製器台の方も明らかに火を受けたものは少ないが、これほど明らかに共存すると、用途の別は区別せざるを得ない。粘土柱の如き製品が6世紀以降奈良期までの住居跡内窓の支脚として、散見することは知られるところであり、他の小鍋・高杯等の転用品と異なり、支脚として据えられていたことは明らかである。このような傍証からも考えられる如く、やはり中期初頭の時期の煮沸時の支脚として本遺跡例は貴重である。この時期に窓の底部自体が脚台状となり、不安定であることを考慮すると、当然それを支えるものが必要なことは論を待たないところである。

註 1) 福岡県教育委員会「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告一2-」1983

2) 福岡県教育委員会「冷水バイパス関係埋蔵文化財調査報告」1982

第3表 袋状窓穴一覧表

(単位cm)

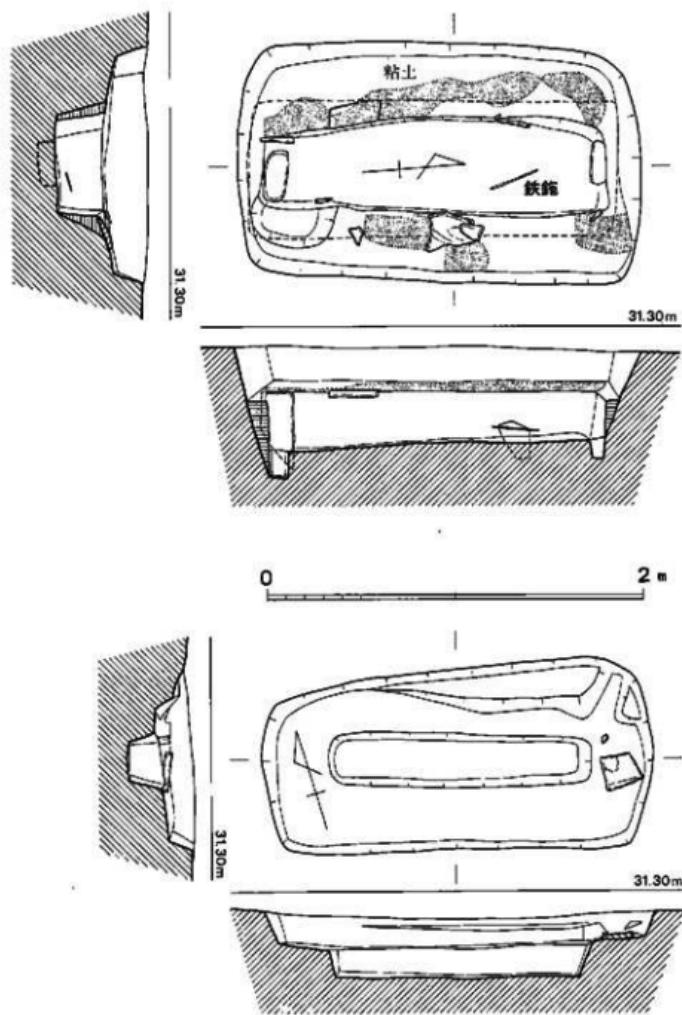
番	底面プラン	断面形	底 高	上面径	深さ	床面 Pit	出 土 造 物	時 期	備 考
1	円 形	円筒状	123×106 131×126	65	無し	壺片	弥生中期初頭		
2	大型 箱 円 形	フラスコ状 348×220 294×191	112	有	壺多量・蓋・壺				
3	円 形	算盤下状 (?)	135×110 +α	?	95+α	有	壺・蓋・壺	〃	大溝2に切 られる
4	円 形	算盤玉状 (?)	85×80	172×163 66+α	無し	壺・蓋・土製品	〃		
5	椭円形	フラスコ状 (?)	195×150	?	114	有	壺・蓋・壺・支 脚	〃	大溝2に切 られる

3 木棺墓・石棺墓・土塙墓

1号木棺墓(第40図、図版8)

大溝2中央部の北側に位置する。主軸をN4°30'Eにとり、両小口端に掘り込みを残す。長軸214cm、短軸126cmの四丸方形の土塙を掘り、両小口に狭い木板を突っ込み、長側板をはめ込む。裏込め土を入れて、長側板を更にしっかりと締め込むために小板石を各所に裏込めする。遺体を収め、副葬品を納めて、木蓋をする。木蓋は幅が棺身幅より若干広いぐらいのものを数

III 各遺構と出土遺物



第49図 1号木棺墓・2号土塚墓実測図(縮尺 1/30)

枚並べる。蓋の周縁に青灰色粘土の目貼りを行なう。粘土とともに小板石も縁おさえ的に据え置かれる。棺身内法は、長さ160cm、北端幅45cm、南端幅30cmとなり、北端に幅広くなっている。

副葬品は鉄剣1本のみで、床面より10cm程浮いており、頭位を北とすると、ちょうど胸の上に刃先を足の方に向けて置かれたものと推定される。

裏込土中より若干の土器断片が検出された。これによつて、この造構の當まれた時期の上限を知り得ることが出来る。

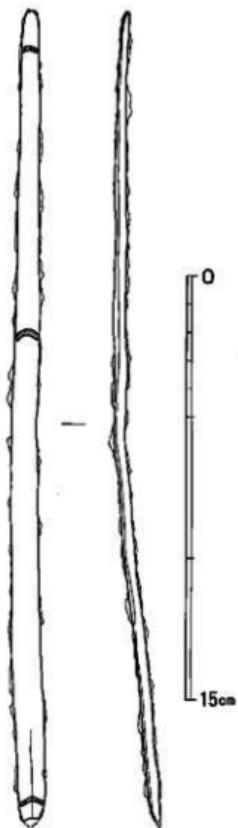
副葬品（第41図、図版22）

鉄剣 出土状態は前述の通りである。先端部がわずかに欠損する。現存長さ28.8cm（推定復元長29.0cm）、幅0.6～1.0cmと刃先へとわずかに広くなる。重量20.6gである。使用時の柄との装着・使用法と関係があるのであろう、ほぼ中央で強く、更に基部から4.5cmの位置から僅かに屈折している。刃先部は3cm長さにわたって鎌が中央に観察される。細長い鉄板を全体にわたって断面U字形に曲げたものである。木質、革等の付着痕は認められないが、目の細かい布痕らしいものが、かすかに裏面側中央付近に観察される。

裏込土中出土土器（第42図）

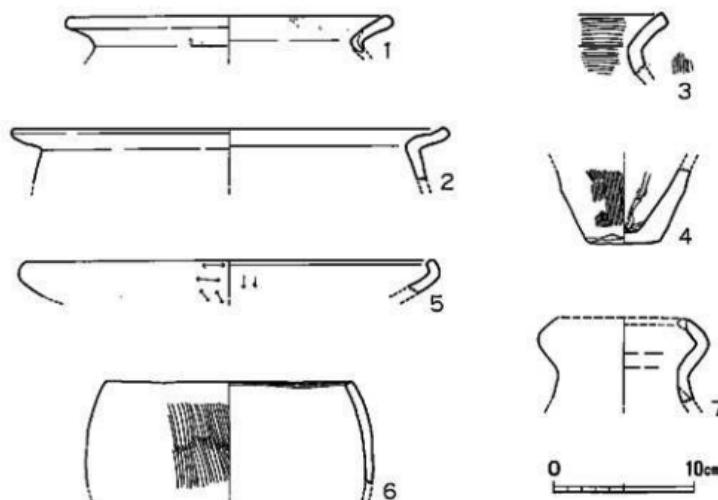
甕（1～4） 1は、口縁小片で頸部内面にしっかりと稜をつくらず、屈曲して強く外反し、口唇部は丸くなっている。復元口径23.0cmで、口縁内面上位はわずかにへこむ。内外面横ナデ調整を施し、外面には煤が付着する。丹の飛沫と考えられるものが内外に付着している。粗砂かなり含み、焼成やや不良で外面暗褐色、内面は淡黄褐色をなす。

2は、口径30.8cmを測り、頸部内面に稜をつくり、強く屈折して開く。口縁部はS字状に曲がり、跳ね上げ口縁的な感じを受ける。全面密滅して調整は不明で、粗砂多く含み、焼成やや不良で淡黄褐色をなす。3は、頸部内面に稜をつくり、くの字状口縁をなす。胴部はやや張るものと思われ、口縁内面は粗い横ハケ、口縁外縁ナデ、胴部外縁は粗い縦ハケを施す。外面には煤がこびりつく。4は、底径5.4cmの、小さなやや凸状となる底部片である。外面は粗な細かい縦ハケ、内面はナデており、指オサエが著しい。粗砂



第41図 1号木棺墓副葬鉄剣
実測図（縮尺 1/2）

III 各造構と出土遺物



第42図 1号木棺墓墳土中出土土器尖削圖（縮尺 1/4）

かなり含み、焼成良好く、内面暗茶褐色、外面暗褐色をなす。

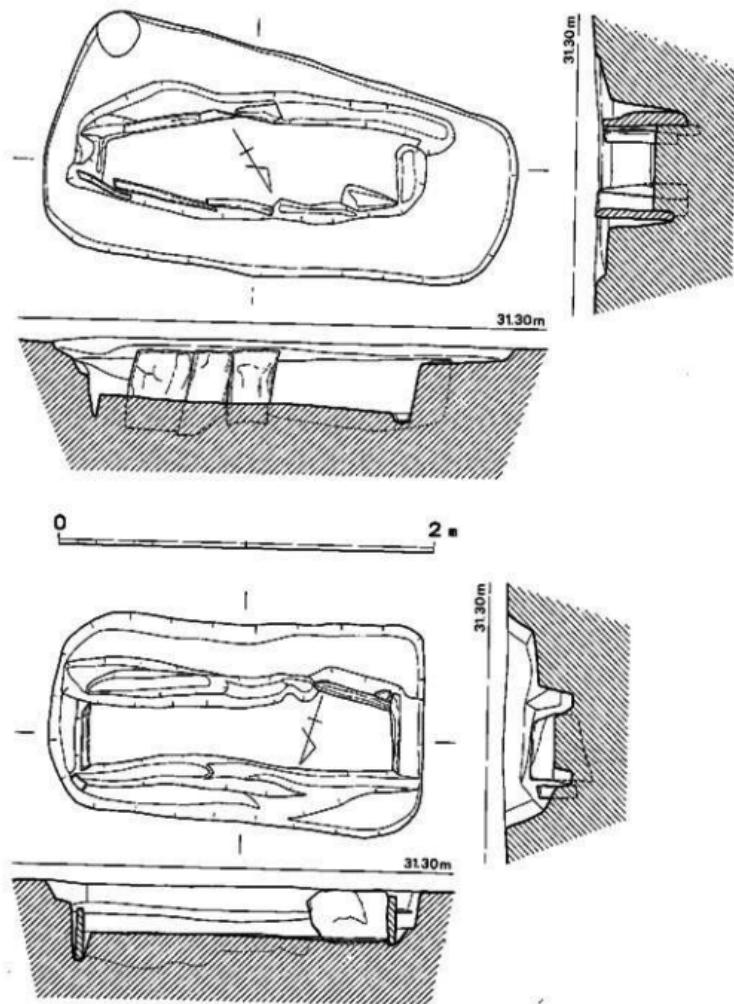
高杯（5）口径28.2cmで、口縁は短かく丸く屈曲して内湾する。口唇部内外面横ナデ、外面は横から斜めのヘラ磨き、内面は継ヘラ磨きが施される。細砂多く含み、焼成やや良好で、淡褐色をなす。

壺（6・7）7は、袋状口縁壺で、袋部内外面に縫は作らない。口縁内外面ともに横ナデ、外面は丁寧なナデ、内面は縦な横方向へのナデを施す。粗砂多く含み、焼成良好で黄褐色をなす。6は、口径17.4cm、胴部最大径19.8cmに復元できる無頸壺状の器形をなす。口唇部には沈線をめぐらせ、口縁内外面横ナデ、胴部外面は粗い縦ハケ、内面は糸めナデが施される。胴部片面に黒斑部が認められ、胎土に細砂粒を多量、粗砂粒をいくらか含む。焼成良好で内面淡黄褐色、外面は淡茶色をなす。

以上の裏込土中出土土器をみてみると、1・2は弥生中期末、7は後期前葉、3・4は後期中～後葉の年代が与えられる。この造構の年代の上限としてより新しい時期をとると、弥生後期後葉が考えられ、造構の営なまれた時期もこれをそう下る時期ではなく、弥生後期後葉～終末前後とされよう。

鉄籠の年代 斧は、北九州において弥生期のものは断面が浅いU字形をなすもので、幅広く

3 木棺墓・石棺墓・土塚墓



第43圖 1・2号石棺墓実測図（縮尺 1/30）

III 各造構と出土遺物

短かいものが多い。細身の長い類例を探すと、沙井掛造跡（註1）出土品にみられる。これは本造構と同型式の木棺墓出土品であり、幅が1cm弱程度のもので本品と同様である。弥生中期後半の立岩10号石棺副葬のものも、同様の細身で長いものである。新しいものでは、筑紫野市唐人塚造跡（註2）2-1号箱式石棺墓副葬品があり、長さ22.2cm、幅1.15cmで、断面は浅いU字形をなす。これは長いタイプで全長が残る少ない例で、当西原C1号木棺墓例と同様に、刃先部が大きく曲がる。更に基部側も5.5cmぐらいのところから同方向へ曲がる。この唐人塚例は、布留式併行期の甕を共伴する石蓋土塚墓と同墳丘内に當なまれた石棺出土品で、4C代まで下降する例として注目される。

以上のことから、甕の形態からみると弥生中期後半から4C後半までの幅がみられ、表込土中出土土器からその上限が弥生後期後葉であることが判った。更に、裏込めを行なう組み合わせの木棺墓という造構の面からも、古墳時代初期以降には降り得ず、諸結果より、本造構は弥生後期後葉から4C後半までの間に位置付けられよう。

註 1) 福岡県教育委員会「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 XXV」1979

註 2) 福岡県教育委員会「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 XVIII」1977

1号箱式石棺墓（第43図、図版9）

主軸をN57°Wにとり、大溝2の中央部の北側、1号木棺墓の東隣に當まる。246×130cmの隅丸長方形の1段目掘方を掘り、それと主軸がかなりずれて187×68cmの墓壇を掘り、その壁に沿って側石を据えるための溝を掘り下げる。片岩質の板石を縱長になるように立てる。現状では北東長側辺に3枚、南西長側辺に3枚が残り、他は蓋石まですべて抜かれてしまっている。復元すると、両小口に各1枚づつ、東北長側辺に5枚、西南長側辺に6枚が考えられる。長側辺の石は小口の石を挟み込むようになっている。側石上面は高さをそろえている。

棺内法は、長さ156cm、幅は北西端で37cm、中途で48cm、東南端で22cmを測り、全体に舟形に近いプランをなし、北西側が頭位となろう。深さは石材上面より30cmとなる。

両側面の石材内面には朱の塗布が認められ、床面にも全面に認められる。遺骨、副葬品は皆無である。埋土中から土器小片が出土した。

埋土中出土土器（第44図）



第44図 1号石棺墓埋土中出土土器実測図（縮尺 1/4）

甕 口径27.2cmを測り、頸部内面に稜をつくらず丸く屈曲し、端部へと肥厚し丸くなる。口縁内外面横ナデ、口縁内面下半には横ハケが残る。細砂粒を多く含み、焼成不良で、内外面暗黄褐色をなす。

1/4のみ残る小片である。

3 木棺墓・石棺墓・土塗墓

この土器は弥生中期末の所産で、本造構の営まれた時期はこれを前後するぐらいの時期であろう。石棺の形態からみると、舟形プランをなし、石材を幾段に数多く用いることなどから、弥生時代の組み合わせの箱式石棺墓の特徴を有しており、それ程下降しないのではないかと考えられる。

2号箱式石棺墓（第43図、図版9）

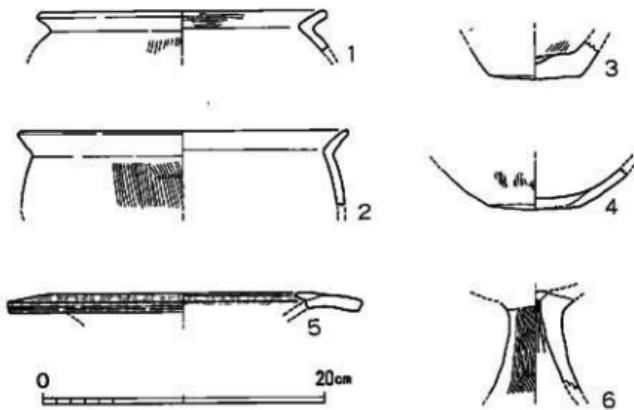
大溝2の中央部の北側、1号木棺墓の西側に、8号竪穴住居跡を切って、営まれる。主軸をN74°Eにとる。199×114cmの圓丸長方形の1段目掘方を掘り、更にその中に180×63cmの墓域を掘る。この壁際に沿って、石材を差し込むために溝をめぐらせる。側壁材の殆んどと蓋石すべてを抜かれており、両小口と南辺の1石のみ残る。いずれも片岩系の板石を横長になるよう据えており、上端面はあまりそろっていない。

棺内法は、長さ162cm、幅は西端で32cm、東端で33cmとなり、深さは石材最高部から25cmしかない。石材内面と床面には、朱の痕跡が認められる。

掘方が西の方が広く、西を頭位としたと想定される。副葬品及び遺骨等は全く検出されなかった。棺内埋土中より若干の土器小片が出土したが、後から混入した可能性もあり、営まれた時期を求めるのに一応の参考として、以下に図示したところである。

埋土中出土遺物（第45・46図）

壺（1～3）1は、復元口径20.6cmで、胴が張り、頸部内面に稜をつくり、強く屈曲して外反する。端部は丸く、口縁内外面横ナデで、口縁内面には横ハケが残る。肩部外面は粗い縱ハ



第45図 2号石棺墓埋土中出土土器実測図（縮尺 1/4）

III 各遺構と出土遺物

ケ、内面はナデる。細砂多く含み、焼成やや不良で、内面暗褐色、外面は淡茶褐色をなす。2は、口径23.5cmを測り、胴部はいくらか張り、頸部内面に稜をつくり、直線的にくの字状に開く。口縁内外面横ナデ、胴部外面は粗い継ハケ、内面はナデる。細砂若干含み、精良であり、焼成良好で淡赤褐色をなす。3は、外面が凸レンズ状にふくらむ底部で、底部6.4cmを測る。外面はナデ、内面にはハケがわずかに残る。粗砂多く、焼成やや不良で、内面暗褐色、外面は淡茶赤色を呈する。

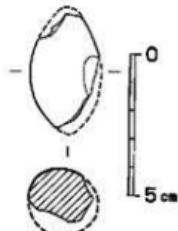
壺(4) 底径6.4cmで、凸レンズ状にふくらむ類である。全体に薄手で、胴部外面は継ハケの上をナデ消し、内面は雜な継ヘラ磨きを施す。粗砂かなり含み、焼きは不良で内外面ともに灰褐色をなす。

高杯(5・6) 5は、口径25.0cmを測り、錐先状口縁となる小片である。内外面ともに丹塗りが施され、胎土精良で、焼成良く、地色は淡黄褐色を呈する。6は、脚部のみで、脚柱径がやや小さく3.7cmとなる。外面は細かいが雜な継ハケ、内面上半にはシボリ時のシワが残る。孔の有無等は全く不明。細砂わずかに含み精良で、焼きやや良く、淡黄茶褐色をなす。

投擲(第46図) 土製品で、断面円形の両端がとがるラグビーボール状の類である。かなりを欠くが、推定長4.5cm、径2.5cm、現存重量は13.0gとなる。胎土精良で、外面黒褐色、内部は淡茶褐色をなす。

以上の出土遺物は、各時期にわたる。上製投擲は弥生前期から出現し、5の高杯は、弥生中期末の所産で、1の壺は、中期末～後期初頭となろう。2の壺、3・4の底部は弥生後期後葉代のものである。6の高杯は弥生後期後葉～終末期の大型のものでは無く、胎土・調整などからみると、むしろ、古式土器に伴なうものに近い。

本遺構の営まれた時期は、出土土器の新しい方をとると、弥生終末から古墳前期となる。弥生後期後葉となる8号堅穴住居跡を切っており、その上限がさまる。更に石棺墓自体の形態は、1号石棺墓とかなり異なる。つまり掘り方と棺体の主軸の有無、棺のプランが1号石棺の舟形に対して、こちらは、それほど中央部が広くならず長方形に近い感じになること、石材の用い方等の諸点に明らかな違いが認められる。いずれも、古墳時代の石棺にみられる特徴に近い。よって当石棺は、高杯6の時期に近い古墳時代初頭と考えておく。



第46図 2号石棺墓出土
投擲実測図(縮尺1/2)

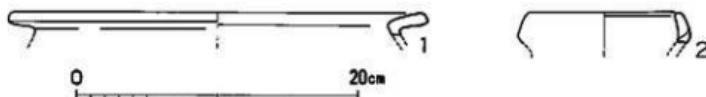
1号土塙墓(第4図)

大溝2東端の南側、1号堅穴住居跡の北西側に位置する。ちょうど主体部の北側のほとんどを試掘時のユンボバケットによって削り取られており、全容は明確でない。大溝2に接するか

3 木棺墓・石棺墓・土塚墓

の如きであるが、その切り合い関係も明らかでない。

主軸をほぼ南北にとり、幅148cm、長さ $200 + \alpha$ cmの1段目掘方内に、幅45cmの墓底を掘り、主体部とする。粘土、板石等がみられないことから、石蓋乃至木蓋等の土塚墓となるかと考えられる。副葬品、遺骨等は検出されなかった。埋土中から数片の土器小片が出土した。



第47図 1号土塚墓埋土中出土土器実測図(縮尺 1/4)

埋土中出土土器(第47図)

壺(1) 口径29.7cmで、頸部内面に稜をつくり、強く屈折して開き、内面横ナデを施す。口唇部へむけて厚みを増す。胎土に細砂粒を多く含み、焼成やや不良で、淡褐色をなす。

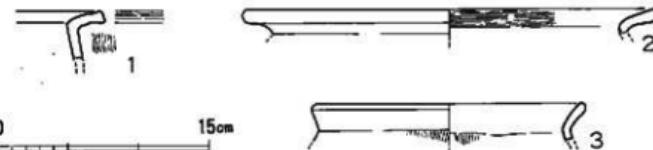
壺(2) 袋状口縁臺で、袋部内外面には末だ稜をつくらないタイプである。口径10.6cm、袋部径12.1cmを測り、内外面ともに横ナデを施す。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で淡茶色をなす。1/4弱が残存する。

以上の2点の土器は、各々全容が明らかでないが、大旨、弥生中期末前後の所産である。当土塚墓の年代を決めるには小片で、ただその上限を示すにすぎないと考えられる。やはり、その形態等から2号土塚墓と同様の弥生後期に營まれたものではないかと考える。

2号土塚墓(第40図、図版10)

2号箱式石棺墓の南隣、大溝の上部を切って營まれる。主軸をN73°Wにとり、208×103cmの開丸長方形プランの1段目掘方を掘り、その中心に、長さ140cm、幅30cmの墓底を掘り、主体部とする。東端部に片岩質板石がみられ、石蓋土塚墓であった可能性が強い。主体部内法は、長さ130cm、幅は西端で19cm、中央で21cm、東端で15cmとなる。幅は西端の方がわずかに広いが、1段目掘方は東側の方々かなり幅広く作られており、頭位は東ではないかと考える。

副葬品、遺骨等は全く検出されなかった。埋土中より若干の土器小片が出土した。



第48図 2号土塚墓埋土中出土土器実測図(縮尺 1/4)

III 各遺構と出土遺物

埋土中出土土器（第48図）

壺（1～3）1は、頸部内面に棱をつくり、あまり張らない胴部から屈折して強く開き、口唇部上下端をわずかに突出させる跳ね上がり口縁の形態をなす。口縁内外面横ナデ、胴部内面はナデ、外面は粗い継ハケを施す。胎土に粗砂かなり含み、焼きは良く、淡黄褐色をなす。2は、復元口径29.3cmを測り、頸部内面で棱をつくらずに屈曲し、開く口縁につくる。口唇部は丸く、口縁内面上位でややへこむ。口唇部から口縁外面は横ナデ、内面は粗い横ハケを施す。細砂粒をかなり含み、焼きは良く、淡茶褐色をなす。3は、復元口径19.4cmを測り、やや張る胴部から内面に不明瞭な棱をつくり、くの字状に外側気味に開く口縁とする。口縁内外面横ナデ、胴部内外面は粗い継ハケを施す。粗砂いくらか含み、焼きは良く、淡茶褐色をなす。

以上の土器は、2が弥生中期末、1が遠賀川流域系の弥生後期初頭前後のもので、3は、後期中葉以降のものである。本遺構の営まれた年代は、土器からは弥生後期前後と考えられる。更に大溝2が完全に埋没してしまってから後に當されたことから、弥生中期末以降であることは明らかである。やはり1号石棺墓等と同様の弥生後期後葉前後ではないかと推定される。

4 土 坡

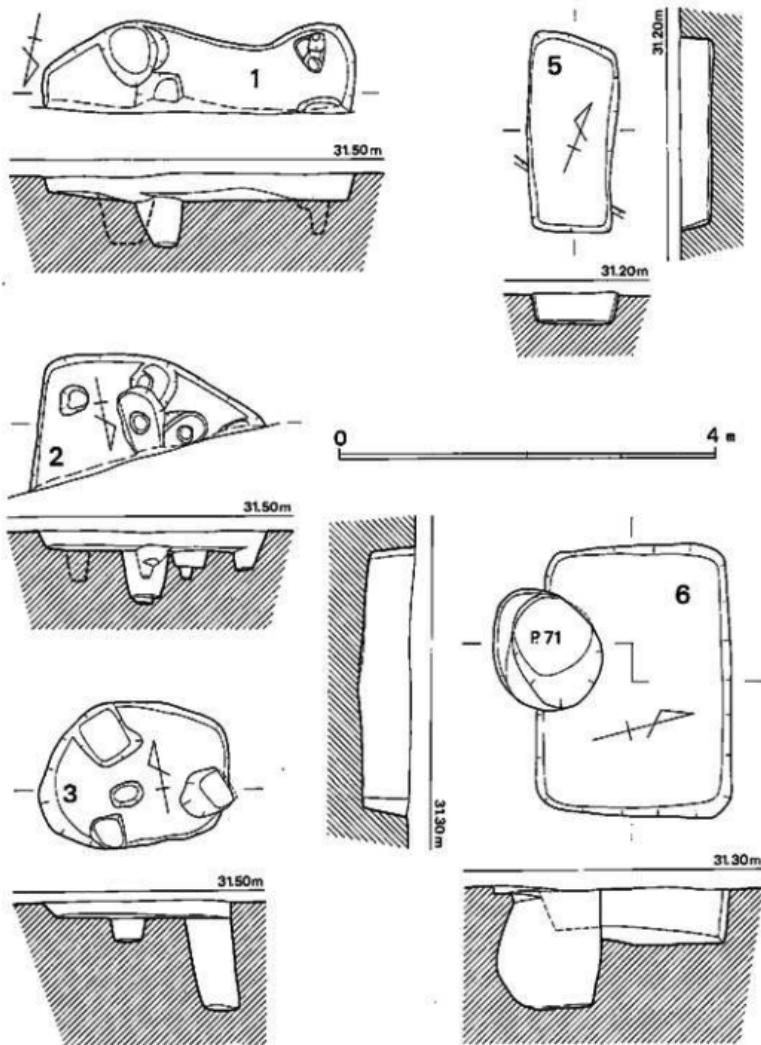
1号土坡（第49図）

1号袋状竪穴の北側、東西に走る新溝に北半を切られて南半のみ残る。不整梢円形状のブランをなし、底面も凹凸著しく、小Pitもいくつかみられる。現存長さ333cm、最大幅95cm、底面深さ30cmを測る。埋土は黒色土で炭をかなり含む。弥生土器片かなりの混在をみた。

出土遺物（第50図）

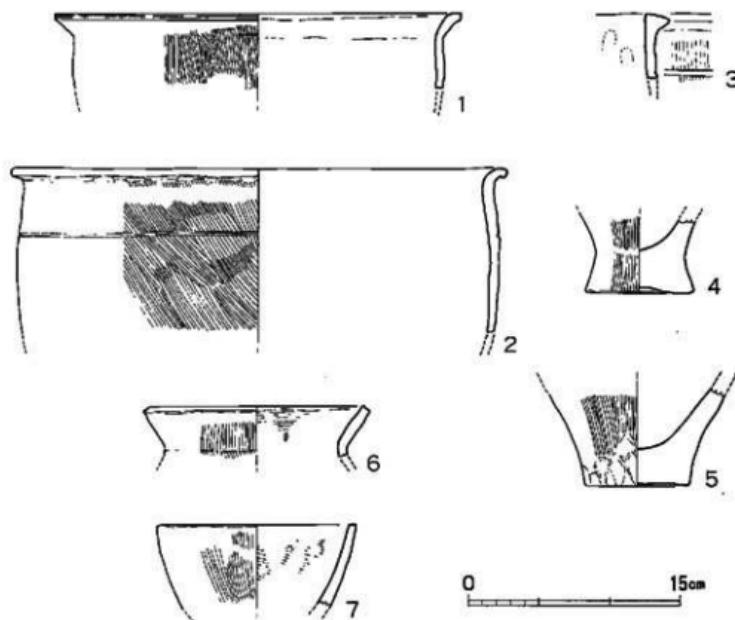
壺（1～6）1は、口径28.5cmで、如意形口縁の口唇部に沈線を入れたタイプである。口縁内外面横ナデ、胴部外面はやや細かい継ハケ、内面はナデる。粗砂多く含み、焼きは良く淡黄褐色から淡茶褐色をなす。2は、ふくらみをみせる胴部に、口唇部の丸く垂れ下がり気味の如意形口縁をつける頬で、胴部上位にやや深い沈線を施す。口径35.0cmを測るやや大型品で、口縁内外面横ナデ、胴部外面はやや粗い斜めのハケ、内面は丁寧にナデている。粗砂多く含み、焼成良好で内面暗黄褐色、外面は煤がこびりつく。3は、胴上位に太い沈線を施す龟ノ甲系統の壺片で、やや胴がふくらむ頬となろう。外面に粗い継ハケがみられ、粗砂多く、焼き良く、内面暗黄褐色、外面は煤がわずかに付着する。4は、充実した壺底部で、中央部がわずかにへこみ、外面にはやや粗い継ハケを施す。底径7.7cmで、内面はナデており、外面上半は二

4 土 坑



第48图 1~6号土坑实测图 (缩尺 1/60)

III 各造構と出土遺物



第59図 1号土塙出土土器実測図 (縮尺 1/4)

次火熱を受けて赤変している。5は、外下端部が全く張り出さず、そのまますばまる形態をなし、底径7.3cmを測る。底面は全体に僅かな上げ底状となり、胴部内面はナデ、外面はやや粗い縦ハケ、下端部は指オサエ痕が残る。外面下半は二次火熱を受けて赤変し、上半には煤が付着する。6は、やや張る胴部から、頸部内面に稜をつくらず屈曲し、くの字状に開く口縁となる。口径16.0cmの小型品で、口唇外面はわずかにへこむ。口唇部内外面横ナデ、口縁内面は横ハケの上を横ナデ、外面は粗い縦ハケを施す。外面には煤が若干付着する。

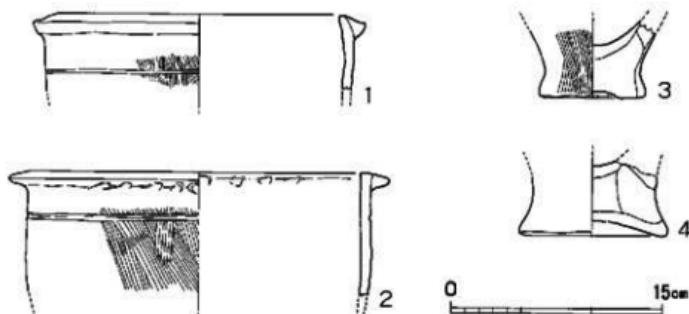
鉢(?) 口径14.0cmの深い小型の鉢となろう。口唇内外面は横ナデ、体部外面は粗い縦ハケ、内面は横ハケの上をナデ消している。粗砂多く含み、焼きは不良で、内外面とも黒褐色をなす。

以上の出土土器は、1～5が弥生中期初頭、その中でも5はより新しい傾向を示している。6・7は弥生後期後葉前後の所産で、本造構の時期を示しているものと考えられる。造構の性格は全く不明である。

4 土 坡

2号土坡 (第49図)

1号土坡の西隣に、新溝に北半を切られて検出された。あたかも堅穴住居跡のコーナー状のプランをなすが、新溝の反対側にその続きをみられず、性格不明土坡としてとり上げた。底面深さ23cmで、小Pitがいくつかみられる。若干の土器片、石器片が出土した。



第51図 2号土坡出土土器実測図 (縮尺 1/4)

出土遺物 (第51・52図)

壺 (1~4) 1は、口径23.4cmで、胴部上位にやや太い深めの沈線をめぐらす兔ノ甲系統のタイプである。口縁内外面横ナデ、胴部外面はやや細かい継ハケ、内面は雑なナデを施す。2は胴上位に太い沈線をめぐらし、口縁内端が小さく突出するタイプである。口径26.9cmに復元され、口縁内下端、外下端部に指オサエ痕が連続する。3は、中央部のみが丸く上げ底状にへこむ類で、底径7.5cmを測る。外面は粗い継ハケ、底外面は粗いナデを施す。内面には炭化物が付着して暗褐色をなす。4は底径10.4cmの大型壺の底部である。底面全体が大きくへこみ、内外面ナデ調整が施される。

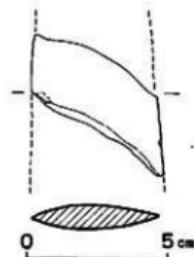
磨製石器 (第52図) 硬質砂岩製で、表面は丁寧に研磨している。

幅4.4cm、厚さ0.8cmを測り、上方へ細身となっている。端はみられず、石劍或いは石戈の可能性も残す。

以上の出土遺物は、すべて弥生中期初頭の範囲に含まれ得るものである。ただ壺2は、内端がやや突出し、口縁もいくらくか長めとなり、より新しい傾向がみられる。

3号土坡 (第49図)

3号堅穴住居跡の北側、2号土坡の南隣に位置する。205×154

第52図 2号土坡出土石器
実測図 (縮尺 1/2)

三 各遺構と出土遺物

cmの梢円形プランを呈し、深さ18cmの浅い掘り込みである。底面には小Pit 4個がみられる。性格は全く不明である。土器片若干が出土した。



第53図 3号土塙出土土器実測図（縮尺 1/4）

出土土器（第53図）

壺（1～3）1は、口径18.4cmで、口縁部が短く内傾する小型品である。口縁内外面横ナデ、口縁上面内側には横ハケが残る。内面は丁寧なナデ、外面はやや細かい斜めハケが施される。2は、口縁内端にも粘土を貼り付けて突出させる類で、口縁内外面横ナデ、肩部外面はやや細かい縦ハケ、内面は丁寧なナデ調整が施される。肩上位には沈線が巡らされる。口縁外面には煤が付着する。3は、極めて薄手の丹塗り土器で、低い口唇状凸帯を付ける。釉土精良で、焼成良好で、地色は茶色をなす。

以上の土器は、1・2が弥生中期初頭、3は中期前葉以降の所産と考えられる。

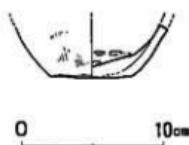
5号土塙（第49図）

遺跡の北東隅に近く、7号竪穴住居跡を切って長方形土塙が営まれる。長さ210cm、幅97cm、深さ34cmとなり、主軸はN $17^{\circ}30'W$ をとる。形態から土塙墓となる可能性もある。

出土土器（第54図）

壺 脚部から丸くすぼまって、平底状の底部につくる。底径5.6cmで、外面は縦ハケの上を丁寧なナデ消し、内面は嫌にナデしている。全体にかなり丁寧なつくりで、粗砂若干を含み、焼成良好で、内面茶褐色、外面は灰黒色をなす。

この土器は、全器形が明らかではないが、弥生後期前～中葉頃のものかと考えられる。遺構自体としては7号竪穴住居跡を切っており、弥生後期後葉以後に営まれたものとされる。



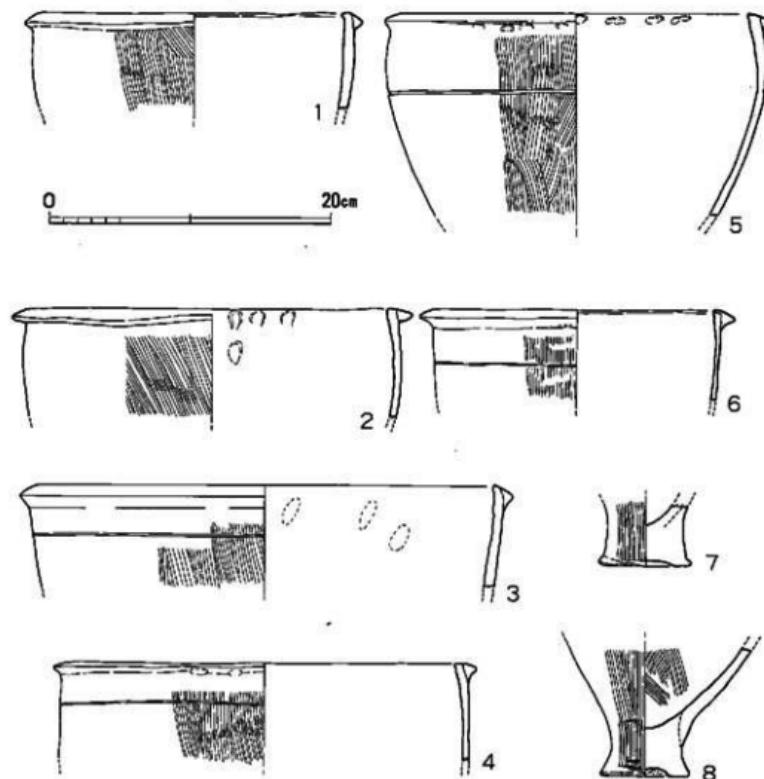
第54図 5号土塙出土土器
実測図（縮尺 1/4）

6号土塙（第49図、図版7）

6号竪穴住居跡の北方に、寸詰まりの長方形プランの土塙が検出された。288×206cmのかなり端正な開丸長方形をなし、深さは60cmを測り、埋土は黒色土で炭片をかなり含む。南辺で深

4 土 墓

くて大きい P.71 に切られているが、その形態より、墓乃至は貯蔵穴の可能性も考えられる。土器がかなり出土しており、どちらかというと貯蔵穴かと考えられる遺構である。



第6図 6号土塚出土土器実測図（その1）（縮尺 1/4）

出土遺物（第55・56図）

壺（1～8）1は、口径23.7cm、内縁がわずかに突出する。口縁内外面横ナデ、外面は粗い縦ハケ、内面は丁寧なナデが施される。胎土はかなり精良で、焼成やや不良、外面には煤が付着する。2は、口径28.2cmで、肩部がやや張り、口縁内外面横ナデ、外面は粗い斜めハケが施される。外面には煤が付着する。3は、口径34.6cmで肩部上位に沈線1条を巡らす。口縁内外面

Ⅳ 各遺構と出土遺物

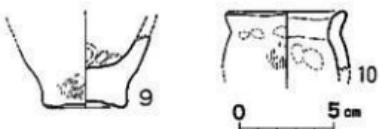
横ナデ、脇部外面は粗い縦ハケ、内面はナデている。焼きは良く、外面には煤が付着する。4は、口径29.8cmで、脇部にふくらみをみせる。脇上位に細く浅い沈線を入れる。口縁内外面横ナデ、脇部外面はやや粗い縦ハケ、内面は丁寧なナデを施す。外面に若干の煤が付着する。5は、口径27.1cmで、脇部上半で丸く張り、やや太めの沈線を巡らす。口縁内外面横ナデ、脇部外面は粗い極めて雜な縦ハケ、内面は斜めナデ上げが施される。6は、口径22.2cmの小型品で、脇部器壁が薄く、細く浅い沈線が施される。口縁内外面は横ナデ、脇部外面は擦過状の縦ハケ、内面は丁寧にナデしている。外面には煤が若干付着する。7は、充実する底部片で、底径6.5cmとなり、中央部のみが浅く上げ底状となる。外面は粗い縦ハケを施し、二次火熱を受けて赤褐色となる。8は、6.3cmで、中央部のみが丸くへこむ。脇部外面には粗い縦ハケを施し、内面も縦ハケがみられ、上げ底部には指オサエ痕が著しい。外面下半は二次火熱を受けて赤変する。底部接地面には軽圧痕3個がみられる。うち2個は計測不能であるが、他1個は、長さ4.2+ α mm、幅2.4mmとなる。粗石英を多く含み、焼成はやや不良である。

ミニチュア土器(9・10)9は底径4.5cmで全体に上げ底状となる。外面上半はナデしており、下半はハケが残る。内面には指オサエ痕が著しい。粗砂多く含み、焼成不良で、内面茶褐色、外面は淡黄褐色をなす。

10は、口径6.4cmで、外面には縦ハケが残る。胎土に粗砂粒を僅かに含むが、かなり

精良である。焼成不良で、内面暗茶色、外面は明橙茶色をなす。

以上の出土土器は、袋状堅穴出土品と同じく、弥生中期初頭に位置付けられる。ミニチュア土器も、底部の形態は、同時期の甕のそれと同様に作っている。



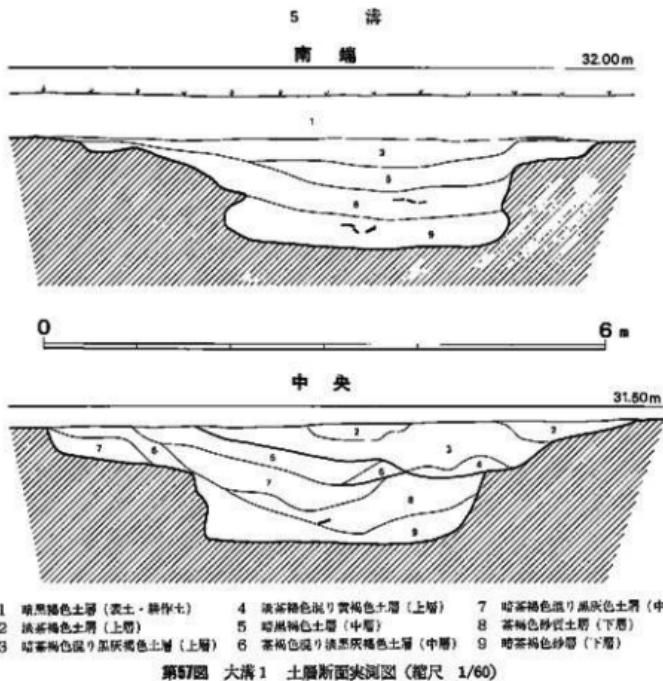
第55図 6号土坑出土土器実測図(その2)
(縮尺 1/3)

5 溝

大溝 1 (第4・57図、図版10~12)

遺跡の中央に、弧をなして北から南へ延びる。遺跡全体の環濠としての大溝である。台地東端を半径50m程の半円弧を描いて区切り、集落を囲繞するものとなろう。

南端で幅490cm、深さ120cm、中央部で幅460cm、深さ130cm、北端で幅480cm、深さ140cmを



第57図 大溝1 土層断面実測図 (縮尺 1/60)

測る。底面標高は、発掘した範囲内においてはほぼ同レベルで、僅かに北へ数cm傾斜をみせるのみである。北端近くで、大溝2・8号竪穴住居跡、溝3を切っている。

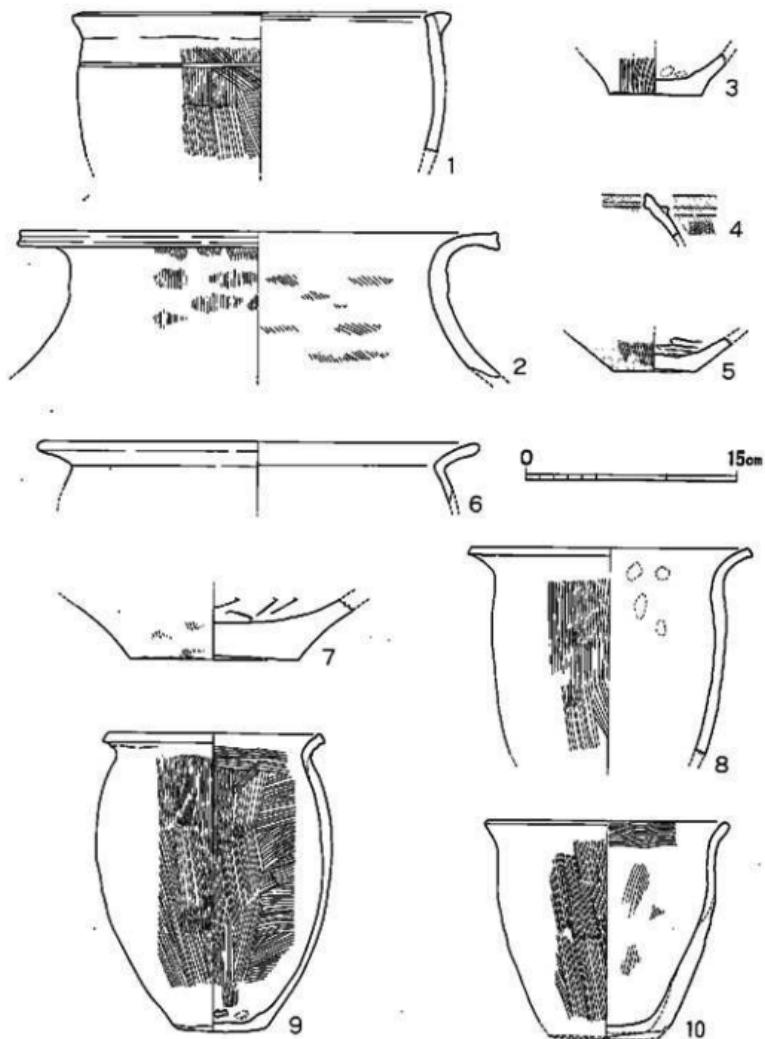
埋土状況は土層断面図(第57図)に示す如くであるが、中層に、黒色系の土層があり、それにより上下層を分けた。出土遺物はほぼ全層にわたってみられたが、特に、下層のやや下位の部分、中層の下位から下層の上端部分、及び上層下位に夥しく集中する部分がみられた。溝断面をみると、東西两岸の各所に、壁下端部分がえぐれたところがあり、実際に水がたまつたり、流水があったことを物語っている。

出土土器は多量におよぶため、各個の詳細な説明は表に示した(第4表以下)ので参照されたい。特徴ある土器、編年的見解について以下若干、器種毎に概観してみたい。

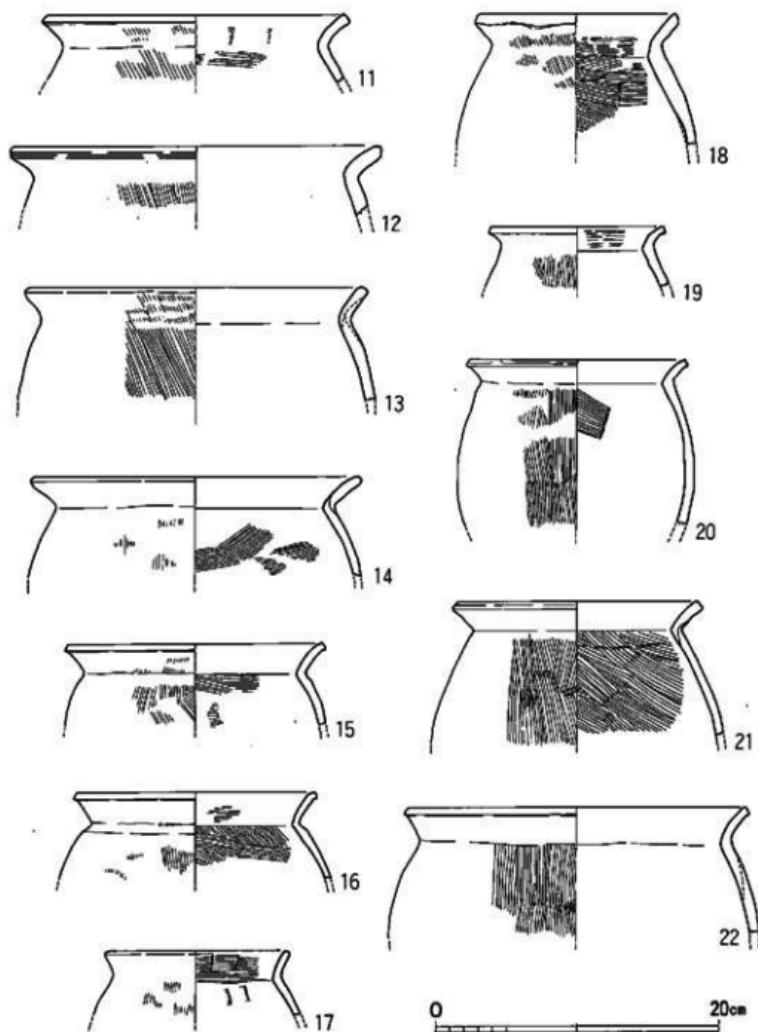
下層出土遺物(第58~63図、第4表)

弥生中期土器(1~8) 1・8は各々、鬼ノ甲式系統の甕、如意形口縁の甕で、中期初頭のものである。2・3は弥生中期初頭の甕である。2は前期的な頸の上方へのすばまり方を示す大

三 各遺構と出土遺物

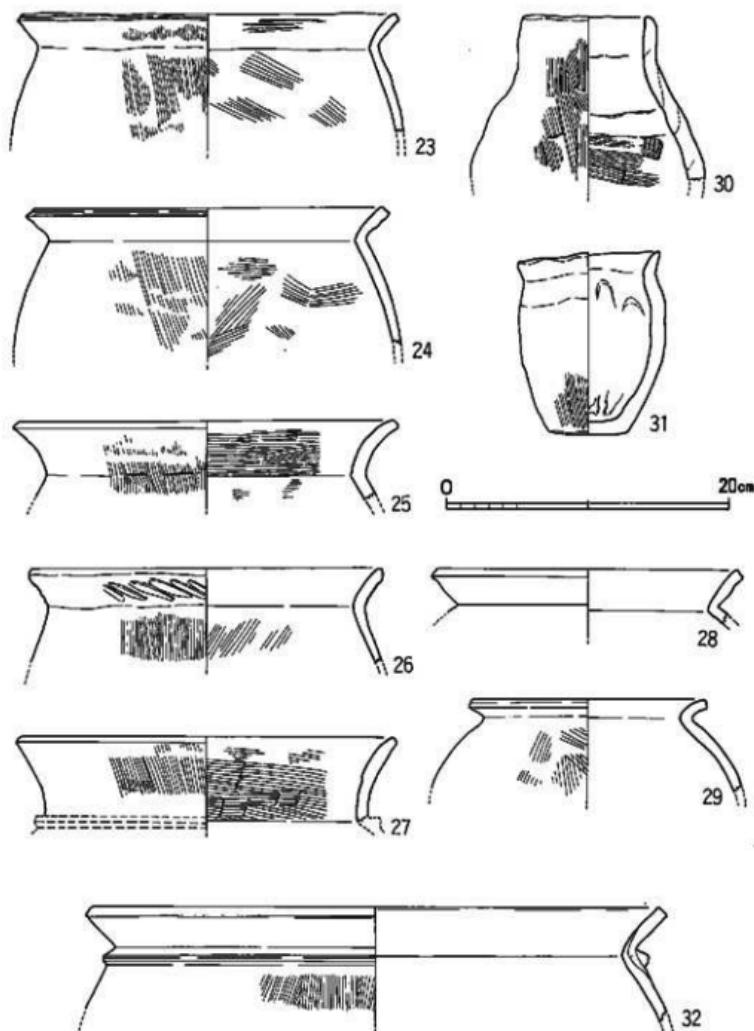


第58図 大溝1 下層出土土器実測図(その1) (縮尺 1/4)

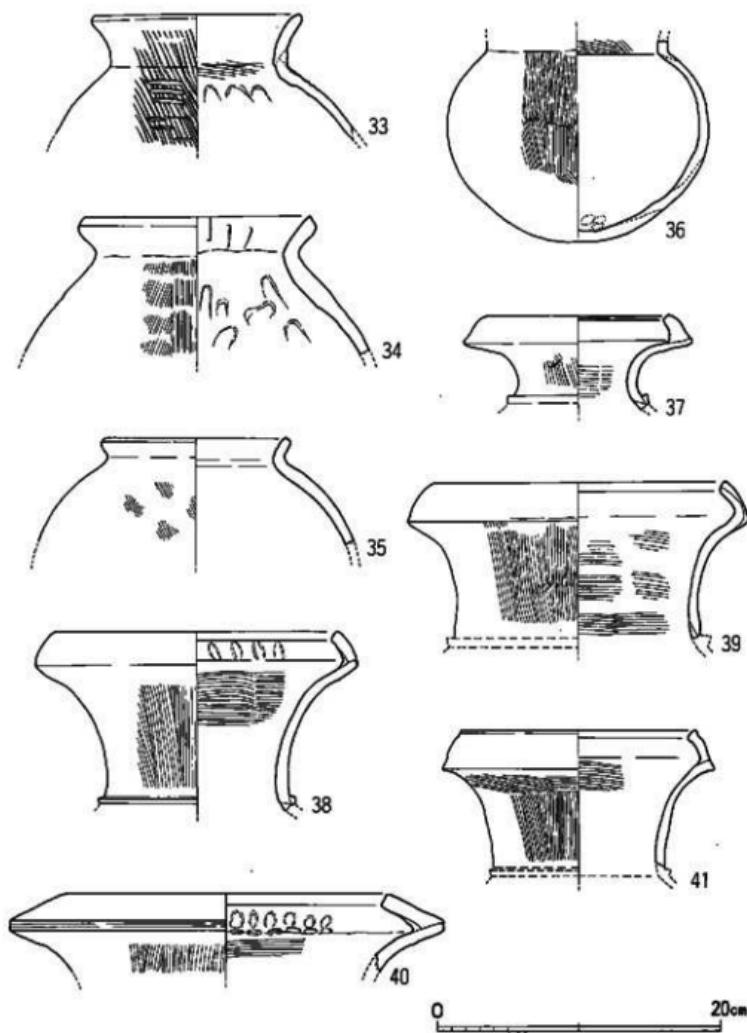


第59図 大湧1 下層出土土器実測図（その2）（縮尺 1/4）

III 各遺構と出土遺物

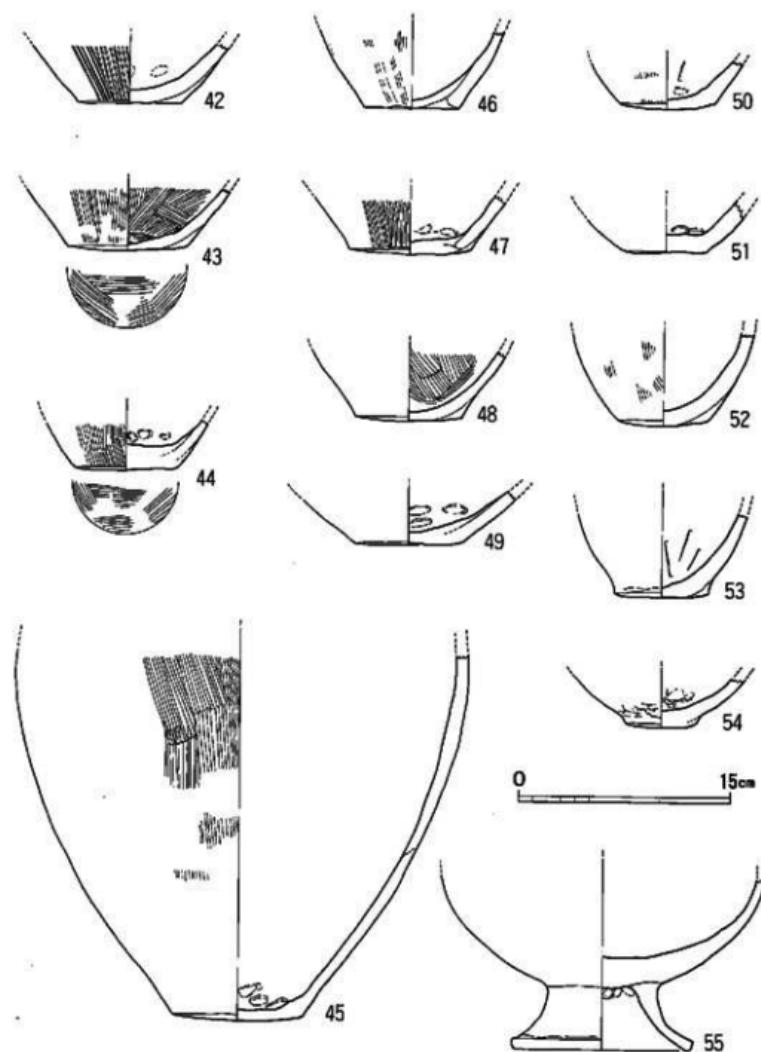


第80図 大溝1 下層出土土器実測図（その3）（縮尺 1/4）

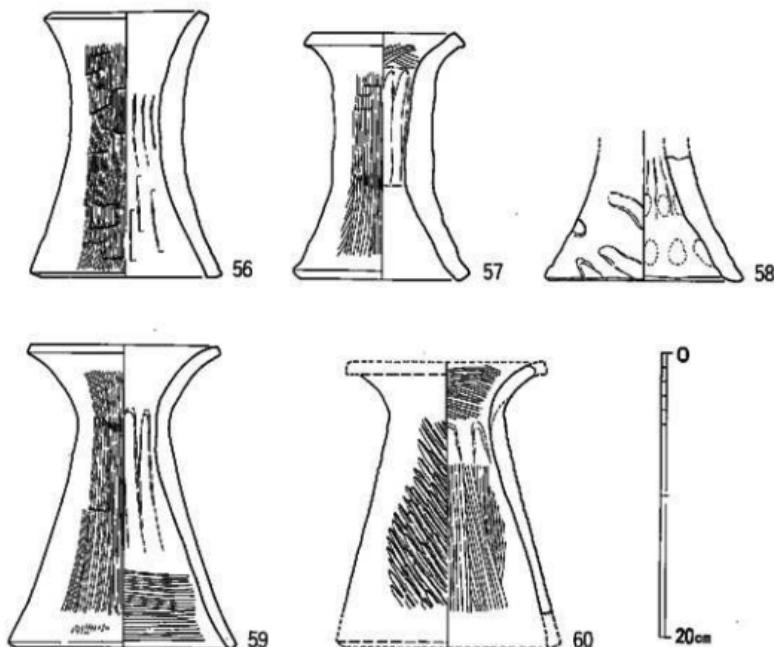


第41図 大佛1 下層出土土器実測図（その4）（縮尺 1/4）

III 各遺構と出土遺物



第82図 大溝1 下層出土土器実測図（その5）（縮尺 1/4）



第6図 大溝1 下層出土土器実測図(その6) (縮尺 1/4)

壺である。4・5は、丹塗りの蓋受け凸帯の付く無頸壺、丹塗り壺底部で、中期前葉以降のものであろう。6は中期末期的傾向を残す壺、7は中期初頭頃の大型壺底底部と考えられる。

弥生後期壺(9~32) 口縁部は外湾状気味に開くものが多く、頸部内面に明瞭な稜をつくるものと、丸く外反するものがあり、胴部は殆んどがかなり張る。10のような小窓で脇も張らず、口縁部も外傾状にゆるやかに開くタイプもある。またボテボテの手捏ね的な小窓(30, 31) もみられる。胴部内面には多くがハケ調整のままであり、底部はしっかりした平底のものも少しはあるが、大部分は凸レンズ状にわずかにふくらんできている。これらの諸特徴からみて、弥生後期中葉のものをいくらか含んで、弥生後期後葉のものが大半を占めている。

弥生後期壺(33~41, 55) 短頸状で開く口縁につくる類(33~35), 直口壺(36), 複合口縁壺(37~41), 脚台の付くもの(55)などがある。33のように粗い叩き目を残すものもある。複合口縁壺では、40のように内傾度が強いものや、37のように頸部の短く下方へ屈曲して開く小

三 各遺構と出土遺物

第4表 大溝1 下層出土土器観察表

(単位 cm)

番号	出土地点	器種	法量	時期	特徴
第58回 1	南半下層	壺	口径 26.9 高さ 底径	弥生 中期初頭	口縁内外面横ナデ。胸部外面は粗い雜な縦ハケ。内面は斜めナデ上げ。肩上位に太い沈線を巡らす。胎土に粗砂多し。焼きは良。内面茶褐色。外側は赤茶～暗褐色。口縁内端部が突出する。殆ど残る。
第58回 2	北半下層	大壺	口径 33.8 高さ 底径	弥生 中期初頭	口縁内外面横ナデ。頸部外面上半は横ハケの上を横ナデ。下半は横ナデ。頸部内面は横ハケの上を雜な横ナデ。粗砂混多く含み、燒き良。内面淡茶色。外側は暗茶褐色。口唇外面は凹状をなす。1/4残る。
第58回 3	南半下層	壺	口径 高さ 底径 6.5	弥生 中期初頭	平底で、外面は極めて粗い縦ハケ。内面は指オサエ痕を残し、雜なナデ。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、内面茶褐色、外側は淡茶褐色をなす。
第58回 4	北半下層	無頸壺	口径 高さ 底径	弥生 期	内湾する口縁外面に、蓋受けの三角凸帯をつける。外面と口唇内面まで丹塗り。口縁内外面横ナデ。胸部外面は縦ハケ。胎土は大旨精良。焼成不良。
第58回 5	北半下層	壺	口径 高さ 底径 5.8	弥生 期	全体にわずかな上げ底状となる。外面は粗い縦ハケの上に丹塗り。内面は横方向の強い指オサエナデで、丹の垂れ落ちたものが付着する。胎土精良。焼成やや不良で内面明茶褐色。外側地色は淡黄褐色。
第58回 6	北半下層	壺	口径 31.4 高さ 底径	弥生 中期末	頸部内面に筋をつくり やや長く外反して開く。口縁内外面横ナデ。胎土に細砂かなり含み、焼きは良く内面淡白褐色から暗褐色。外側は煤が付着する。
第58回 7	南半下層	大壺	口径 高さ 底径 11.8	弥生中期 (初頭)	全体に浅い上げ底状となり、外面は縦ハケの上を粗いヘラ磨き、内面は板状工具による擦過痕あり。粗砂多く含み、焼きやや良く、外側暗茶から淡褐色、内面は淡黄褐色をなす。
第58回 8	南半下層	壺	口径 20.1 高さ 底径	弥生 中期初頭	大きく述べる如意形口縁をなす。口縁内外面横ナデ。胸部外面は粗い縦ハケ。内面はナデしている。粗砂多く、焼きは不良。全体につくりは悪い。殆ど残存。
第58回 9	南半下層	壺	口径 15.7 高さ 21.1 底径 6.6	弥生 後期後葉	口縁内外面横ナデ。胸部外面は粗い縦ハケ、内面は上端が横ハケ、以下は全周の丁度1/3のみが横ハケ、他は縦ハケ。胸部下端内面はナデ。外側には縫がこびりつく。粗砂多く含み、焼きやや良好。ほぼ完形。
第58回 10	北半下層	壺	口径 17.4 高さ 15.4 底径	弥生 後期後葉	腹は很らず、口縁はゆるやかに開く。口唇～口縁外面は横ナデ、内面は横ハケ。胸部外面はやや細かい縦な縦ハケを施す。内面は縦ハケの上をナデ消す。粗砂粒を多く含み腹中位は二次火熱を受けて赤変する。

番号	出土地点	器種	法量	時期	特徴
第59図 11	北半下層	壺	口径 21.8 高さ 底径	弥生 後期中葉	頸部内面に稜をつくり、丸く屈曲して外反する。口縁内外面横ナデ、頸部外面は粗い斜めハケ。頸部内面は横ハケ、外面全体に縦が付着する。口縁外端は部分的にはみ出す。細砂多く含む。%残存。
第59図 12	南半下層	壺	口径 26.3 高さ 底径	弥生 後期中葉	頸部内面に稜をつくり、口縁外面には沈線をめぐらす。口縁内外面横ナデ、外面は縦ハケ、内面は磨滅する。細砂粒多く含み、焼成良好。%残存。
第59図 13	南半下層	壺	口径 24.2 高さ 底径	弥生 後期後葉	頸部内面の稜は部分的に不明瞭となる。外面は粗い斜めハケ、口縁内外面は横ナデ、頸部外面は丁寧なナデ。粗砂粒多く含み、焼成良好である。%残存。
第59図 14	南半下層	壺	口径 23.5 高さ 底径	弥生 後期後葉	頸部内面に稜をつくり、やや長めに外反する。口縁内外面横ナデ、頸部外面は磨滅するが、縦ハケが残る。内面はやや細かいハケを施す。粗砂多く、焼成不良。%残存。
第59図 15	南半最下層	壺	口径 18.4 高さ 底径	弥生 後期後葉	頸部内面に稜をつくり、口縁外下端は小さくつまみ出される。口縁内外面横ナデ、頸部外面は粗い斜めハケ。内面も粗い横ハケ。粗砂若干含み、焼成良好。%残存。
第59図 16	南半最下層	壺	口径 17.2 高さ 底径	弥生 後期後葉	頸部が張り、頸部内面に稜をつくる。口縁内外面横ナデ、頸部外面縦ハケ、内面は縦な粗い斜めハケ。粗砂かなり含み、焼成良好。%残存。口唇外端は、はみ出す。
第59図 17	南半下層	壺	口径 13.1 高さ 底径	弥生 後期後葉	頸部内面に稜をつくり、口縁部は外傾する程度に立ち上がる。口縁内面は粗い横ハケ。外面は横ナデ、頸部外面は粗い横ハケ、内面はハケの上をナデ消す。粗砂多く、焼成良好。%残存。
第59図 18	南半下層	壺	口径 14.4 高さ 底径	弥生 後期後葉	全体に手捏ね風で、歪つとなる。口縁上半の内外面横ナデ、下半から頸部の外面は斜めハケ。内面はやや細かい横ハケ。粗砂多く含み、焼成不良で内外面暗褐色をなす。%弱残存。
第59図 19	南半最下層	壺	口径 12.4 高さ 底径	弥生 後期後葉	口縁内外面横ナデ、内面には横ハケが残る。頸部外面は粗い横ハケ、内面は横ナデ。頸部外面には様が付着する。粗砂多く、焼成やや不良。%残存。
第59図 20	南半下層	壺	口径 15.6 高さ 底径	弥生 後期後葉	口縁内外面横ナデ。頸部外面はやや細かい横ハケ、内面は横ナデであるが、1ヶ所のみ工具幅 2.2cm、17本のハケがみられる。口縁外面には沈線を入れる。粗砂多く、焼成やや不良。%残存。

III 各道標と出土遺物

番号	出土地点	器種	法量	時期	特徴
第59図 21	南半下層	甕	口径 17.7 高さ 底径	弥生 後期後葉	頸が張り、頸部内面に縫をつくる。口縁内外面横ナデ、頸部外面は粗い縫ハケ。内面は粗い斜めハケ。口縁外面はわずかにへこんむ。口縁外面中途でいくらかふくらむ。外面に焼が若干こびりつく。粗砂少々、細砂多し。 ^{1/4} 残存。
第59図 22	南半下層	甕	口径 24.4 高さ 底径	弥生 後期後葉	口縁内外面横ナデ、頸部外面は粗い縫ハケ。内面はナデている。口縁部外端は粘土がはみ出す。粗砂多く、焼成不良。 ^{1/4} 残存。
第60図 23	南半下層	甕	口径 27.0 高さ 底径	弥生 後期後葉	口縁内外面横ナデを行なうが、横ハケ、縫ハケを残す。頸部外面はやや粗い縫ハケ。内面は粗い斜めハケを施す。外面には媒付着。粗砂多。
第60図 24	南半下層	甕	口径 25.7 高さ 底径	弥生 後期後葉	口縁内外面横ナデ、頸部外面は粗い斜めハケの上をナデる。内面は斜めハケの上をナデ消す。外面には媒付着する。口縁外面は凹状となる。粗砂多く含み、焼成やや不良。 ^{1/4} 残存。
第60図 25	南半下層	甕	口径 27.4 高さ 底径	弥生 後期後葉	口縁は長く外湾気味に開く。口縁内外面横ナデ、口縁内面は粗い横ハケ、外面は粗い縫ハケ。頸部内面は縫ハケの上を横ナデ。粗砂多く、外面には媒付着。
第60図 26	南半下層	甕	口径 25.2 高さ 底径	弥生 後期後葉	口縁内外面横ナデ、外面には粗大な斜め叩き目が残る。頸部外面は粗い縫ハケ、内面は粗い斜めハケの上をナデ消す。外面には媒付着する。粗砂多く含み、焼成やや不良。
第60図 27	南半下層	甕	口径 27.0 高さ 底径	弥生 後期後葉	長く、やや立つ口縁部で、口縁内外面横ナデ。口縁外面は粗い縫ハケ、内面は粗い横ハケ。頸部に凸帯を付けるものとなろう。粗砂多く含み、焼成やや不良。 ^{1/4} 残存。
第60図 28	北半下層	甕	口径 22.2 高さ 底径	弥生 後期後葉	強く屈折して外反する口縁となる。口縁外面は中途でふくらむ。内外面とも横ナデ。粗砂粒をかなり含み、焼成良好である。 ^{1/4} 残存。
第60図 29	南半下層	甕	口径 16.6 高さ 底径	弥生 後期後葉	頸部内面は不明瞭な縫をなし、強く屈曲する。頸が張り、蓋としてもよい器形をなす。口縁内外面横ナデ、頸部外面は磨滅するが、粗い斜めハケ残る。内面はナデる。金雲母かなり、粗砂いくらか含む。 ^{1/4} 残存。
第60図 30	南半下層	甕	口径 9.3 高さ 底径	弥生 後期後葉	全体に手捏ね状の渋手のもの。蓋とした方が良いか。口縁内外面横ナデ、頸部外面縫ハケ。内面はハケというより板状工具そのものの横位擦痕。粘土輪張み痕明顯。粗砂かなり含み、焼成良好。

番号	出土地点	器種	法量	時期	特徴
第60図 31	北半下層	壺	口径 10.0 高さ 12.9 底径 5.6	弥生 後期後葉	全体に手捏ねの小型品で、底部はやや丸味をおびてふくらむ。肩下半外面は縦ハケ。他内外面はナデる。胎土に粗砂多く、焼成良好で、煤は付かない。
第60図 32	北半下層	大壺	口径 41.2 高さ 底径	弥生 後期後葉	くの字状口縁の頸部外面に、上面のややへこんだ柳形凸帯を付ける。口端内外端はわずかにつまみ出す。肩外面は粗い縦ハケ、内面は丁寧なナデ。粗砂多く、焼成良好。△存。
第61図 33	南半下層	壺	口径 15.0 高さ 底径	弥生 後期後葉	口縁内外面横ナデ、頸部外面は極めて粗い縦ハケ、横位の太い叩き目が残る。頸部内面には粗いハケがある。頸部内面上面には指オサエ痕跡ある。粗砂多く含み、焼成やや不良で淡白褐色をなす。
第61図 34	南半下層	壺	口径 16.2 高さ 底径	弥生 後期後葉	口縁内外面横ナデ、頸部内面はナデしており、指オサエ痕が残る。外面は粗い縦ハケを施す。口縁内面にはハケ工具端痕あり。粗砂多く含み、焼成良好、△弱存。
第61図 35	南半下層	短頸壺	口径 13.4 高さ 底径	弥生 後期後葉	頸部で丸く屈曲し、短かく外傾形状に立ち上がる。口縁内外面横ナデ、頸部外面は斜めハケの上をナデ消す。内面はナデる。粗砂多く含み、焼成良好で内外面暗茶褐色をなす。△弱存。
第61図 36	南半下層	壺	口径 高さ 底径	弥生 後期後葉	丸底の球形腹をなす。頸部外面横ナデ。内面は横ハケ。頸部上半は難な縦ハケ、下半と内面はナデる。粗砂若干含み、焼成やや良好。
第61図 37	南半下層	複合口縁壺	口径 12.5 高さ 底径	弥生 後期後葉	小型品で、口唇部には沈線を入れる。口縁内外面横ナデ、頸部外面は粗い斜めハケ。内面は粗い横ハケ。粗砂粒多く含み、焼成良好で淡茶褐色をなす。△弱存。
第61図 38	南半下層	複合口縁壺	口径 20.0 高さ 底径	弥生 後期後葉	口縁内外面横ハケ、頸部外面は縦ハケ。内面上半は粗い横ハケ。頸部外面には暗茶色のスリップをかける。粗砂粒多く含み、焼成良く、淡白褐色をなす。△弱存。
第61図 39	北半下層	複合口縁壺	口径 20.5 高さ 底径	弥生 後期後葉	口縁内外面横ハケ、頸部内面は難な横ハケ、外面は、粗い縦ハケ。袋部外端部はごく部分的につまみ出される。粗砂多く、焼成良好である。△弱存。
第61図 40	南半下層	複合口縁壺	口径 23.0 高さ 底径	弥生 後期後葉	口縁が強く内傾する。口唇内面と、袋部外端部が凹状をなす。口縁内外面横ナデ、頸部内面は粗い横ハケ、外面は粗い縦ハケ。粗砂多く、焼成不良。△弱存。

三 各遺構と出土遺物

番号	出土地点	器種	法量	時期	特徴
第61図 41	南半下層	複合口縁 壺	口径 16.6 高さ 底径	弥生 後期後葉	口唇上端をつまみ出す。他の複合口縁壺に比べて新しい形態を示す。口縁外側横ナデ。頸部外側は横・縦ハケ、内面上端は横ハケ、下半はナデる。焼成やや不良で淡褐色をなす。
第62図 42	北半下層	底部	口径 高さ 底径 7.4	弥生 後期中葉	平底をなし。胴部外側は極めて粗い縦ハケ。内面は丁寧なナデ。底外面はナデツケ状をなす。粗砂多く含み、焼成や良好で内面黄褐色。外側は淡茶～暗褐色をなす。
第62図 43	南半下層	底部	口径 高さ 底径 8.5	弥生 後期後葉	底部が高く、わずかに凸レンズ状にふくらむ。胴部内外ともに粗い縦ハケ。底外面にもハケを施す。粗砂わずかで、細砂多く含み、焼成や良好である。
第62図 44	南半下層	底部	口径 高さ 底径 7.1	弥生 後期後葉	厚い底部となるが、わずかにふくらむ。胴部外側と、底外面は雑な粗い縦ハケ。内面は雑な横模のナデ。外側は強い二次火熱を受けて赤変する。粗砂多く焼成や不良。
第62図 45	北半最下層	壺	口径 高さ 底径 9.4	弥生 後期後葉	薄手の底部はいくらくらみをみせ、胴部外側上半は雑な縦ハケ。下半はナデる。内面もナデている。外側下半は二次火熱を受けて赤変し、上半には焼が若干付着する。粗砂粒多く含み、焼成良好である。
第62図 46	北半下層	壺底部	口径 高さ 底径 6.7	弥生 後期中葉	底部は遠くなるが、平底で、胴部外側は粗い縦ハケの上を雑な横ヘラ磨き。内面は縦横にナデる。底外面は一方向へのナデ。粗砂多く含み、焼成良好。
第62図 47	北半下層	壺底部	口径 高さ 底径 8.5	弥生 後期後葉	底部はわずかにふくらみをみせる。外側はやや粗い縦ハケ。内面はナデる。粗砂多く含み、焼成良好で、内面は炭化物付着して黒色をなす。
第62図 48	南半下層	底部	口径 高さ 底径 7.5	弥生 後期後葉	底面がわずかにふくらみをみせる。外側は雑なナデ、内面は粗い縦な斜めハケ。粗砂多く含み、焼成や不良である。底外面も雑にナデる。
第62図 49	南半下層	壺底部	口径 高さ 底径 7.5	弥生 後期中葉	底面はごくわずかにふくらみをみせるが、中央のみが小さくへこむ。外側磨滅、内面は雑にナデて、指オサエ痕残る。粗砂多く、焼成やや不良である。
第62図 50	南半下層	底部	口径 高さ 底径 6.7	弥生 後期後葉	底外面がいくらくらむ。胴部外側は縦ハケの上をナデ消し、内面はハケ工具痕を残す。ナデる。底外面も雑なハケの上をナデ消す。粗砂粒が多く含み、焼成不良である。

番号	山土地点	器種	法量	時期	特徴
第62図 51	南半下層	底部	口径 高さ 底径	弥生 後期中葉	全体に板めて難なつくりで、底面も正円にはならない。内外ともに難にナデしており、粗砂多く含み、焼成良好で、内面は茶褐色。外面は暗茶褐色をなす。
第62図 52	南半下層	底部	口径 高さ 底径	弥生 後期後葉	底部がわずかにふくらみをみせる。脚部外面は難な粗い縦ハケの上をナデ消し、内面と底外面は粗くナデている。粗砂多く含み、焼成不良である。
第62図 53	北半下層	底部	口径 高さ 底径	弥生 後期後葉	底部がわずかにふくらむが、安定はしている。脚外面は磨滅するが、ハケの上をナデしているか？ 内面はハケの上をナデ消す。粗砂多く含み、焼成良好で肌色をなす。
第62図 54	北半下層	壺底部	口径 高さ 底径	弥生 後期後葉	小さい厚い底盤で、ふくらみをみせる。脚内外面はナデ。底外面は一方への割りが施される。外面上下にはシワが多く、内面も指オサエ痕著しい。
第62図 55	南半下層	合付壺	口径 高さ 底径	弥生 後期後葉	厚い底部の短頸壺に安定した脚部をつける。脚部から脚部外面は板状工具による縦方向擦過度で、磨き状にみえる。脚内面上半は横方向磨き、下半は難な縦方向磨き、脚端部内外から脚内面は粗い横ナデ。
第63図 56	北半下層	器台	口径 高さ 底径	弥生 後期前葉	上下に均等に近く開く傾向を残す。受け部上端はわずかにへこむ。外面は新かい縦ハケ、内面下半は横ハケの上をナデ、中位内面にはシボリ痕シワを残す。上下端片側のみに黒斑部。二次火熱痕跡なし。粗砂多く、焼成良。
第63図 57	南半下層	器台	口径 高さ 底径	弥生 後期中葉	受け部内外面横ナデ、体部外面粗い縦ハケ、内面中位は指ナデ上げ、下半は丁寧なナデ。粗砂多く、焼成良好で、淡茶色をなす。 少存。
第63図 58	南半下層	器台	口径 高さ 底径	弥生 後期後葉	やや厚手で、内外に指圧痕残す。内面中位にはシボリによるシワを残す。粗砂多く、焼成良好、少頭残存。
第63図 59	南半下層	器台	口径 高さ 底径	弥生 後期後葉	体部上位で焼まる。受け部内外面横ナデ、体部外面粗い縦ハケ、内面上半はナデ、中位はナデ上げ、下半は粗い縦ハケ。二次火熱なし。
第63図 60	南半下層	器台	口径(14.2) 高さ(20.0) 底径(15.8)	弥生 後期後葉	体部上位で焼まる。体部外面は斜めの粗大な叩きを密に施す。内面上半は粗い縦ハケ、中位は指オサエナデ上げ、下半は粗い縦ハケ。粗砂極めて多く、下端の内外に強い二次火熱あり。焼成良く、淡黄褐色。

三 各遺構と出土遺物

型品がある。41の口唇部は内外端がわずかに突出気味となっており終末期的様相が強い。器台（56～60）56は、中期的特徴を有するものであるが、他は、体部上位でくびれ、わりと器壁の薄いものもあり、精製な感じを受け、弥生後期後葉として大過ない。

以上の出土土器からみて、下層のまとまった土器群として弥生後期後葉の年代が与えられ、この大溝掘削時期もこの年代であることを示している。

上・中層出土遺物（第64～71図）

弥生中期土器（1～18） 1～6は弥生中期初頭の土器で、うち3は、口縁上面を平坦に、側縁も整然と作り、より新しい様相をみせる。7・17は中期前葉、8～18は中期末から、一部後期初頭に下る跳ね上げ口縁状のもの（10・13）を含む。9は跳ね上げ口縁であるが中期前葉となる可能性もある。11は丹塗り袋状口縁の長頸壺で、18などの丹塗り高杯などとともに祭祀行為に使用された類であり、甕棺片出土の事実と併考して、周辺に祭祀土塚を有した甕棺墓地の存在が推測されるところである。

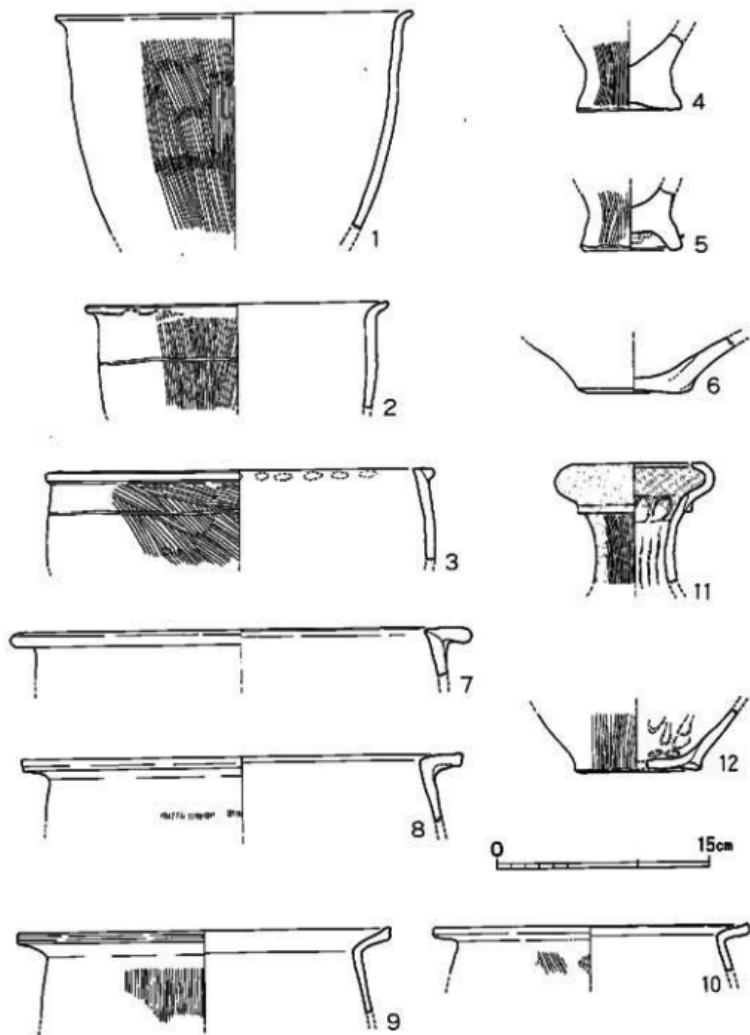
弥生後期壺（20～29、44～53） 20から23の小型壺、25から29の中型壺、44から50の大型壺に分類できる。26・27のように胴があまり張らずに口縁部がやや長くのびて、胴部外面に粗い叩き目を施すものは、弥生後期末というよりも古墳時代初頭に下降するものであろう。28・29などもその時期と考えられる。大壺も、胴の張る古相を示すものから、胴があまり張らず凸帯が幅広くなってくるものまでみられる。後者は土師器と伴う可能性が強い。

弥生後期壺（30～40） 口縁がラッパ状に開くもの（30～32）、複合口縁のもの（35～39）、長頸壺（40）などがある。30～32は古式土師器と伴う可能性があり、35は未だ袋状口縁をなし、後期中葉頃であろう。37～39の複合口縁壺は口唇端がつまみ出され、弥生終末期の特徴を示す。39は更に口縁部が立ち、古式土師器と共に伴う可能性がある。40はラッパ状に開くタイプで明らかに土師器である。

弥生後期鉢（41～43、70、67） 41は円盤状の粘土板を底部として貼り付けた、全く異様な器形をなす。色調・胎土などは弥生中期初頭のそれと類似するが、内面下半の削りなどの調整手法などから、より後代のものと考えておく。底外面に初压痕がみられる。長さ5.75mm、幅2.9mmを測る。67は鉢というか、小型丸底壺というか、称するに困るタイプで、下半で張り、口縁直下までゆるやかにすぼまり、小さく外反する器形をなす。胎土が極めて精良で焼きも良く、器表も極めて平滑で精製品である。本遺跡出土品にこのような胎土、焼成等はみられず、他域からの得来品と考えられる。類例を求めるに、対馬佐渡白岳の出土品、朝鮮慶尚南道密陽出土の古式瓦質土器等が形態的に酷似しており、朝鮮系統の土器と考えられる。

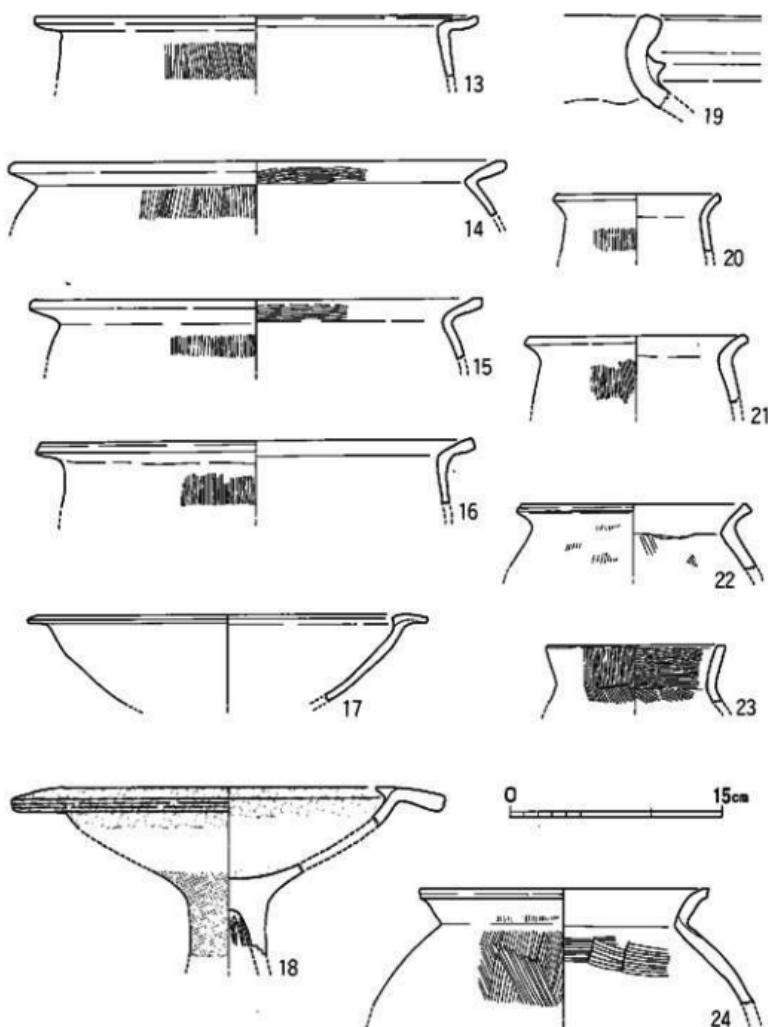
器台（54～57、71） 54は上端に粘土を貼り付けて、突出させており、類例少なく、瀬戸内系統かと考えられる。56・57・71は所謂杏形器台であるが、56は上面が平坦・水平となり、57は

5 溝

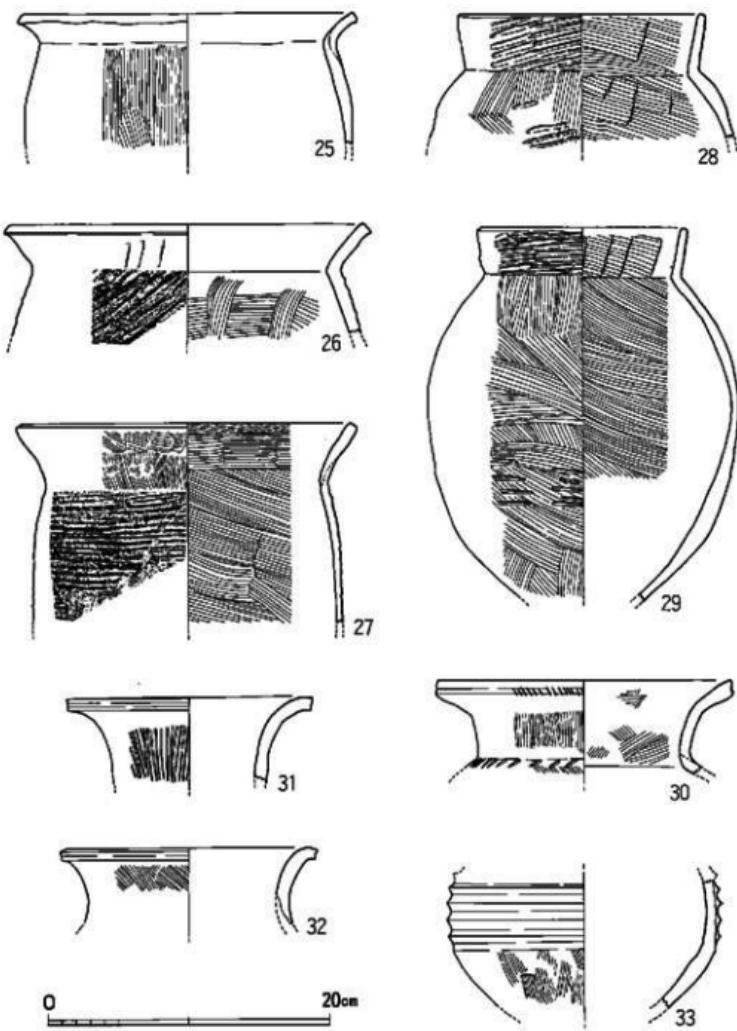


第84図 大清1 上・中層出土土器実測図（その1）（縮尺 1/4）

III 各遺構と出土遺物

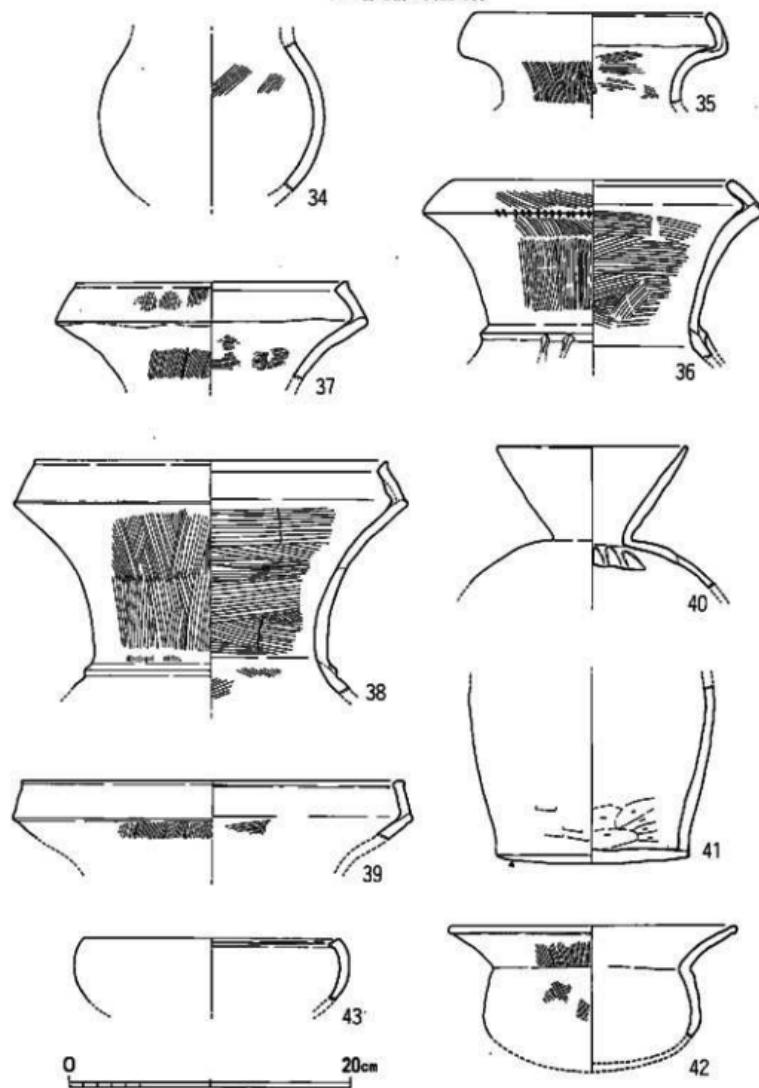


第85図 大溝1 上・中層出土土器実測図(その2) (縮尺 1/4)

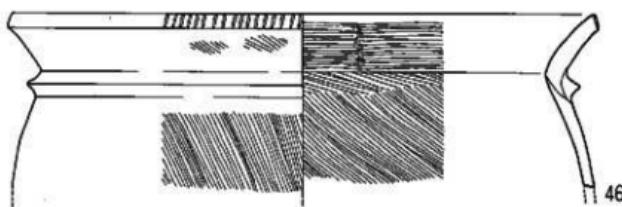
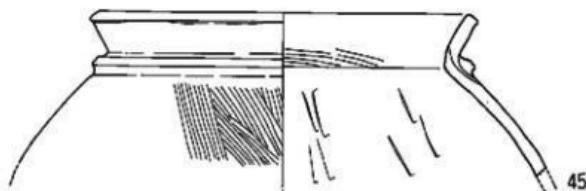
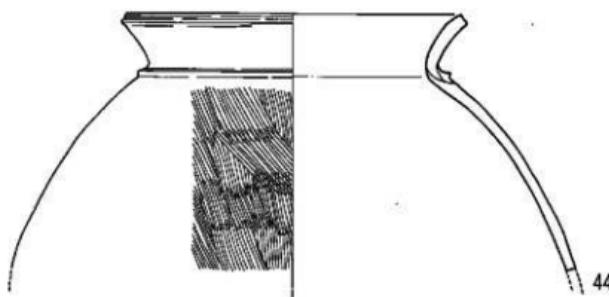


第36図 大溝1 上・中層出土土器実測図（その3）（縮尺 1/4）

Ⅲ 各遺構と出土遺物

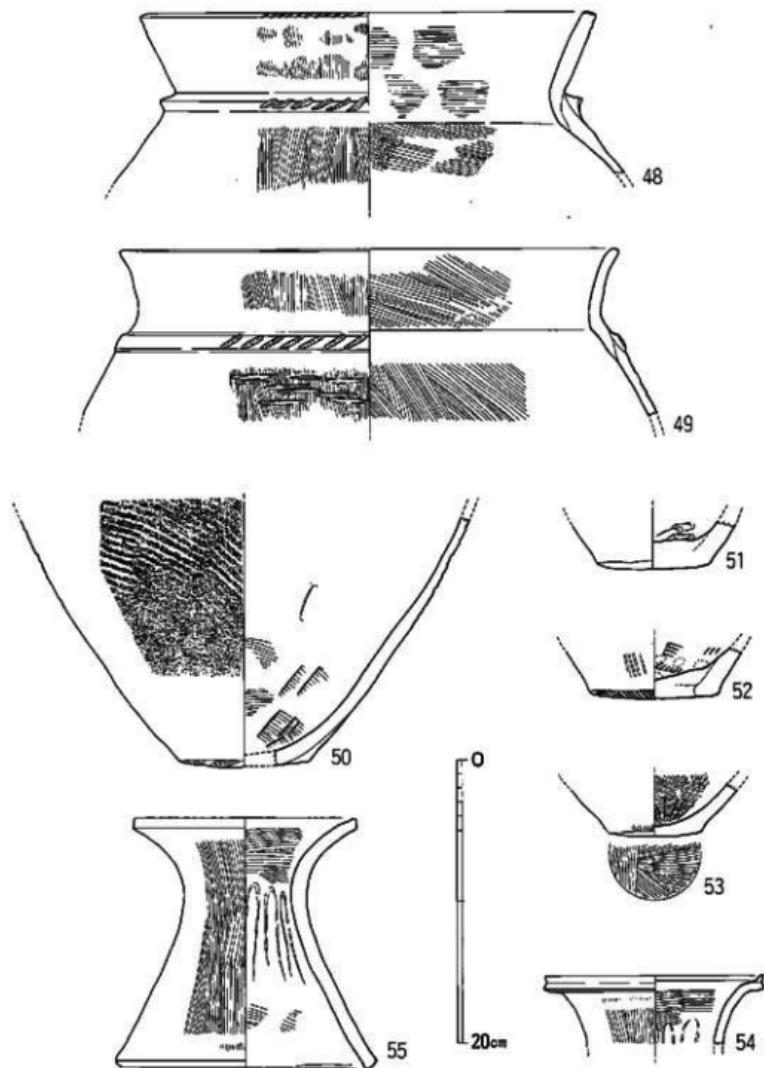


第87図 大渕1 上・中層出土土器実測図（その4）（縮尺 1/4）

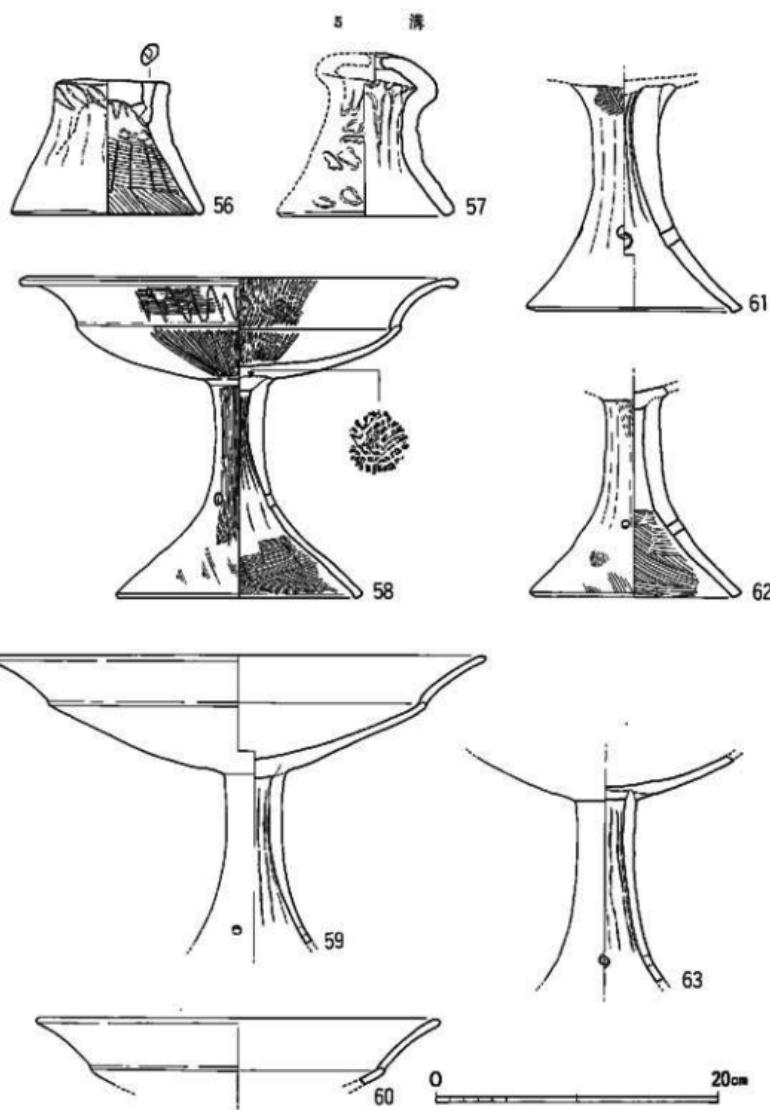


第5図 大溝1 上・中層出土土器実測図（その5）（縮尺 1/4）

Ⅲ 各遺構と出土遺物

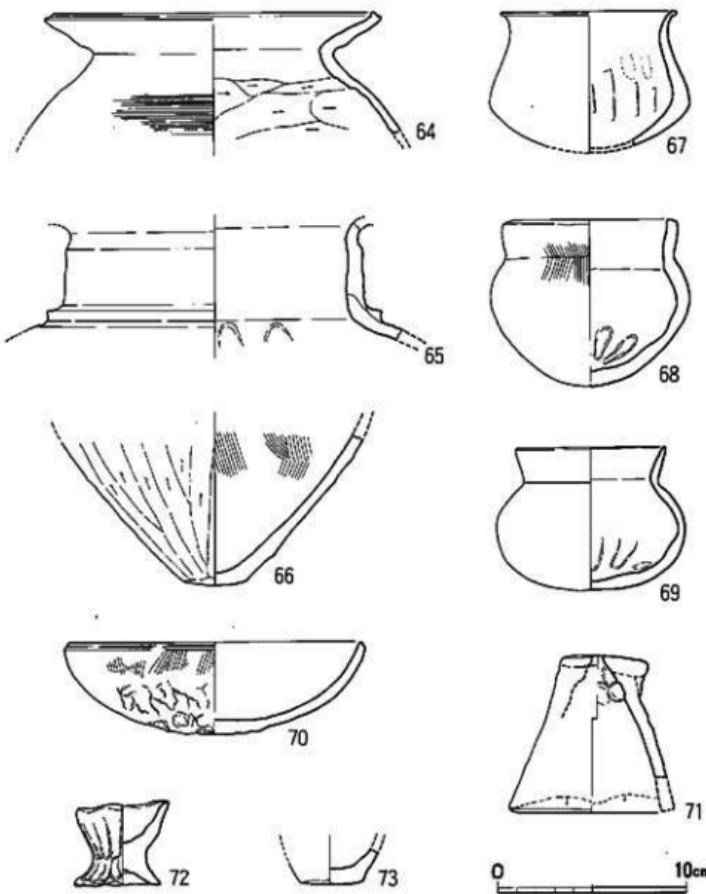


第68図 大溝1 上・中層出土土器実測図(その6) (縮尺 1/4)



第70図 大溝1 上・中層出土土器実測図（その7）（縮尺 1/4）

五 各道標と出土遺物



第71図 大溝1 上・中層出土器実測図(その8) (縮尺 1/3)

上端が袋状となり、上面は丸くなる。71は小型品で、ミニチュアかとも考えたが、下端部（矢印以下）が二次火熱を受けて赤変しており、実際に使用されている。

高杯（58～63） いずれも大型で、弥生後期後葉から終末期の特徴を有する。58は完形品で、杯部と脚部の接合面には、ハケ工具端による刻みつけたような痕跡を残す。58は口縁部が未だ

第5表 大溝1・上・中層出土土器総観察表

(単位cm)

番号	出土地点	器種	法量	時期	特徴
第64図 1	北半中層	甕	口径 25.3 高さ 底径	弥生 中期初頭	如意形口様に作り、肩部外面はやや粗い縦ハケ、内面はナデ。口縁内外面は横ナデ。口縁上面から外面には焼がこびりつく。粗砂かなり含み、焼成良好で、内面は淡黄から暗褐色をなす。%残存。
第64図 2	北半中層	甕	口径 21.6 高さ 底径	弥生 中期初頭	如意形口縁で、腹上位に細めの沈線を巡らす。口縁内外面横ナデ、肩部外面粗い縦ハケ。内面は斜めナデ上げ、口縁外下端は粘土がはみ出す。外面は焼がこびりつく。粗砂多く焼成良好。%残存。
第64図 3	南半上層	甕	口径 27.5 高さ 底径	弥生 中期初頭	上面は平坦面をなし、口縁外側面も面取り状となる。腹上位にやや細めの浅い沈線。肩外面は粗い縦な斜めハケ。内面はナデる。粗砂多く含み、焼成良好である。%弱残存。
第64図 4	南半上層	甕	口径 高さ 底径 7.4	弥生 中期初頭	外下端が張り出し、底面中央部が丸くへこむ。外面はやや細かい縦ハケ、内面と底外面はナデ。粗砂多く、焼成良好。
第64図 5	北半中層	甕	口径 高さ 底径 7.1	弥生 中期初頭	底面中央が大きく上げ底状となる。外面は粗い縦ハケ、内面と底外面はナデ。粗砂多く、焼成やや良くな。外表面は二次火熱を受けて淡赤～淡黄色をなす。
第64図 6	北半中層	甕	口径 高さ 底径 8.0	弥生 中期初頭	底部はわずかに上げ底氣味となる。内外面ともに丁寧にナデている。粗砂多く含み、焼成やや不良。内面淡黄～暗褐色、外表面は暗灰褐～暗茶褐色をなす。
第64図 7	北半中層	甕	口径 32.8 高さ 底径	弥生 中期前葉	口縁内端がわずかにつまみ出される逆し字状口縁。口縁内外面横ナデ、肩部外面は磨減、内面はナデしている。焼成良好で、細砂粒多く含む。
第64図 8	南半上層	甕	口径 31.4 高さ 底径	弥生 中期前葉	口縁部外面が凹状となり、口縁内外面横ナデ、肩部外面縦ハケ、内面は丁寧なナデ。明らかに口縁を折り曲げて、外下部を粘土で補強している。黒漆母・長石細粒を多く含む。焼成良好。
第64図 9	北端上層	甕	口径 26.4 高さ 底径	弥生 中期前葉	あまり刷の張らない、跳ね上がり口縁をなす。口縁内外面横ナデ、肩外面はやや粗い縦ハケ、内面は丁寧にナデる。粗砂いくらか含み、焼成良好で黄褐色をなす。かなり精製品。
第64図 10	南半中層	甕	口径 22.5 高さ 底径	弥生 中期前葉	口縁上端をつまみ出す跳ね上がり口縁となる。口縁内外面横ナデ、肩外面はやや粗い縦ハケ、内面は丁寧なナデ。粗砂多く、焼成不良。

III 各遺構と出土遺物

番号	出土地点	器種	法量	時期	特徴
第64回 11	北半上層	袋状口縁 壺	口径 8.0 高さ 底径	弥生 中期末	袋部下に断面三角凸帯を付ける長頸壺。外面から袋部内面に丹塗り。頸部外面は紙ハケ。内面にはシボリ痕あり。細砂少含み、焼成不良で内面地色は淡白褐色をなす。
第64回 12	南半上層	底部	口径 高さ 底径 9.0	弥生 中期前葉 ~末	端手でわずかな上げ底になる。胴外面は粗い紙ハケ、内面には指オサエ痕著しい。底外面は無なナデ。片側に黒斑部。細砂多く、焼成やや良好。
第65回 13	北半上層	壺	口径 31.4 高さ 底径	弥生 中期前葉	胴の張らない洗ね上がり口縁をなす。口縁内外面横ナデ、胴部外面は粗い斜めハケ、内面はナデる。粗砂かなり含み、焼成やや不良で内外面淡黄褐色をなす。
第65回 14	北半中層	壺	口径 35.3 高さ 底径	弥生 中期末	端部が丸くなる口縁で、口縁部外面横ナデ、内面下半には粗い横ハケを残す。胴部外面粗い紙ハケ、内面はナデる。細砂多く含み、焼成やや不良。
第65回 15	北半中層	壺	口径 32.2 高さ 底径	弥生 中期末	頸部で丸く屈曲する。口縁部内外面横ナデ、内面下半には粗い横ハケを残す。胴部外面粗い紙ハケ、内面は横ナデ。細砂粒いくらか含み、焼成やや不良。
第65回 16	南半上層	壺	口径 31.2 高さ 底径	弥生 中期末	頸部内面に段をなし、口唇外面はやや凹状となる。口縁内外面横ナデ、胴部外面はやや粗い紙ハケ、内面はナデる。細砂多く含み、焼成不良で、内外面淡黄褐色をなす。1/4残存。
第65回 17	南半上層	高杯	口径 28.5 高さ 底径	弥生 中期前葉	口縁上面を肥厚させて、深い杯部となる。器表全面磨滅する。細砂多く含み、焼成やや良好で、明褐色をなす。1/4残存。
第65回 18	北半上層	高杯	口径 30.8 高さ 底径	弥生 中期末	口縁の幅が広い錐先状口縁をなし、内外面丹塗りである。胴部内面には指ナデ上げがみられる。胎土精良で、焼成やや良好で、地色は淡白褐色をなす。
第65回 19	北半上層	大壺	口径 高さ 底径	弥生 後期中葉	頸部で丸く屈曲し、短かく外横気味に開く、大壺口縁である。口縁内外面横ナデ、頸部内面はナデる。粗砂多く、焼成やや不良。
第65回 20	北半中層	壺	口径 11.8 高さ 底径	弥生 期	ゆるやかに開く小型壺で、口縁内外面から頸内面は横ナデ、胴部外面は粗い横ハケ。細砂粒多く含み、焼成不良で内外面灰黒褐色をなす。

番号	出土地点	器種	法量	時期	特徴
第65図 21	南半中層	壺	口径 15.8 高さ 底径	弥生 後期後葉	頸部内面に明瞭な段をつくらず、口縁横ナデ、 肩部外面やや細かい縦ハケ、内面は横ナデ。 粗砂いくらか含み、焼成良好。
第65図 22	南半中層	壺	口径 16.7 高さ 底径	弥生 後期後葉	頸部内面に段をつくり、口縁外縁は凹状となる。 口縁内外面細な横ナデ、肩部外面縦ハケの上ナデ、内面はハケの上ナデ。粗砂若干含み、焼成やや不良。
第65図 23	北端上層	壺	口径 12.6 高さ 底径	弥生 後期終末	口唇上面横ナデ、口縁内面横ハケ、外縁は細 かい縦ハケ。肩内面は斜めハケ。粗砂わずか に含み、焼成良好で内外面灰褐色をなす。 %弱存。
第65図 24	北端上層	壺	口径 20.4 高さ 底径	弥生 後期終末	口唇外縁は凹状となり、内外面横ナデ、肩外 縁は細な縦ハケ、内面上位は横ハケ、下半は ナデする。但石英、片岩細片を多く含む。焼成 良好。%弱存。
第66図 25	南半中層	壺	口径 24.2 高さ 底径	弥生 後期終末	頸部内面は段をなすが、丸味をおびる部分も ある。口縁内外面横ナデ、肩外縁細い縦ハケ。 内面は縦なナデ。粗砂多く含み、焼成不良。 %弱存。
第66図 26	北半中層	壺	口径 26.1 高さ 底径	弥生 後期終末 以降	口縁内外面横ナデ。肩部内面は組い横・斜め のハケ。外面は太く粗な斜位の叩き目。外面 には焼付苔。口縁外縁には板状工具端痕残 る。粗砂多く焼成不良。
第66図 27	南半中層	壺	口径 24.1 高さ 底径	古墳初期	口唇上面が部分的にへこみ、口縁内面は細か い横ハケ。外面上半は斜めハケ、下半は縦ハ ケ。肩内面は組い斜めハケ。外面は組い横位 叩き目を常に施す。
第66図 28	北端上層	壺	口径 17.5 高さ 底径	弥生 後期終末	口縁内面は組い横ハケ。外面は横位の組い叩 き目、肩部内面は組い横～斜めハケ。外面は 横方向叩き目の上を組い縦ハケ。粗砂多く、 焼成やや不良。
第66図 29	北端上層	壺	口径 14.8 高さ 底径	弥生 後期終末	口縁内面横ハケ、外面は組い横位の叩き目。 肩部内面上半は斜め～横位の組いハケ。肩外 縁はやや下位に横位の組い叩き目を残して、 斜めの縦なハケ。粗砂多く、焼成やや不良で 淡白褐色。媒はなし。
第66図 30	北端上層	壺	口径 20.8 高さ 底径	弥生 後期終末	口唇外縁をへこませ、その下端に細い刻目。 肩部上端にはヘラによる短縫切鉋文。口縁内 外面横ナデ。肩部外縁は縦ハケ、内面は斜め ハケ、肩部外縁は斜めハケ。粗砂多く、焼成 良好、黄褐色。

III 各遺構と出土遺物

番号	出土地点	器種	法量	時期	特徴
第66回 31	北半中層	壺	口径 17.5 高さ 底径	弥生 後期終末	口唇外面が圓状となり、外面横ナデ。頸部外面は極めて粗い縦ハケ。内面は丁寧にナデる。粗砂多し。焼成やや不良で、淡黄褐色をなす。
第66回 32	北半中層	壺	口径 18.3 高さ 底径	弥生 後期終末	口唇外面を圓状となし。頸部外面上半はやや粗い斜めハケ、下半は横ナデ。内面はナデ、口唇外面は横ナデ。粗砂かなり含み、焼成やや良好。少存。
第66回 33	北端上層	壺	口径 高さ 底径	弥生 後期	胴中位に4(+α)本の断面三角凸帯を連接して付ける。外面下半は極めて粗なハケ、内面はナデる。粗石英・長石多く含み、焼成良好。少存。
第67回 34	南半中層	壺	口径 高さ 底径	弥生 期	球形胴に近い小形品で、胴部上半はヘラ磨き、下半は丁寧なナデ、内面はナデているが部分的にハケが残る。胎土に長石・石英かなり含み、焼成良好。少存。
第67回 35	北半中層	袋状口縁 壺	口径 16.4 高さ 底径	弥生 後期前葉	袋部外面に未だ後をつくらぬ頸。口縁外面横ナデ。頸部内面には横ハケが残り、外面はやや細かい縦ハケを施す。外面には化粧土を施す。粗砂多く、焼成やや良好。
第67回 36	北端中層 下部	複合口縁 壺	口径 19.7 高さ 底径	弥生 後期後葉	口縁接合部外面に小さい丸目を施し、頸部直下の凹帯下に2本の粘土紐の貼り付けあり。口縁内外面横ナデ。外面にはハケ残る。頸部外面縦ハケ。内面は横ハケ。頭下端～胴内面はナデる。粗砂多く、焼成良好。
第67回 37	南半中層	複合口縁 壺	口径 19.3 高さ 底径	弥生 後期終末	口器外端をつまみ出す。口縁外面横ナデ。頸部内面横ハケ、外面はやや細かい縦ハケ。口縁外面にはいくらかハケ残る。少存。粗砂多く、焼成不良。
第67回 38	北端中層 下部	複合口縁 壺	口径 25.0 高さ 底径	弥生 後期終末	口唇上端をつまみ上げる。口縁外面横ナデ。頸部外面は上下2段に分けて、粗い難な縦ハケ。内面は粗い横ハケ。粗砂多く含み、焼成やや不良で淡褐色をなす。少存。
第67回 39	北端上層	複合口縁 壺	口径 27.1 高さ 底径	弥生 後期終末 以降	口唇内外端をつまみ出す。口縁部はかなり立つ。口縁外面横ナデ。頸部外面はやや細かい縦ハケ、内面は横ハケ。粗砂いくらか含み、焼成やや良好。少存。
第67回 40	北端中層 下部	長頭壺	口径 13.5 高さ 底径	古墳初頭	大きくラッパ状に開く口縁。器表全面磨滅して調整不明。粗砂多く含み、焼成良好で、淡褐色をなす。

番号	出土地点	器種	法量	時期	特徴
第67図 41	北端中層	平底鉢	口径 高さ 底径 13.8	弥生 後期後葉 (?)	円錐状粘土板を底部に貼り付けた異類土器。頭外面は板状工具による縦方向擦過痕。内面 上半は丁寧なナデ、下端は横方向の削り。底 外面はナデる。粗石英・金雲母多く含み、燒 成良好、茶褐色～暗褐色をなす。糊止痕あり。
第67図 42	北半中層	鉢	口径 20.4 高さ (10.3) 底径	弥生 後期終末	大きく開く口縁となる。口縁外端を突出させ る。口縁内外面横ナデ、口縁外面細かい縦ハ ケ、内面は体部まで横ヘラ磨き。体部外面は 部分的にハケを残してナデする。頭部内面は半 周程が接をなす。粗砂多く、焼成やや良。
第67図 43	北端上層	鉢	口径 18.1 高さ 底径	弥生 後	口唇内端をつまみ出す。内外面横ナデ、胎土 精良で、焼成やや良好。内面淡黄褐色、外面 は淡白褐色をなす。
第68図 44	北半中層	大甕	口径 24.5 高さ 底径	弥生 後	口唇面をへこませる。口縁内外面横ナデ。頭 部外面は粗い縦な斜めハケ。内面は丁寧にナ デる。粗砂多く、焼成やや不良。1/2残存す る。
第68図 45	北半上層	大甕	口径 27.5 高さ 底径	弥生 後	頭部に上面をへこませた断面梯形凸帯を付け る。頭部外面は粗い斜めハケ。内面は横ハケの 上を横方向にナデ消している。粗砂多く、 焼成良好。精製品。1/2残存。
第68図 46	北半中層	大甕	口径 41.5 高さ 底径	弥生 後期終末	口縁外間に細めの刻目を巡らせる。口唇内面 から、凸帯下まで横ナデ、口縁内面は横ハケ、 頭部外面はやや粗いハケ、内面は斜めハケ。 粗砂多く含み、焼成やや不良で内外面淡黄 褐色をなす。1/2残存。
第68図 47	北端上層	大甕	口径 34.3 高さ 底径	弥生 後期終末	口縁外面は四角となり、頭部の凸帯にはハケ 工具による刻目が施される。口縁内外面横 ナデ、口縁内面は粗い横ハケ、頭部外面と口 縁内面も細な粗い斜めハケ。粗砂多く含み、 焼成不良。1/2残存。
第69図 48	北端上層	大甕	口径 32.2 高さ 底径	弥生 後期終末	口唇上面にはハケ工具による刻目、頭部凸帯 にはヘラによる斜め刻目を施す。口唇内面か ら外面凸帯下まで横ナデ、頭部内外面と頭部 内面は粗いハケ。粗砂多く、焼成良好。1/2残 存。
第69図 49	北端上層	大甕	口径 35.3 高さ 底径	弥生 後期終末	頭部上端の輕広い凸帯上にはハケ工具端に よる斜め刻目。口縁内外面横ナデ、頭部内外面 ハケ。頭部内面上端は横ナデ。それ以下は斜 めハケ。頭部外面は横位叩き目の上を縦ハケ。 粗砂多く、焼成良好。
第69図 50	北半中層	大甕	口径 高さ 底径 9.2	弥生 後期終末	底外面がいくらかふくらみ、部分的に粗いハ ケを施す。頭外面は上半に粗く太い叩き目を 残し、その上を板状工具による横方向の軽い 擦過。内面は横ハケの上をナデ消す。粗砂多 く、焼成やや良好。

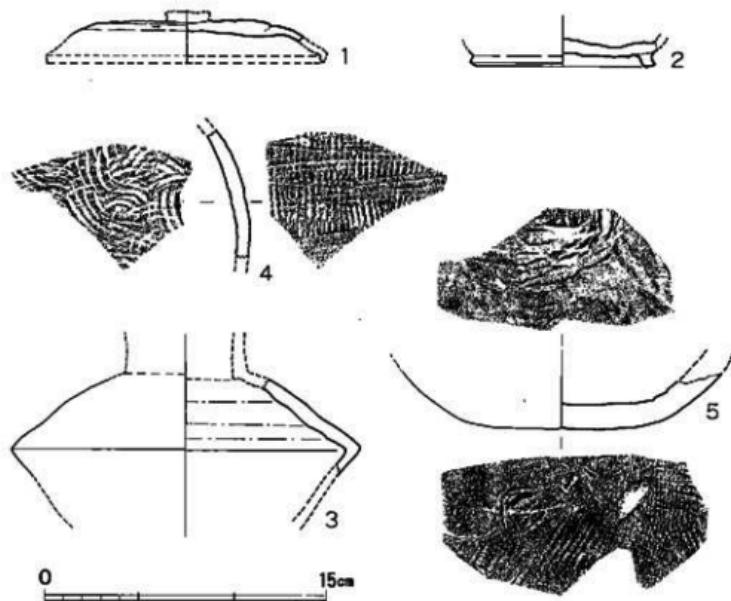
III 各遺構と出土遺物

番号	出土地点	器種	法量	時期	特徴
第69図 51	北半中層	底部	口径 高さ 底径	弥生 後期後葉	厚く、ふくらみをみせる底部。内外面ナデで おり、内面には指オサエ痕著しい。粗砂多 く、焼成や良好。
第69図 52	南半上層	底部	口径 高さ 底径	弥生 後期後葉	厚手で、ふくらみをみせる底部。側部外面は 横ハケの上をナデする。内面も複数のハケの上を ナデ消す。底外面も複数のハケの上ナデ消し。 粗砂多く、焼成不良。
第69図 53	北半上層	底部	口径 高さ 底径	弥生 後期後葉	ややふくらむ底部。側外面は複数のハケの上をナ デ消し。内面は粗い横ハケ。底外面も粗いハ ケ。粗砂多く含み、焼成良好。
第69図 54	北端上層	器合	口径 高さ 底径	弥生 後期後葉	口唇上端に粘土を貼り付け、立ち上がりさせる。 受け部内外面は横ナデ。体部外面は粗い横ハ ケ、内面は粗い横ハケ。細石英・細長石・細 雲母をかなり含み、焼成良好、淡黄褐色をな す。
第69図 55	北半中層	器合	口径 高さ 底径	弥生 後期後葉	体部上半でしまり、受け部外面は僅かにへこ む。口唇内外面横ナデ、体部外面粗い横ハケ、 内面上位は横ハケ、中位は指ナデ上げ、下半 は横ハケの上横ナデ。下端内外面横ナデ。粗 石英・長石多く、焼成やや良好。二次火熱な じ。
第70図 56	北半上層	器合	口径 高さ 底径	弥生 後期後葉	上面が平坦となり。上面縁は正円に近い。内 外に指オサエ痕残る。下端外面はナデ。内面 は粗いハケによる回転方向押し引き。粗砂多 く、燒成度で壳形。特に強い二次火熱痕はみ られない。
第70図 57	北半中層	器合	口径 高さ 底径	弥生 後期後葉	上面が丸くふくらみ、中心に円孔を穿つ。外 面は指オサエ著しく、内面には指オサエナデ がみられる。粗砂極めて多く、残闕残存。
第70図 58	北半中層	高杯	口径 高さ 底径	弥生 後期後葉	口唇内外面横ナデ。口縁内面はハケの上に継 位のヘラ磨き。外縁は横ハケの上を波状ヘラ 磨文、体部内面は継位ヘラ磨文、外縁は密な 横ヘラ磨き。脚柱外面は横ヘラ磨き。下半は 細めハケの上ナデ。内面下半は細かい横ハケ。 孔は3個。
第70図 59	北端中層 下部	高杯	口径 高さ 底径	弥生 後期後葉	器表全面磨滅。孔の数不明。おそらく3個。 石英・長石粒わずかに含む。焼成やや不良。
第70図 60	北半中層	高杯	口径 高さ 底径	弥生 後期後葉	器表全面磨滅。粗砂若干含むが、かなり精良。 焼成やや良く、内外面淡黄褐色をなす。

番号	出土地点	器種	法量	時期	特徴
第70図 61	北半中層	高杯	口径 高さ 底径 15.2	弥生後期後葉	脚端内面は58と同じく突出する。孔は4個。外端はかなり磨滅するが細かい縦ハケか。内面下半はナデる。脚端内外は横ナデ。断面上面は接合面である。石英粒かなり含み、焼成良好。
第70図 62	北端上層	高杯	口径 高さ 底径 15.2	弥生後期後葉	脚柱外端は縦ハケの上を粗い縦ヘラ磨き、下半は縦ハケの上ナデ消し。内面下半はやや粗いハケ。孔は3個。
第70図 63	北端中層下部	高杯	口径 高さ 底径	弥生後期後葉	杯部内面は磨滅して不明。外端は脚部まで縦ヘラ磨き。孔は対応する位置に2個。胎土わりと精良、焼成やや不良、内外面淡茶褐色をなす。
第71図 64	北端中層下部	甕	口径 17.9 高さ 底径	古墳初頭	口唇上端をつまみ出す。口縁から腹部内外面横ナデ。腹端外端は極めて細かい横ハケ、内面はヘラ削り。微砂粒わずかに含むがかなり精良、焼成良好で、やや灰色がかった淡黄褐色をなす。薄手精製品。劣化現存。
第71図 65	北半中層	二重口縁壺	口径 高さ 底径	古墳初頭	腹部内外面横ナデ。細砂多く含み、焼成やや不良で、内外面とも淡白褐色をなす。劣化現存。
第71図 66	南半上層	壺	口径 高さ 底径 8.3	古墳初頭	小さい尖底的な底部。外端は粗いヘラ削り上げ、内面下半は横ハケ、下半は丁寧なナデ。粗石英・長石を多く含む。焼成良好。
第71図 67	北半中層	異形甕	口径 9.4 高さ 7.5 底径	弥生後期 古墳初頭	休部屈曲部以上の内外面は水引き状横ナデ。以下外端は不定方向のナデ。内面には板状工具端擦あり。胎土極めて精良。焼成良好。褐色系。
第71図 68	南半中層	小型丸底壺	口径 9.3 高さ 8.9 底径	弥生後期	口縁内外面横ナデ。腹部外端には縦ハケ残る。体部外端は粗なナデ。内面もナデしている。雲母・長石細粒かなり含み、焼成やや良く、淡褐色～黒色をなす。
第71図 69	北半中層	小型丸底壺	口径 8.0 高さ 7.6 底径	弥生後期 古墳初頭	口縁内外面横ナデ。脚部外端はナデしており、内面はナデ上げ状となる。外底中央に黒斑部あり。粗石英・長石かなり含み、焼き良く、淡黃褐色をなす。
第71図 70	南半中層	鉢	口径 16.0 高さ 5.0 底径	弥生後期 古墳初頭	口唇外端に浅い沈線をめぐらす。口唇内外面横ナデ。外面上半斜めハケ、内面はナデる。外面下半は粘土シワが多くて、指オサニも目立つ。胎土精良、焼成良好。

三 各遺構と出土遺物

番号	出土地点	器種	法 量	時 期	特 徴	
第71図 71	北端中層 下部	器合	口径 高さ 底径	4.6 8.5 8.9	弥生 後期終末	小型の管形器合。上面は略円形をなし。中心に小円孔あり。体部外面はわりと平滑なナデ。内面は下方への縦ナデ。粗砂多く焼成良く、淡褐色をなす。下端内外面は二次火熱を受けて赤變する。
第71図 72	南半中層	ミニチユ ア	口径 高さ 底径	5.0 4.3 4.6	弥生 期	外面は指編ナデ。全体に手捏ねそのもの。粗砂多く、焼成不良。内外面黒色をなす。完形品。
第71図 73	北端中層 下部	ミニチユ ア	口径 高さ 底径	3.3	弥生 期	内外面ナデしており、細砂多く含み、焼成良好で、淡黄褐色をなす。



第72図 大溝1 上層出土須恵器実測図(縮尺 1/3)

短かく、後期後葉の所産で、59は同時期の中でもやや新しい形態をなす。60は口縁部がやや長くなり、終末期と考えられよう。

土師器（64～66） 64は薄手精製品で、胎土・焼成からも明らかに他地域産と考えられる。65は二重口縁壺の頭部片である。これらは、5号堅穴住居跡と同時期で、その住人が捨てたものであろう。

上層出土須恵器（第72図）

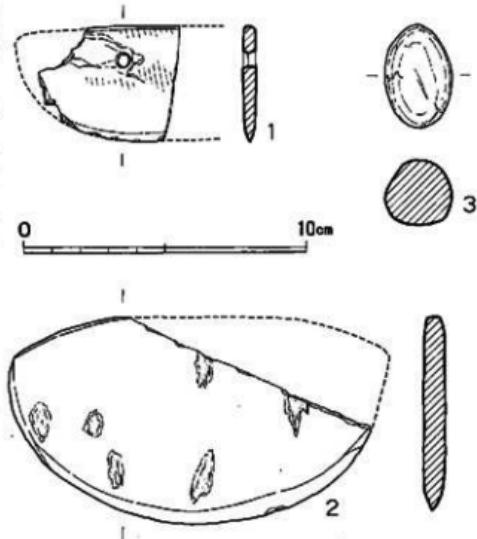
杯蓋（1） 口縁部を欠く破片であるが、振のとれた跡がみられ、天井外面には回転ヘラ削りが施され、内面はナデツケている。胎土に長石粒かなり含まれ、焼成やや堅緻で、外面暗灰色、内面は灰黒色をなす。鳥嘴状口縁につくる頸となろう。

杯身（2） 高台径9.8cmを測り、短かくやや太い高台がやや外方へ踏んばって付けられている。内外面回転ナデ、底部内面中央はナデツケを施す。胎土精良で、黒色微細粒子が極めて多くみられる。焼成堅緻である。

長頸壺（3） 脊部中途で鋭い稜をなし、断面が算盤玉状となる器形をなす。内外面とも回転ナデを施す。粗石英粒をわずかに含み、焼成堅緻で、外面は暗灰色、内面は灰色をなす。復元調査最大径18.5cmを測る。

甕（4・5） 4は脛部片で、内面は青海波あて具痕、外面は縱位の条線状叩き目の上をカキ目が雜に施される。胎土に細砂粒多く含み、焼成堅緻で暗灰色をなす。5は原手の底部片で、内面は粗大な青海波あて具痕の上を全体にナデツケ状の指ナデを施す。外面は細かい格子目叩きが残る。胎土精良で、焼成かなり不良で灰白色を呈し、生焼けの部類に入る。

以上の須恵器は、いずれも全形を知り得ず、明らかにならないが、大旨奈良前期を中心とする時期の所産である。これらは、溝の最上層から出土したもので、大溝が最終的に埋没しき



第73図 大溝1出土石窓丁・土製投弾実測図（縮尺 1/2）

III 各造構と出土遺物

った時期を示している。ということは、掘削当初から約600年もの間を経て、やっと完全に埋没したことになる。

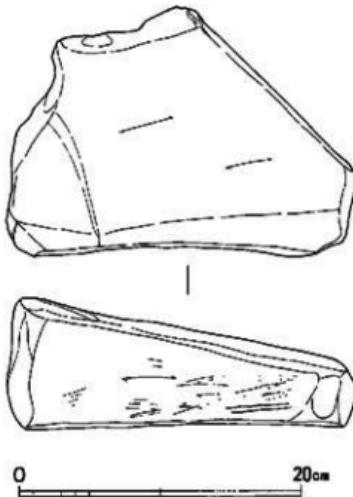
以上の大溝1出土の土器の他に、出土した石器、土製品をまとめて記述したい。

石庵丁（第78図1・2）1は、中層出土品で、幅4.1cm、厚さ0.45cmである。結晶片岩を使用しており、孔は両面穿孔で、両面ともに丁寧に研磨する。2は、全く未穿孔の外湾刃型で、幅7.3cm、厚さ0.7cmを測る。下層出土品で、刃部のみは既に丁寧に研ぎ出しており、両面は粗い研磨のままである。現存重量90gとなる。

土製投擲（3）長さ3.6cm、径2.4cmを測るラグビーボール形をなすが、断面等やや歪つとなる。上層出土品で、胎土は極めて精良で、焼成良く、暗黄茶褐色をなし、17.5gを量る。

砥石（第74図）長さ24.7cm、最大幅17.7cm、最大厚さ9.3cmをなす。大型の砂岩製粗砥である。表面両側面とともに使用している。

右側面には粗い擦痕が顕著である。

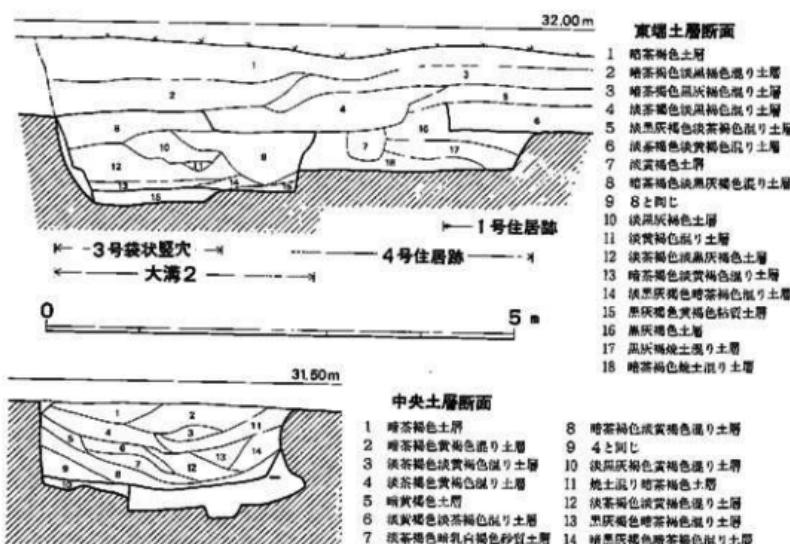


第74図 大溝1出土石製投擲（縮尺 1/4）

大溝 2 (第4・75図、図版12・13)

遺跡の中央部北端から東端へ直線的に走る溝状造構である。東端で3号袋状堅穴・4号堅穴住居跡を切り、中央部で5号袋状堅穴を切り、2号土塗基に切られる。西端近くで溝3を切り、大溝1に切られる。溝断面はU字形というよりも、L形に近く、底面は平坦で、壁面もしっかりしている。埋土は、淡茶～淡黄褐色系の土がほとんどで、わりとしまっており、人為的に埋め戻されたような感じさえ受ける。底面標高は明らかに西端が高く東へと傾斜している。

幅は東端で290cm、中央で270cm、北端で280cm、深さは東端で85cm、中央で90cmを測る。出土土器は、西半・中央・東半には少なく底面で1点の完形壺が出土したのみで、北端部の狭い範囲内の中から多量に出土した。



第75図 大溝2 土層断面実測図(縮尺 1/60)

出土土器の詳細は表6に説明を加える。概要・特徴的諸点・編年的位置付けのみを以下に記してゆきたい。

中央・東半出土土器(第76・77図上半)

壺(1~9) 1~2は、逆L字口縁となるタイプで、口縁内端がつまみ出される。弥生中期前葉の所産である。3~7は、ほぼ同形態の器形をなし、4の口縁上面には、太めの沈線2本を施文する。これらは脚部上半に張り、成形・調整手法とともに精緻であり、中期末の年代が与えられる。8はわずかに跳ね上がり口縁的な傾向をみせる。

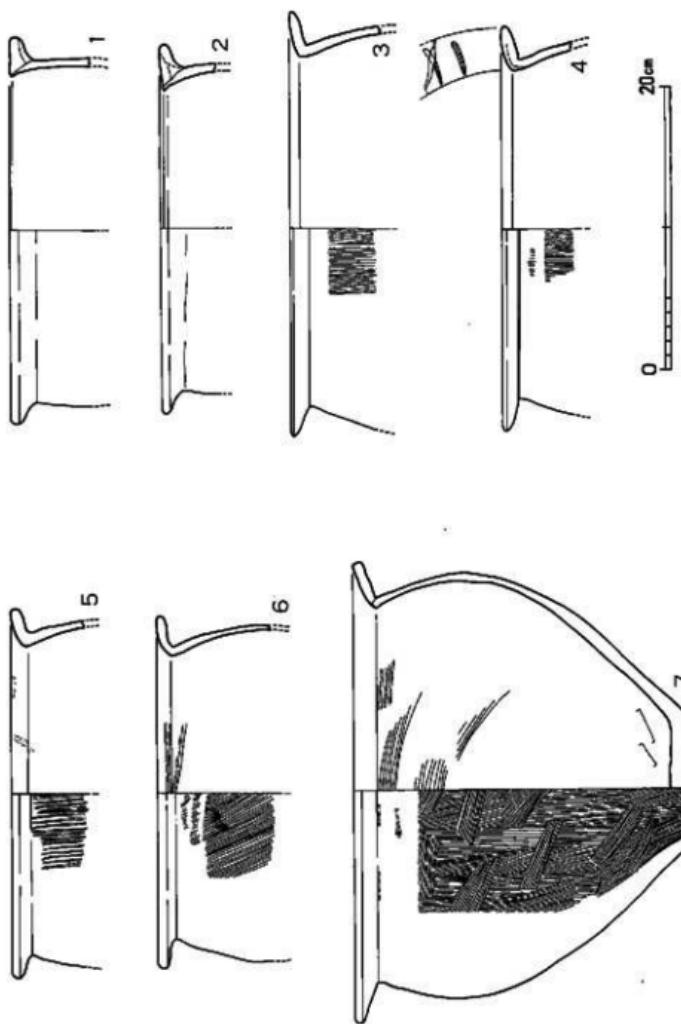
壺棺片(10~11) 10は弥生中期中葉の所産で、壺棺破片混入の1例である。

北端出土土器(第77図下半~第80図)

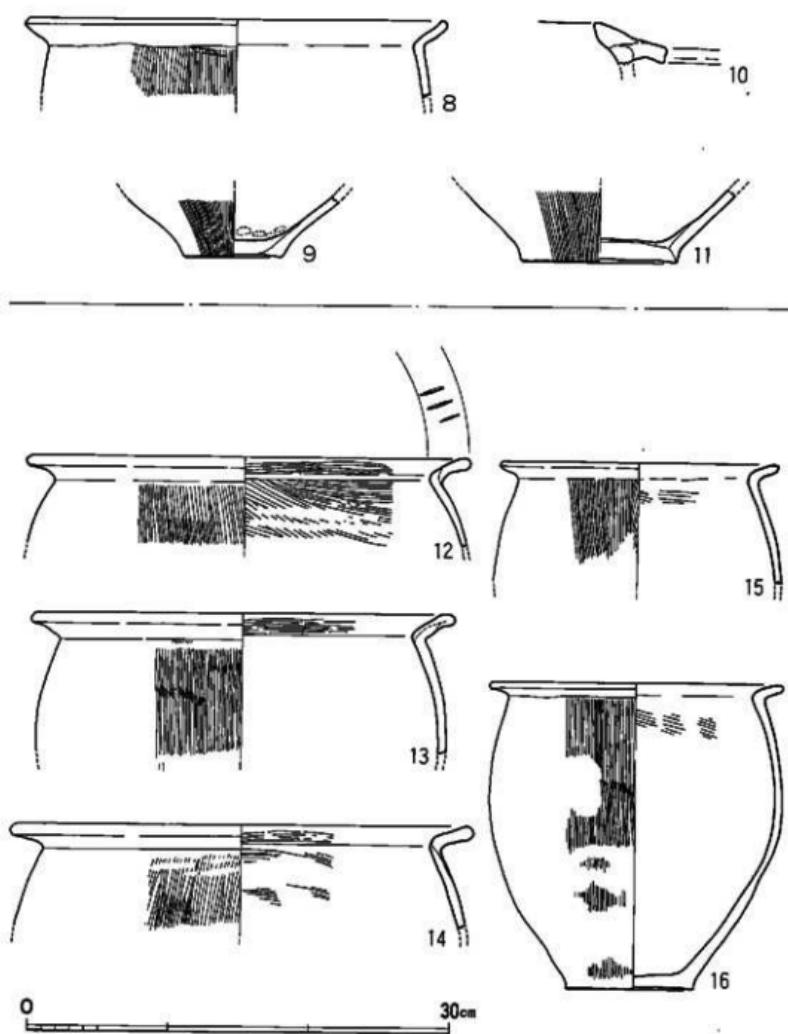
狭い範囲にびっしりと重なって出土しており、一括して捨てられたと考えて、編年上意味深い資料となろう。

壺(12~19, 24~28) 12~17は、ほぼ同形態で、中央、西半部より出土したものと同類で、弥生中期末のものである。18は、頭部から丸く屈曲して開く形態をなし、やや後出しよう。24

III 各造形と出土遺物

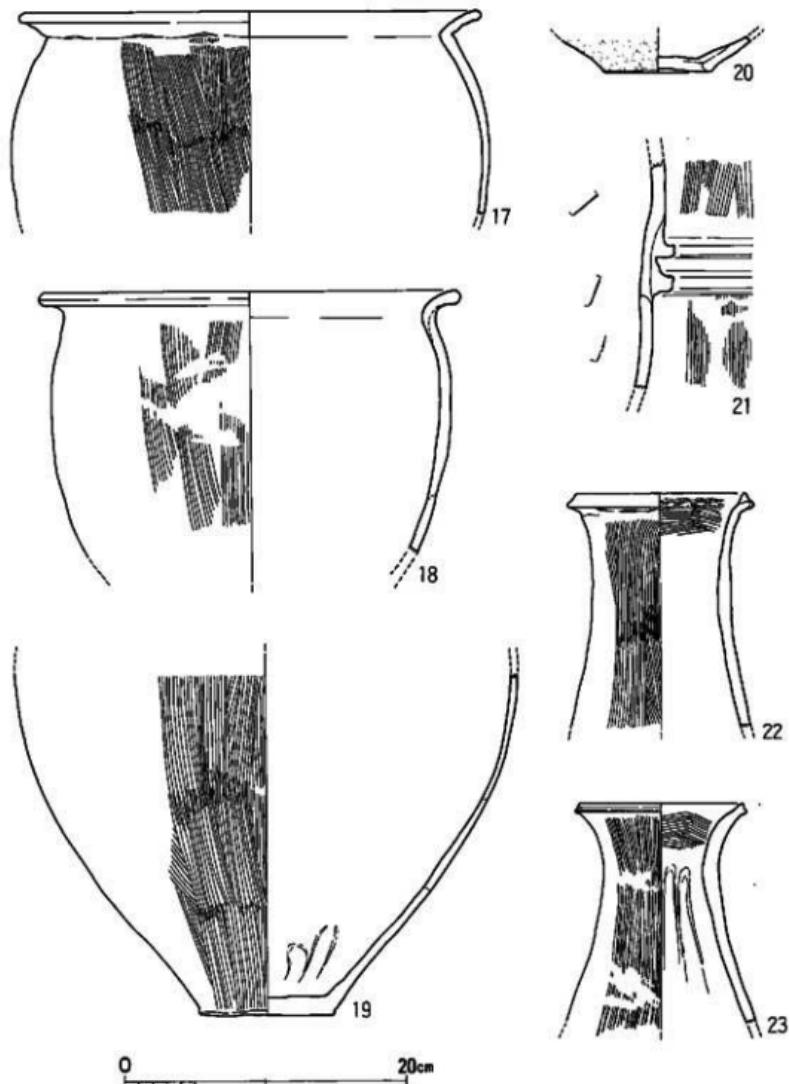


第2図 大海2(中央・東半)出土土器実測図(その1) (縮尺 1/4)

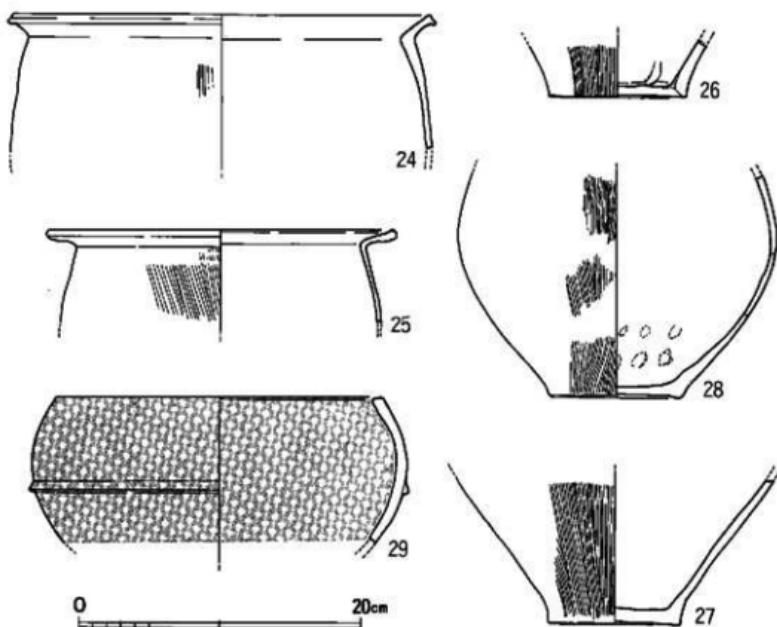


第77図 大溝2（中央・西半）（北端）出土土器実測図（その2）（縮尺 1/4）

三 各遺構と出土遺物



第76図 大溝2(北塙)出土土器実測図(その3) (縮尺 1/4)



第79図 大堺2（北端）出土土器実測図（その4）（縮尺 1/4）

第8表 大堺2 出土土器総観表 (単位cm)

番号	出土地点	器種	法量	時期	特徴
第76図 1	中央最下層	甕	口径 27.3 高さ 底径	弥生 中期前葉	口縁内外横ナデ。肩部外面はナデ。内面は丁寧なナデ。口縁上面から胴外面には縦が若干付着する。細砂多く含み、焼成やや不良で、内面淡褐色、外表面は暗褐色から淡赤褐色をなす。%残存。
第76図 2	東端上層	甕	口径 26.2 高さ 底径	弥生 中期前葉	口縁内壁が小さくつまみ出される。口縁上面はわずかにへこむ。口縁内外横ナデ。肩部内外面横ナデ。細砂多く、焼成やや不良。口縁上端から胴外面には縦付着。%残存。
第76図 3	西半下層	甕	口径 30.0 高さ 底径	弥生 中期末	口縁内外横ナデ。肩外面はやや細かい縦八ヶ、内面は丁寧なナデ。細砂多く、焼成やや良。%残存。

III 各遺構と出土遺物

番号	出土地点	器種	法量	時期	特徴
第76図 4	中央最下層	壺	口径 28.7 高さ 底径	弥生 中期末	口縁内外面横ナデ。胸部外面は目の細かい縦ハケ、内面はナデる。口縁内面から外面には素色の化粧土がかかる。頭部外面には沈線を入れ、口縁上面に太い沈線2本を施文する。細砂多く、焼成やや良。
第76図 5	中央最下層	壺	口径 26.2 高さ 底径	弥生 中期末	口縁内外面横ナデ、腹外面は極めて粗い縦ハケ、内面はナデる。口縁内面にはごく部分的に丹飛沫が付着。細砂多く、焼成不良。外面擦こびりつく。
第76図 6	中央最下層	壺	口径 25.2 高さ 底径	弥生 中期末	口縁～胴上端の内外面横ナデ、胸部外面はやや細かい斜めハケ、内面はナデる。口縁内面下半から頭部内面にはハケ残る。細砂多く、焼成やや不良。4%器存。
第76図 7	中央最下層	壺	口径 32.6 高さ 24.0 底径 9.2	弥生 中期末	口縁内外面から頭外面上端まで横ナデ。胸部外面は縦ハケの上を横ハケ(2.7cm幅、1cmに12本)。内面は極めて粗いハケの上をナデ消す。底外面は僅かな上げ底。細石英・長石・雲母片いくらか含む。焼成良好で淡黄褐色。完形品。
第77図 8	中央上層	壺	口径 30.0 高さ 底径	弥生 中期前葉～末	口縁内面ややへこむ。口縁内外面横ナデ。胸部外面やや粗い縦ハケ、内面はナデ。外面に漆若干付着。細砂多く含み、焼成良好。
第77図 9	中央 中・下層	壺	口径 高さ 底径 7.1	弥生 中期末	わずかな上げ底となる。外面は細かい縦ハケ、内面はナデる。細砂いくらか含み、焼成良好で淡黄褐色をなす。精製品。
第77図 10	西半下層	大壺 (要挖片)	口径 高さ 底径	弥生 中期前葉	外面横ナデ。口縁上面と、外端面がわずかにへこむ。粗砂僅か、細砂多く含む。焼成やや良好。
第77図 11	西半上層	大壺 (要挖)	口径 高さ 底径 11.1	弥生 中期	わずかな上げ底状となる。外面はやや粗いが整然とした縦ハケ。内面はナデ上げ。底外面は一方向へのナデ。細砂多く、焼成やや不良。
第77図 12	北 壇	壺	口径 31.5 高さ 底径	弥生 中期末	口縁内面上半から外面横ナデ。口縁内面下半横ハケ。胸部外面縦ハケ、内面は横～斜めハケ。外胚は煤付着。細砂多く、焼成やや不良。口縁上面に3本沈線施文。
第77図 13	北 壇	壺	口径 30.1 高さ 底径	弥生 中期末	口縁内外面横ナデ。内面には粗い縦ハケ整然。胸部内面丁寧なナデ、外面はやや細かい整然とした縦ハケ。細砂多く、焼成良好。4%器存。

番号	出土地点	器種	法量	時期	特徴
第77図 14	北 端	壺	口径 32.9 高さ 底径	弥 生 中期末	口縁内外面横ナデ、内面にはハケを残す。腹部外面は粗い縦ハケ、内面は斜めハケの上をナデ消す。腹外面から口縁外面は煤こびりつく。粗砂かなり含み、焼成良好。少存。
第77図 15	北 端	壺	口径 19.7 高さ 底径	弥 生 中期末	口縁内外面横ナデ、腹部外面やや細かい縦ハケ、内面は横ハケの上を丁寧なナデ。粗砂若干でかなり精良。焼成やや不良。
第77図 16	北 端	壺	口径 20.8 高さ 21.8 底径 9.0	弥 生 中期末	口縁内外面横ナデ、腹部外面はやや細かい縦ハケをわりと整然と施す。内面は斜ハケの上をナデ消す。わずかな上げ底となり、肩中位以下は二次火熱を受けて赤變し、以上は煤こびりつく。粗・細砂粒かなり含む。焼やや度。少存。
第78図 17	北 端	壺	口径 32.5 高さ 底径	弥 生 中期末	口縁内外面横ナデ、腹部外面はやや目の細かい縦ハケ。内面は丁寧にナデる。雲母片・細石英粒かなり含む。焼成良好で淡黄褐色をなす。少存。
第78図 18	北 端	壺	口径 29.8 高さ 底径	弥 生 中期末～後期初	口縁内外面横ナデ、腹部外面は縦ハケを施すが、かなり薄誠。内面丁寧なナデ。口縁内面から腹部外面に煤付着。細長石・石英粒かなり含む。焼成良好。淡黄褐色をなす。少存。
第78図 19	北 端	壺	口径 高さ 底径 9.5	弥 生 中期末	腹部外面粗い縦ハケ、内面は丁寧にナデる。底外面から肩下部は二次火熱で赤變。肩上半は煤付着。粗砂多く含み、焼成やや不良で内面暗褐色。
第78図 20	北 端	壺	口径 高さ 底径 7.7	弥 生 中期末	外表面丹塗り、内面ナデ。わずかな上げ底状となる。粗砂かなり含み、焼成不良。内面は黒色。外表面色は淡黄白褐色をなす。
第78図 21	北 端	大 壺 (壺 檻)	口径 高さ 底径	弥 生 中期末	コの字状凸帯 2 本を追加して付ける。凸帯周縁は横ナデ、その上下外面は縦ハケ、内面はハケをナデ消す。粗砂わずか、粗砂多く含み、焼成やや不良。
第78図 22	北 端	器 台	口径 13.3 高さ 底径	弥 生 中期末	口縁部に粘土を貼り付け、上端をつまみ出す。口縁部内外面横ナデ、口縁内面横ハケ。体部外面縦ハケ、内面は丁寧なナデ。粗砂多く含み、焼成良好。全体にわりと精緻。二次火熱なし。
第78図 23	北 端	器 台	口径 12.1 高さ 底径	弥 生 中期末	口縁内外面横ナデ、体部外面縦ハケ、内面上位は横ハケ、中位は指ナデ上げ。口縁外面をへこませる。細石英・長石粒多し。焼成良。二次火熱なし。

III 各遺構と出土遺物

番号	出土地点	器種	法量	時期	特徴
第79図 24	北 端	壺	口径 30.4 高さ 底径	弥生中期末	内外面殆んど磨滅。外面に部分的に焼付着。口端外面と口縁内外上端をへこませる。細砂粒含むが、大旨精良。焼成やや不良。
第79図 25	北 端	壺	口径 24.8 高さ 底径	弥生中期末	器體が極めて薄手で、跳ね上がり的になる。口縁内外横ナデ、肩外而粗い斜めハケ、内面は丁寧なナデ。外面には煤がこびりつく。金銀母・細石英かなり含み、焼成良好。
第79図 26	北 端	壺	口径 高さ 底径 9.8	弥生中期末	わずかな上げ底状となる。外面は整然としたやや細かい継ハケ。内面はナデる。細砂多く。焼成不良。
第79図 27	北 端	壺	口径 高さ 底径 9.3	弥生中期末	わずかに上げ底状となる。外面は整然としたやや細かい継ハケ。内面はナデる。外面に焼付着して、下端は赤変する。内面下位には炭化物こびりつく。細砂多く含み、焼成不良。
第79図 28	北 端	壺	口径 高さ 底径 9.4	弥生中期末	わずかに上げ底状となる。肩外面は細かい継ハケ、内面は丁寧にナデる。細砂粒かなり含み、焼成良好。底部片側に黒竜部あり。
第79図 29	北 端	鉢	口径 23.2 高さ 底径	弥生中期末	外面丹塗りの、内湾する器形。内面横ヘラ磨きか。細砂いくらか含むが、一応精良。焼成良好で、地色は明暎褐色。脚付となろう。少残存。
第80図 30	北 端	ミニチュア壺	口径 高さ 底径	弥生中期末	小壺で、底部と頸部は丁寧に打ち欠かれている。内面中位は横ナデでその上下は指オサエナデ。外面はナデる。粗砂多く、焼成やや不良。
第80図 31	北 端	ミニチュア鉢	口径 8.8 高さ 4.8 底径 5.1	弥生中期末	口縁内外横ナデ、体部内面は不規則なナデ。底外面は指オサエで凹凸著しい。胎土かなり精良。焼成良好で淡褐色。底外面のみ黒色をなす。少残存。

・25は、跳ね上がり口縁的傾向のものである。

壺(20)丹塗り壺であり、他の壺と併なうことから、弥生中期後半以降と考えられる。

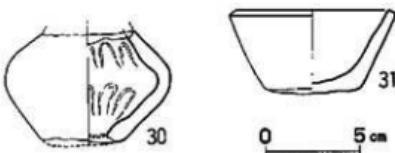
鉢(29)外面丹塗りの口縁内流するタイプである。脚付のものとなると考えられる。

器台(22・23)いずれも薄手で精製品である。体部上半でいくらか縮まり、受け部の外端面は凹状をなしており、シャープさがみられる。後期中葉以降にはみられないタイプであり、やは

5 溝

り中期末の所産と考えたい。

ミニチュア土器（30・31） 30は壺の小型品で、底部と頸部以上は故意に丁寧に打ち欠いている。31は鉢形をなす。



以上の大溝2北端出土の一括土器 第50図 大溝2（北端）出土土器実測図（その5）（縮尺1/3）
は、壺のうちの少量に新しい傾向がみられるが、大部分は弥生中期末の所産である。

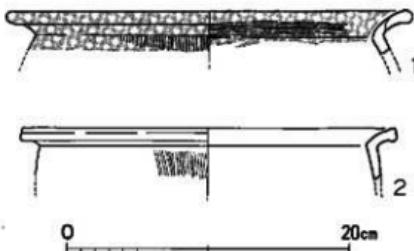
よって、大溝2掘削の時期は弥生中期末とされる。更にその後代の遺物が全くみられないことから、掘削後、それ程遠くない、近い時期に人為的に埋め戻された可能性が強い。

溝 3（第4図）

遺跡の中央北寄りに、大溝1・大溝2に切られる溝状造構が検出された。調査部分は長さ3.7mにすぎず、その全容は明らかでない。幅は80cmで、深さ46cmとなり、底面は南東方向へと低くなっている。

出土遺物（第61図）

壺（1・2） 1は、頸部で丸く屈曲して、端部が丸くなる口縁につくる。口縁内面から外面は丹塗りを施す。口縁内面下半には粗い横ハケ、口縁内外面横ナデ、頸部外面は縦ハケ、内面はナデを施す。口径28.9cmに復元され、胎土には微砂粒を多く含むが、大旨精良である。焼成や良好好で、地色は淡白褐色をなす。2は、復元口径26.5cmで頸部内面に棱をつくり、屈折して開く跳ね上がり口縁となる。口縁外面は凹状となる。口縁外面は横ナデ、頸部外面は粗い縦ハケ、内面はナデである。細砂いくらか含むが、大旨精良で、焼成不良で、内面淡褐色、外面は煤が付着して、淡黄色から暗褐色をなす。



第61図 溝3出土土器実測図（縮尺 1/4）

以上の土器は、1は弥生中期末、2は遠賀川系統と考えられ、中期前葉頃と考えられる。この溝自体の掘削年代は、中期末の大溝2に切られており、それ以前ということになる。出土土器が小片のみで、確定的ではないが弥生中期末以前の中期段階に営まれたものと考えておく。

III 各遺構と出土遺物

6 柵列及び柱穴群

柵列状遺構 (第32図)

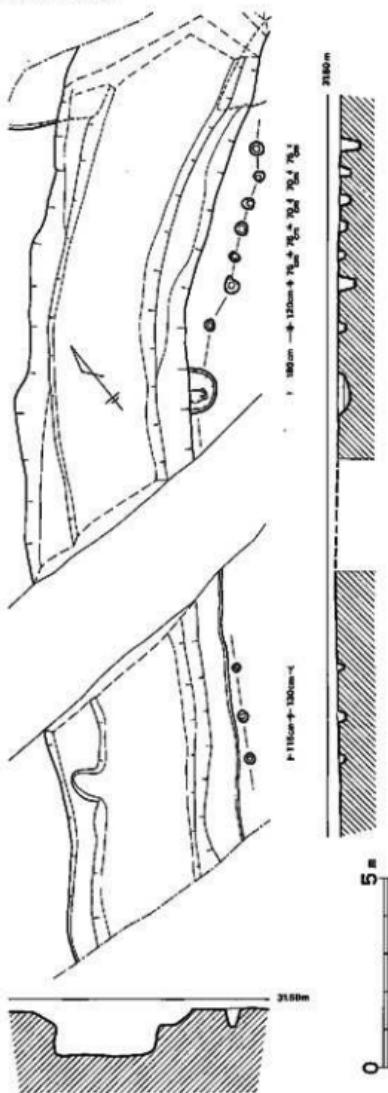
大溝1の南半・北半の東岸沿いに、小Pitが並ぶ。これらは、より東方に群集する小Pit群とは離れており、明らかに大溝1に沿ったものと理解できる。

南半沿いのものは3個あり、いずれも径20~30cm、深さ20~25cmのわりと浅いものである。115~130cmの間隔があり、北半のものに比べるとわりと疏らである。北半沿いの小Pitは、8個並んでおり、北側の6個の小Pitは、その間隔が70~75cmと密に並ぶ。それ以南は間隔も長くなる。

これらの大溝1東岸の小Pit列は、大環濠の内側に沿って立てられた、防禦用の柵列であると考えたい。その年代は、小Pit中混入の土器片が少なくて遺物からは実証にくいが、もちろん大溝1の宮まれた弥生後期後葉のものであろうと考えたいところである。

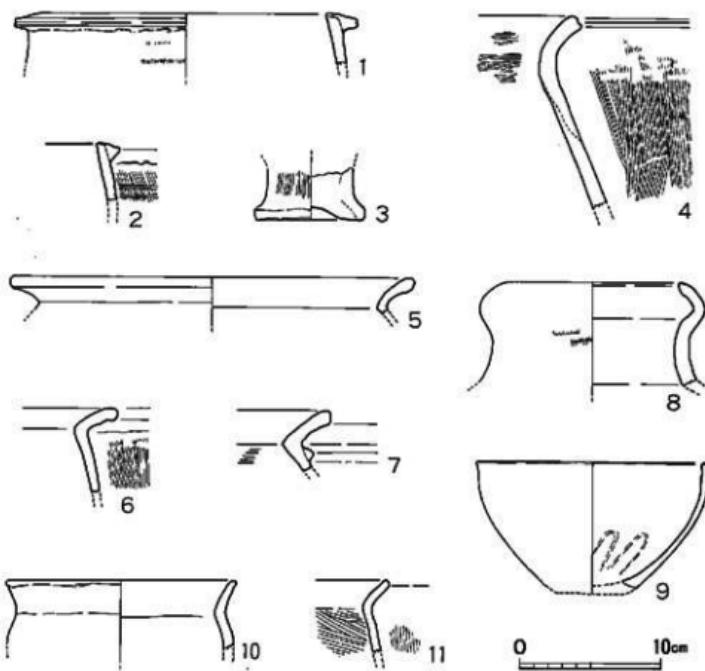
柱穴群 (第4図)

遺跡の大溝1以東には、150余個の小Pitが検出された。浅く小さく、木の根跡みたいなものも多いが、わりとしっかりして深いものもかなりみられた。これらが並んで建物等が考えられるかと思わ



第32図 柵列状遺構実測図 (縮尺 1/150)

6 條列及び柱穴群



第6図 柱穴群出土土器実測図(その1) (縮尺 1/4)

れるが、机上操作では、明確なものは探し得なかった。

各小 Pit から出土した遺物のうち、実測に供せられ得るものを以下に記述したい。

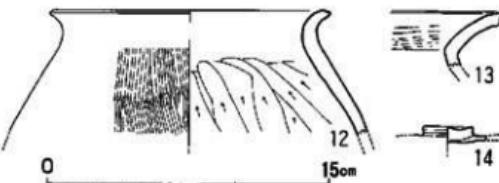
出土遺物(第83~85図)

土器 1は、P71出土品で、

口唇外端面には凹線をめぐらし、口径24.4cmを測る。

腹外面には縦ハケを施し、口縁内外面は横ナデ、外面には煤が付着する。弥生中期初頭でも、中葉に近いタ

イプである。2は、龟ノ甲



第7図 柱穴群出土土器実測図(その2) (縮尺 1/3)

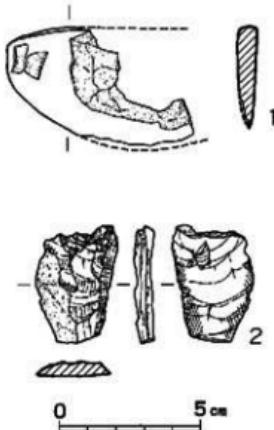
Ⅲ 各遺構と出土遺物

系統の口縁をなすが、胴部上半に沈線2本をめぐらすもので、本造跡出土例としては唯一のものである。口縁内端部もやや突出しており、胴部外面には粗い縦ハケを施し、また、煤が付着する。1は同じP71出土品である。3は、P.98出土品で、底径7.6cmとなり、中央部が大きくへこみ、充実した脚台をなす。外面には粗い縦ハケが施される。4は、P.79出土品で、大型壺となる。頸部が上方へすばまり、口唇外面には沈線が巡らされる。頸部外面には縦ハケ、口唇部内外面は横ナデ、口縁屈曲部分の内外面には雄な横ヘラ磨きを施す。頸部内面は斜めにナデしている。胎土に細砂粒をかなり含む。前期的な系統をひく中期初頭の大型壺である。5は、P.17出土品で復元口径28.8cmを測り、中期末の特徴を残す口縁小片である。6はP.4出土品で、口縁部がやや「くの字状口縁」に近づいており、頸部外面には縦ハケを施す。7は、P.45出土品で、やや大振りの壺となる。胴部内面は横ハケの上をナデ消してあり、弥生後期の特徴を示す。8は、P.72出土品で、袋状口縁壺となる。口径12.2cm、袋状部径16.0cmを測る。粗砂多く含み、頸部外面にはハケ工具端圧痕がみられる。弥生後期初～前葉の所産である。9は、口径16.8cm、器高9.4cmの鉢で、P.14出土品である。口縁上面は圓状となり、口縁内外面は横ナデ、体部内外面はナデている。胎土精良、焼成良好で、外面淡茶褐色をなす。10は、P.29出土品で、口径16.4cmを測る。内外面ナデしており、胎土精良である。11は、P.65出土品で、胴部内外面には粗いハケが施される。弥生後期後半以降のものであろう。12は、P.26出土品で、胴部外面にやや細かい縦ハケ、内面にはヘラ削りが施される。本造跡で唯一の古墳時代後期の土師器小壺となる。13は、頸部内面に稜をつくり、外滴状に開き、口唇上端を小さくつまみ出す。P.31出土品で、口縁内外面は横ナデを施すが、内面には横ハケが残る。外面には煤がこびりつく。古墳時代初頭の庄内式系統の壺片である。14は、P.35出土品で、須恵器杯の報部小片である。扁平な形態をなし、奈良期に入るものと考えられる。

石庖丁（第85図-1） 小豆色の輝緑凝灰岩製で、P.65出土品である。極めて小型品となり、孔の有無は定かではない。刃部側縁辺は再加工してつぶしている。

使用剣片（第85図-2） 不純物をかなり含む黒曜石の、縦長剣片の側縁を使用したものである。

P.16出土品で、表面には自然面を残す。



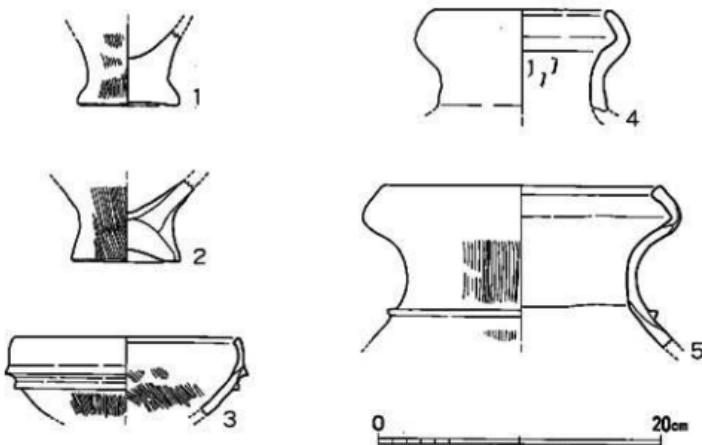
第85図 柱穴群出土石器実測図（縮尺1/2）

7 その他の遺構と遺物

本遺跡は、各時期の集落・若干の墓地等からなるが、前章までの本文中に記したものその他にも、時期・性格の不明な遺構が多い。例えば、D-1~3のような、やや浅い不整形プランの土塹は、遺物をかなり含むが、その性格が推定出来ない。

また、6号土塹を切るP.71(第49図)は、弥生中期初頭の遺物を若干含むが、上面径90cmで深さ125cmとかなり深い。貯蔵穴とするには狭く、壁面が不整形である。井戸かとも考えたが、この洪積台地上で、これ程浅くては湧水が得られたとは考え難い。また、6号土塹の北側にも、梢円~長方形の土塹状掘り込みが3基みられ、弥生中期初頭~後期の土器小片若干を含むが、その性格は全く不明である。土塹蓋とするには浅く、小型すぎるし、焼土・炭等も検出されず、判断しかねる遺溝である。

また、溝上層や、小Pit中において奈良期の須恵器が散見するが、この時期の明確な遺構も確認されていない。発掘範囲外に存在するのかもしれない。いずれにせよ、遺物総量は極く少



第56図 表面探査土器実測図(縮尺 1/4)

III 各造構と出土遺物

量であり、大規模な遺構群は考えられない。この期の集落は既に、より水田面に近い、沖積微高地の方へ移動していたものと考えられる。

なお、試掘の際採集された土器若干を図示しておきたい。

表面(試掘)出土土器(第86図)

壺(1・2) 1は、底径7.3cmを測る。全体がわずかに上げ底状となり、外面には粗い縦ハケが施される。底外面中央の上げ底部は、一方向への削り状の痕跡がみられる。2は、底中央部のみが丸くへこみ、外面には粗い縦ハケが施される。接地面は削り状となり、上げ底部はナデている。外面には煤が若干付着する。

壺(4・5) 4は、口径18.3cmの袋状口縁壺で、口唇部は丸くおさめる。内外面横ナデ、内面下半はナデ上げているが、ハケ工具端圧痕が残される。粗砂粒をかなり含む。5は、大型の袋状口縁壺で、頸部下に断面三角凸帯を付ける。口唇部は平面をなし、口縁内外面横ナデ、頸部外面は粗い縦ハケ、胴部にも縦ハケを施す。胎土には粗砂粒を多く含む。口径19.5cm、袋部径22.4cmを測る。

鉢(3) 口径16.0cmで、口縁部は内湾状となる。体部上半に三角凸帯2条を付け、上半は内外面横ナデ、下半は内外面ともに細かいが雑なハケを施す。胎土に粗石英・雲母片をかなり含み、焼きは良い。脚を付ける頬かと考えられる。

以上の土器は、1・2が弥生中期初頭、4・5は弥生中期末というより後期初頭～前葉と考えられる。

IV 各論

1 集落の盛衰 (第87図)

弥生中期以前 出土遺物も遺構も皆無である。ただ、西方の昭和54年度調査のA地点包含層中より、夜日式系統甕片1点が出土しており(註1)，弥生文化開始期にこの周辺に何らかの生活が営まれたことが考えられる。

弥生中期初頭 今回発掘調査した範囲内では、明らかな遺構としては、袋状竪穴5基のみであった。それも、弥生前中期前後に他地域にて切り合うほど群集して営まれるという程ではなく、不思議と10m間隔程ずつ離れており、密集度の低さを示す。この期の住居跡がもし、より南側に多く集中するとすれば、これは集落の北端にまとまって占地するとも確信出来ようが、現状では想像の域を出ない。

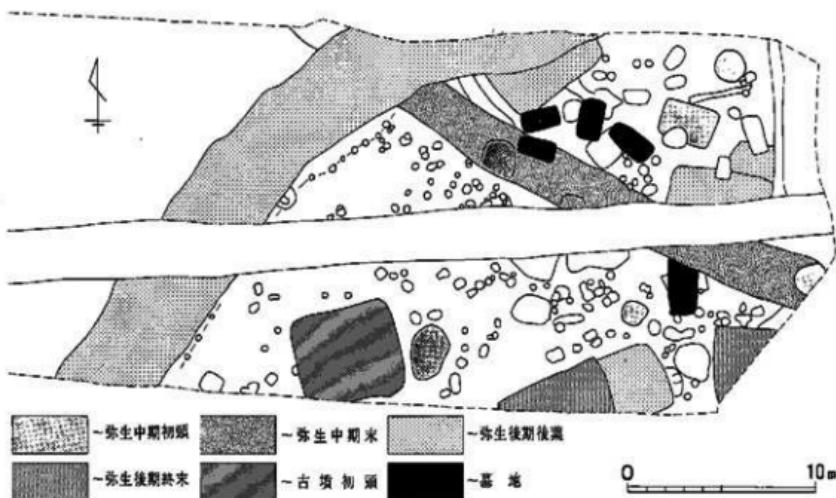
袋状竪穴底面中央に小Pitを有するものが3例あるが、遠賀川下流域にわりとみられる例であり、彼地との交流も示唆されるところである。

弥生中期末前後 東西に直線的に走る大溝2のみがこの期の遺構である。本文中にも記述した如く、流水或いは水の溜った形跡もほとんどなく、出土遺物も後代のものは全くみられず、わりと短期間で埋没してしまったと考えられる。しかも断面土層からみて人為的に埋められたのではないかと推定される節もある。この期の集落全体としての様相の把握は全く出来ない現状であるが、大溝2の存続期の短かさから考えて、それ程大規模なものではなかったと推定される。また、その後の後期後葉の大溝1と全く方向・位置ともに軌を異にしており、集落の占地そのものがずれていたと考えられ、今回調査区より北方へ拡がっていたと推定したい。

弥生後期後葉 大溝1が掘削され、その内側に一大集落が形成された、つまり大環濠集落が営まれ始めた時期である。今回調査分では、明確には3軒の竪穴住居跡が検出され、またこの期を中心とした墓地が営まれていた。

環濠そのものは、台地東縁の集落を半径50m程の半円弧を描いて囲繞していたと考えられる。そしてその内側に柵を並行させて、その防禦効果を更に強化している。

環濠集落は近年大規模開発に伴ない、統々と全国的に発見が相次いでいる。西日本においては、その多くは2つの時期に集中する。即ち、弥生前期から中期初頭前後までと、弥生後期後



第87図 造構変遷図 (縮尺 1/300)

半から終末期にかけてである。ここでは本遺跡例に近い後者のみについてみたい。これらの状況については、高地性集落も関連させて、軍事的緊張要係が説かれるところである。このような大環濠の場合、その多くが、台地上面のほとんどをその周縁に沿って囲繞するものである。近辺例では、台地上の場合、佐賀県三養基郡基山町千塔山遺跡（註2）がある。また、全体をとり囲むものではなく、台地先端乃至は側縁の突出部を、その基部側において直線的に切るよう溝を掘る例も多い、これはそれ程大規模でない例も多く、わりと簡便に集落を区切ることのできる性格のものであったと考えられる。

本遺跡例の場合、溝そのものの幅・深さ共に他に例をみない程の大規模のものである。飛び越えようと思しても、通常の人間では、見ただけでその勇気を喪失してしまう程である。明らかに防禦的性格を当初から有していたものである。そしてその占地は、東に比高6mの急崖をなした洪積台地上にあり、全体に直線的な東縁を半円弧で区切るという形態をなすことになる。このような例は殆んどみられず、珍しい例である。このような形態をとらざるを得なかつた理由として、まず第1にこの台地南側先端部には別の集落が形成されていたことがある。そして台地自体が幅広くて、その周縁全面が可耕地の沖積地であり、台地の縁に沿った各所の生産基盤となる水田に面した位置に占地していたと考えられる。そのうちの1つが当西原C遺跡にあたる。第2に台地直下に有力な湧水が在ったためかとも考えられる。これは現在では確認

出来ないが、かつての状況はおそらく想像するに難くない。

竪穴住居跡についても、この期の構造はいずれも軸を一にしている。つまり、やや隅丸の長方形プランで、中央に炉をつくり、時として壁際に土塗を有する。主柱穴は明確ではないが、四隅に近い床面に柱穴がみられる例があり、4主柱穴と推定される。

弥生後期終末 この期の遺構は、ベッド状造構を持つ竪穴住居跡2軒である。更に大溝1もその埋土中の土器の出土状況から、既にいくらかは埋没していたが、この期まで存続してその機能を充分に發揮していたことがわかる。この後に記す墓地も時期的に連続してこの期まで行われることからも、集落構造全体もそのまま継続されたと考えられる。そして、この期の住居跡もその中心はより南方に位置すると想定される。

弥生後期の墓地 検出された5基の埋葬主体はその年代を明らかにする遺物に乏しかった。唯一の副葬品である1号木棺墓出土の鉄鉢は、細身で29cmという長いものであり、他に例をみない。この箇についての考察は本文にて行なったので参照されたい。(60頁)

また、各主体部内及び裏込め土中出土土器片について本文中に詳細に検討した結果からみると、いずれも弥生後期後葉を前後とする時期であることが判かった。更に各主体部の構造が異なり、木棺墓1基、組み合わせ箱式石棺墓2基、「石蓋」土塗墓2基というようにバラエティーに富んでおり、そして石棺墓相互においても、弥生的なもの、古墳的なものと異なる諸点が明らかになった。以上の諸検討から、筆者の考えとしては、1号石棺墓が先行し、2号土塗墓も或いは、ほぼ同期で、次に1号木棺墓、更に2号石棺墓へと連続すると考えられる。これらの年代は、集落の盛衰とも連動しており、弥生後期後葉から古墳初頭にわたると考える。

特に北方の4基は小じんまりとまとまり、小さな墓地を形成している。前の検討から、各々構造年代が異なり、また集落全体の墓地であるとは到底考えられない。のことから、どうしても特殊な小グループの墓地、或いはもっと想像たくましくすれば、3(～4)代にわたる或る一家族の墓地と考えられよう。位置としては、環濠内ではあるが北端に近い、集落のはずれあたりとなる。

北部九州においてこの時期には、一大群集共同墓地を形成することは稀ではない。鞍手郡宮田町・若宮町の沙井掛遺跡(註3)では、土塗墓・木棺墓228基、箱式石棺墓31基、石蓋土塗墓20基、壺棺墓1基の計280基におよぶものが尾根上に群集する。このように極端に群集する程ではなくとも、数十基程度のものは、近辺でもいくらかみられる。しかし、実際にこの期に最も多くみられる類型は、数基程度のまとまりをみせるもので、それらは往々にして集落と近い位置にあることが多い。本遺跡のこの小グループを、何らかの特殊な(例えば、共同墓地への埋葬を拒否されているというような)事情を持つ人々と考えない限り、この小墓地はこの時期の家族葬地としての墓地形成の好例として把握し得る。すなわち、群集する壺棺共同墓地の最盛期を過ぎた後に、後代の複数主体部をみる方形周溝墓等のやや卓越した家族墓の出現との間

の、過渡的な1形態を示していると考えられる。

古墳時代初頭 4世紀後半と考える布留式併行期の堅穴住居跡1軒が検出されている。また、大溝1の中層以上にこの期の土器片が散見することから、ひょっとしたら、この漆塗もこの期まで機能を果たしていた可能性もある。ただ中層まで埋没していたとするとかなり浅くなり、細削当初から比べるとその防禦的性格は比肩すべくもない程であったろう。

更に集落自体の規模については、大溝1を含めて、遺跡全体からこの時期の遺物の出土量が著しく減少しており、もはやこの地での最終期をむかえて、極めて小規模化していたと考えられる。このことは、この時期にはより標高の低い、冲積地のうちの低高地・自然堤防上へと集落の主体が移動していることを物語る。本遺跡西方2.5kmの上々浦遺跡（註1）の如き小石原川左岸の自然堤防上での生活が、生産基盤を主眼とした立地を示して盛行することとなる。本遺跡での集落衰退は、台地上での集落が、生産の拡大とともに移動していったことの証左となるところであろう。

検出されたこの期の住居跡の建て替えは、主柱穴まで掘り替えており、貴重な例となろう。これに関する考察は本文中に詳しいので参照されたい。

古墳時代以降 5号住居跡の後の時期の造構は全く不明である。全体の遺物出土量としても、小Pit 中から古墳時代後期の土器1点のみで、この後は奈良期を待たねばならない。

奈良期になると、須恵器若干が、大溝1の最上層、小Pit 中などより出土する。しかし、全体量からみるとごくわずかであり、造構も皆無である。ただ、大溝1の最終埋没時期が奈良前半期であることがわかった。古墳時代初頭直後に集落が終焉したのち350年余の間を経てやっと埋没したこと、台地上での自然の営みの長さを感じるところである。

2 出土遺物について

各造構から出土した遺物については、個々に年代を中心として詳記したので、ここでは改めて述べない。ただ、土器については、龜ノ甲式系統の土器を中心として、夜臼式土器からの流れの中で、その発生と地域的な様相についての資料を準備して執筆を予定していたが、紙数と時間の制約により次回に譲る改めたい。資料収集に協力頂いた方々にお詫びする次第である。

ここでは今回出土した弥生中期初頭の土器のうち、壺について、主に口縁部近辺の形態により分類して出土総数を当たったものを資料として掲載しておきたい。（第7表）諸学的研究に供することができれば幸いである。

I類は如意形を量するもので、総数のちょうど5%を占める。

I-A類 如意形口縁で凸唇・刻目等全くもないものである。更に、口唇外面に沈線をめぐらすものをI-A-2類とし、それのみられないものをI-A-1類とした。I-A-1類には腹の張らないものが多く、それに対してI-A-2類には腹上位の

第7表 出土變形土器分類表

I 類				II 類				
A		B		A	B			C
1	2	1	2	A	1	2	3	C
6点	4点	6点	3点	1点	10点	24点	1点	2点
10点 (17.5%)	9点 (15.8%)	1点 (1.8%)	35点 (61.4%)	2点 (3.5%)				
19点 (33.3%)				38点 (66.7%)				
総数 57点 (100%)								

張るもののがかなりみられる。

I-B類 如意形口縁の脣外面上位に沈線1条をめぐらすものである。そのうち、口縁外間に沈線を入れるものをI-B-2類、入れないものをI-B-1類とした。

II類は口縁端外面に断面三角凸帯を貼りついているので、いわゆる亀ノ甲式系統と考えられる類である。

II-A類 口縁外端と脣部上位に三角凸帯を付けて、双方に刻目を施すものである。大型の壺1点のみであるが、底部も厚く充実せず、平底のままであり、古い様相を示すタイプである。

II-B類 口縁外端に断面三角凸帯を貼り付けて、刻目を施さないものである。脣上位に沈線を巡らさないものをII-B-1類、沈線1条を巡らすものをII-B-2類、沈線2条を巡らすものをII-B-3類とした。これらのうちII-B-1類とII-B-2類が圧倒的に多く、両者を合わせると総数の60%に及ぶ。II-B-3類は1点のみである。

II-C類 口縁外端に断面三角形凸帯を付け、脣部上位には矮小化した凸帯を付けたもので、刻目は施さない。口縁内端は小さくつまみ出される。全体として中期前葉の逆L字口縁の形態に近くなっているタイプである。

以上の分類を行なって、個体数・総数からの割合を表に示したが、細かい特徴においては必ずしもこの分類が、その分類中で全く同じというわけではない。個体別にみてゆくと、同じ分類中でも、新しい傾向を有するもの、古い特徴を残すもの、それぞれがみられる。ただ、この中で明らかに年代の異なる類は、II-A類が前期に含まれ得るものであり、II-C類が、かな

IV 各論

り中期前葉に近いと考えられる。他はすべて中期初頭の範囲内に收まる類で、八女市龜ノ甲遺跡1号竪穴（註4）出土土器の大部分を占める新しいタイプと同一の類である。ただ龜ノ甲遺跡1号竪穴出土品には、当西原C遺跡出土品にみられるような、刻目を施さない如意形口縁のものが全く認められず、筑後平野南部と北端の両地域の差異を如実に示している。

なお、参考の為に、筑紫野市劍塚遺跡（註5）出土壺について総量を分類した数字を示したい。ここでは前期後半を中心として中期初頭を僅かに含むものであるが、如意形口縁78%，龜ノ甲式系統14%を示している。この遺跡は福岡平野南端の筑後平野に通じる位置にあり、この数字は地域的な性格を良く表している。

以上の如く、当遺跡出土弥生中期初頭土器群は、その大勢としては筑後平野的地域性を示すが、福岡平野に初現を持つ如意形口縁もかなりみられ、更に遠賀川流域に多い胴部上位に沈線を施す手法も見逃せず、各々の地域との交流が首肯出来るところである。

- 註 1) 佐々木隆彦「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告一」福岡県教育委員会 1962
2) 中牟田賛治「千塔山遺跡」基山町遺跡発掘調査団 1978
3) 池辺元明・酒井仁夫「九州純質自動車道関係埋蔵文化財調査報告 XX種」福岡県教育委員会 1979
見玉真一・池辺「若宮宮田工業団地関係埋蔵文化財調査報告 第2集」福岡県教育委員会 1980
4) 小田富士雄・他「龜ノ甲遺跡」八女市教育委員会 1964
5) 中間・平島勇夫「九州純質自動車道関係埋蔵文化財調査報告 XXIV」福岡県教育委員会 1978

図 版



[1] 遺跡全景（東より）



[2] 遺跡全景（西より）



(1) 1・2号堅穴住居跡付近（西より）



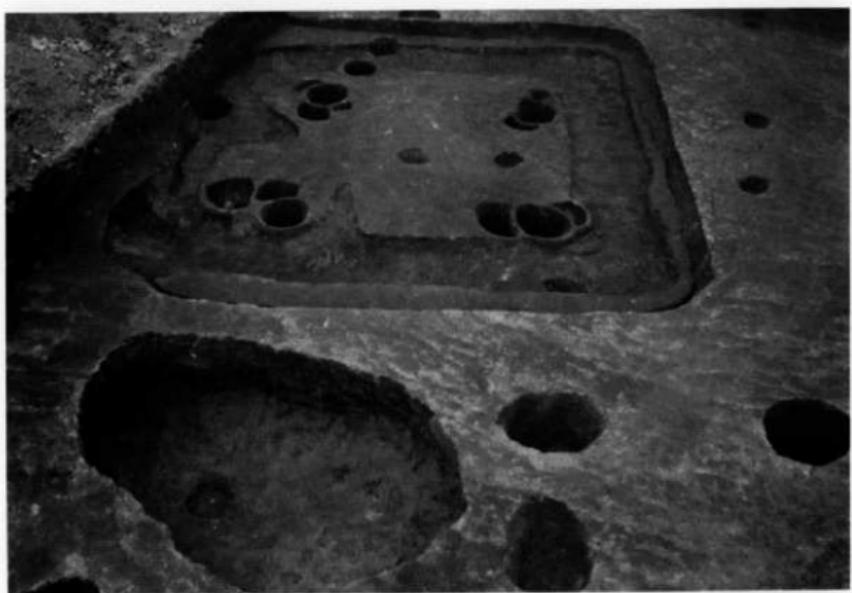
(2) 1号堅穴住居跡（北より）



(1) 2・3号堅穴住居跡、1号袋状堅穴、3号土塗付近（北より）



(2) 2・3号堅穴住居跡（北より）



(1) 5号堅穴住居跡、2号袋状堅穴（東より）



(2) 5号堅穴住居跡（北より）



(1) 6・7号墳穴住居跡付近、及び作業風景（東より）



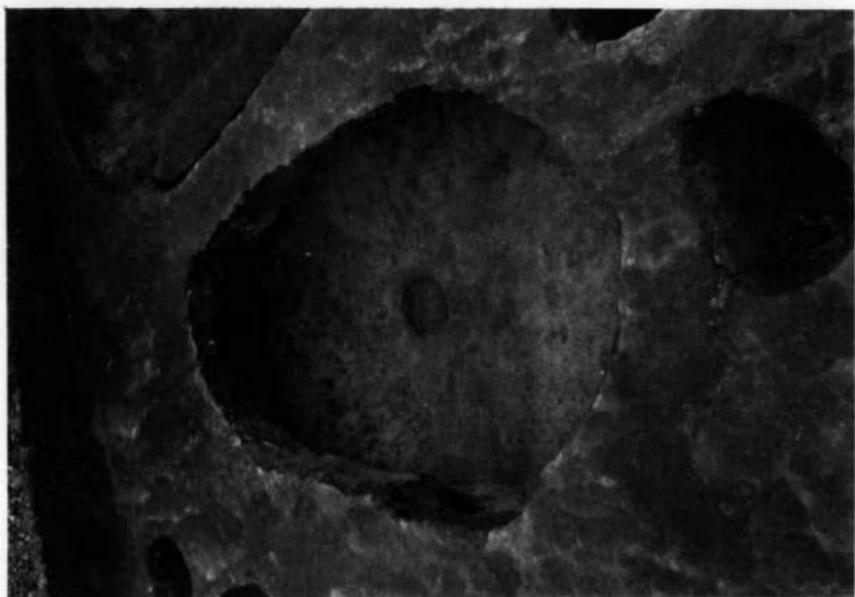
(2) 6・7号墳穴住居跡（東より）



(1) 8号竖穴住居跡 (北より)



(2) 1号袋状竖穴 (東より)



[1] 2号窑址壁穴 (井より)



[2] 6号土坑附近 (西より)



(1) 石瓶、土坑群 (西より)



(2) 1号木棺蓋 (北より)



(1) 1号箱式石棺蓋(南より)



(2) 2号箱式石棺蓋(西より)



(1) 2号土壙窯(西より)



(2) 大塗1号窯(北より)



(1) 大溝1南半(北より)



(2) 大溝1南半(南より)



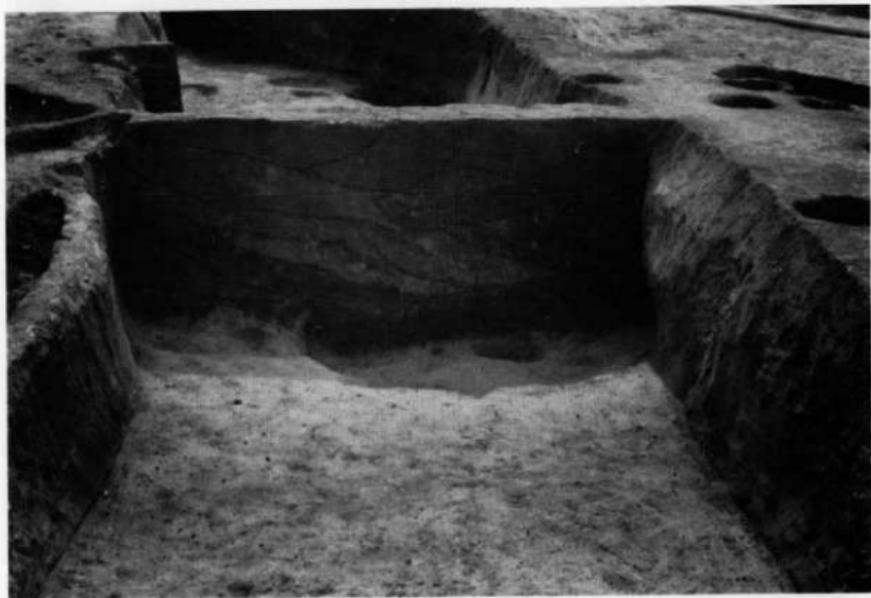
(1) 大津1北岸・南岸(北西より)



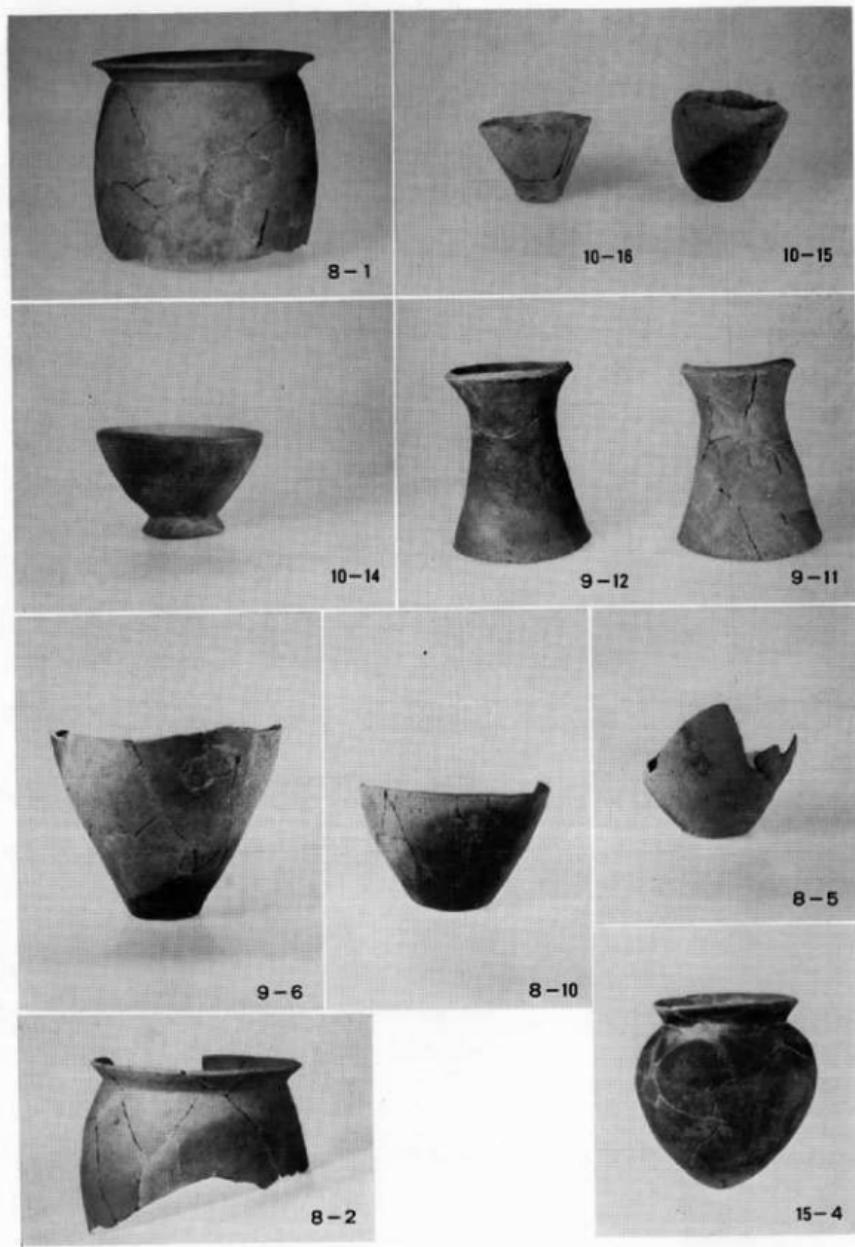
(2) 大津2余瀬(北西より)



(1) 大溝 2 東半 (西より)

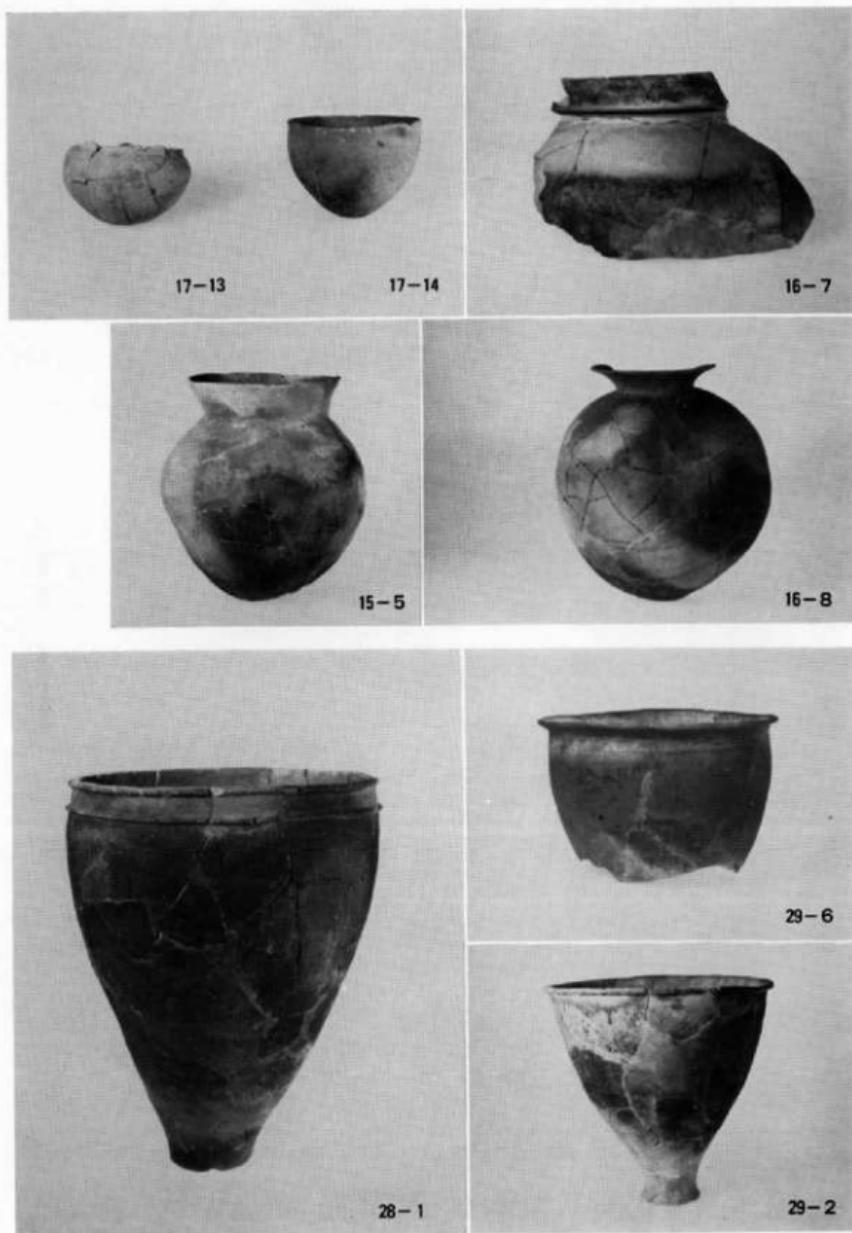


(2) 大溝 2 中央, 5 号袋状竖穴 (西より)



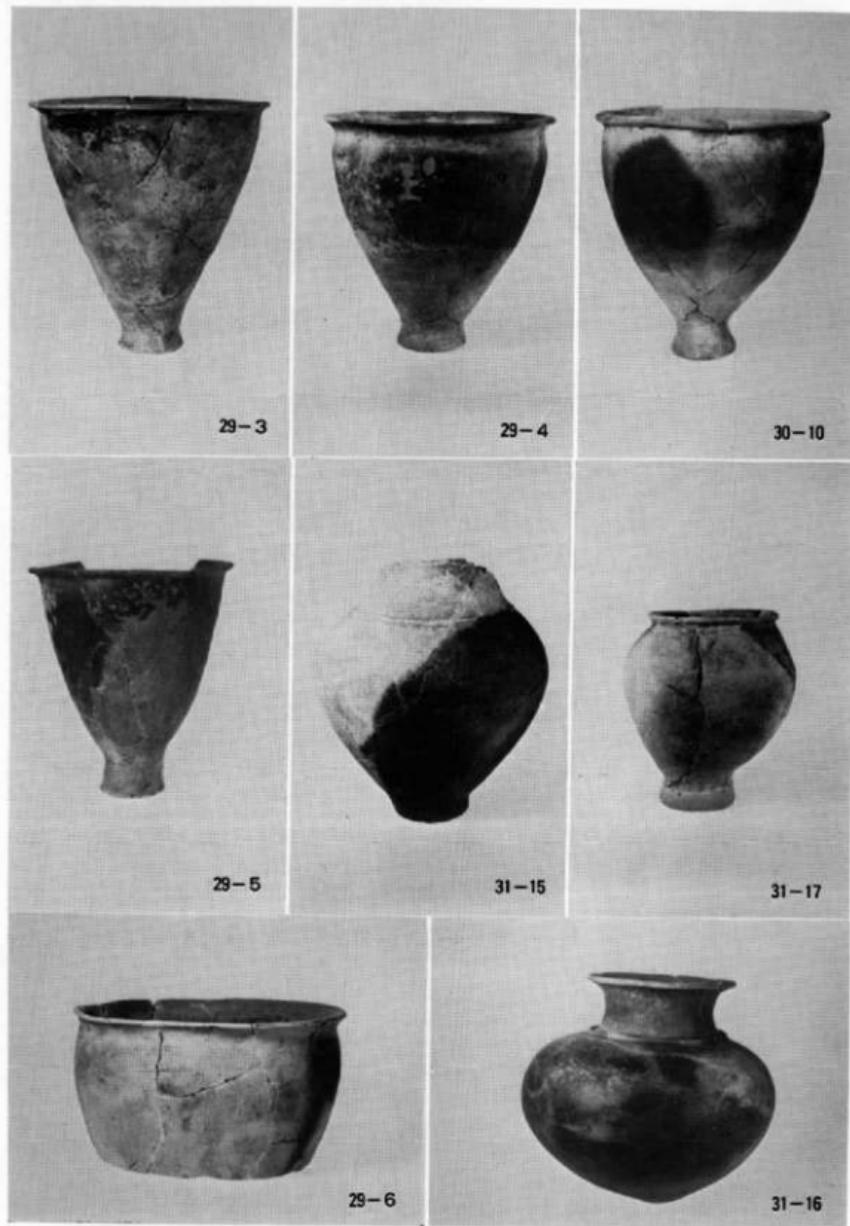
(1) 2号堅穴住居跡出土土器

(2) 5号堅穴住居跡出土土器

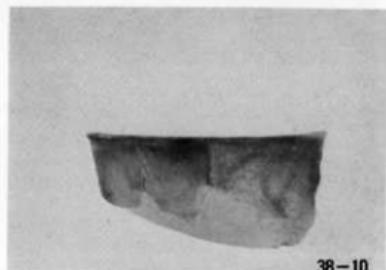


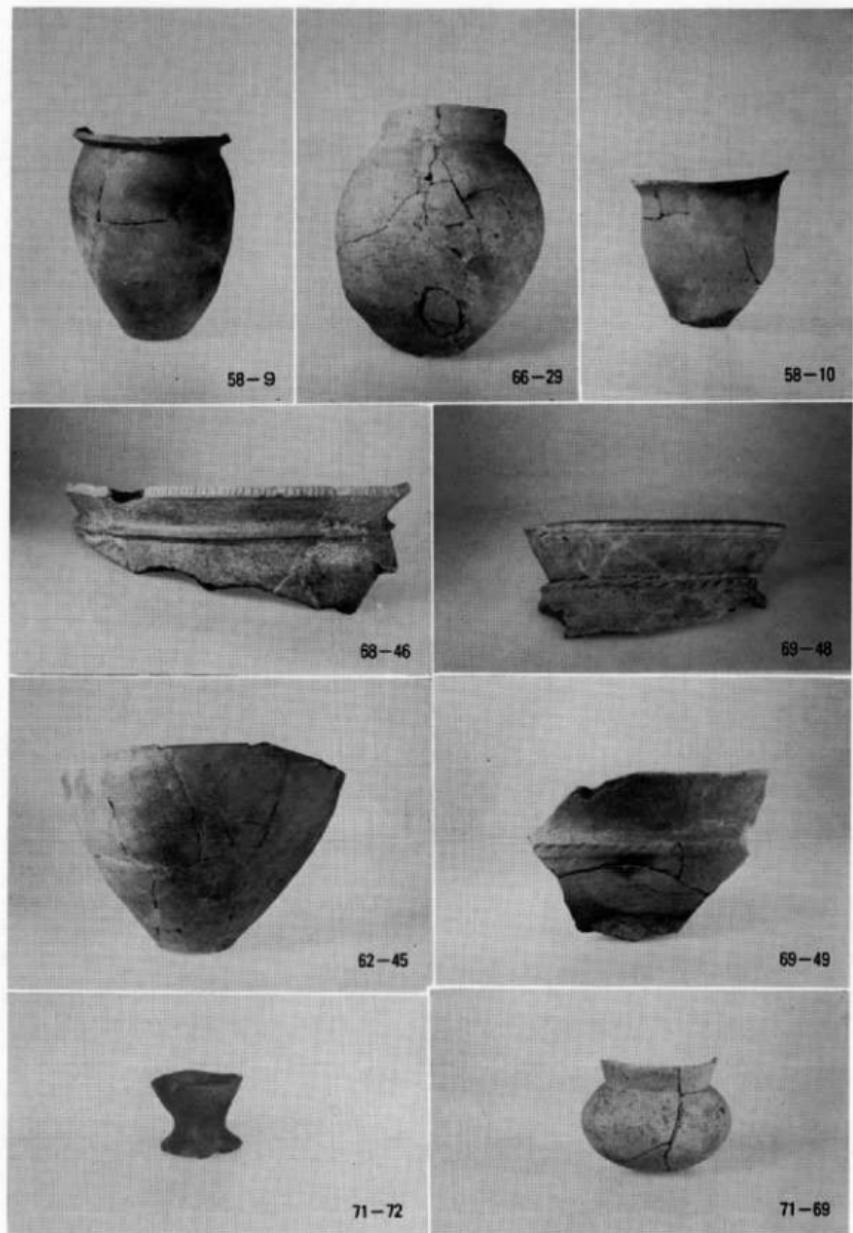
(1) 5号堅穴住居跡出土土器(上半)

(2) 2号袋状堅穴出土土器(下半)



2号袋状竖穴出土土器





大溝1出土土器（その1）



67-38



67-36



66-31



67-42



70-59



70-58



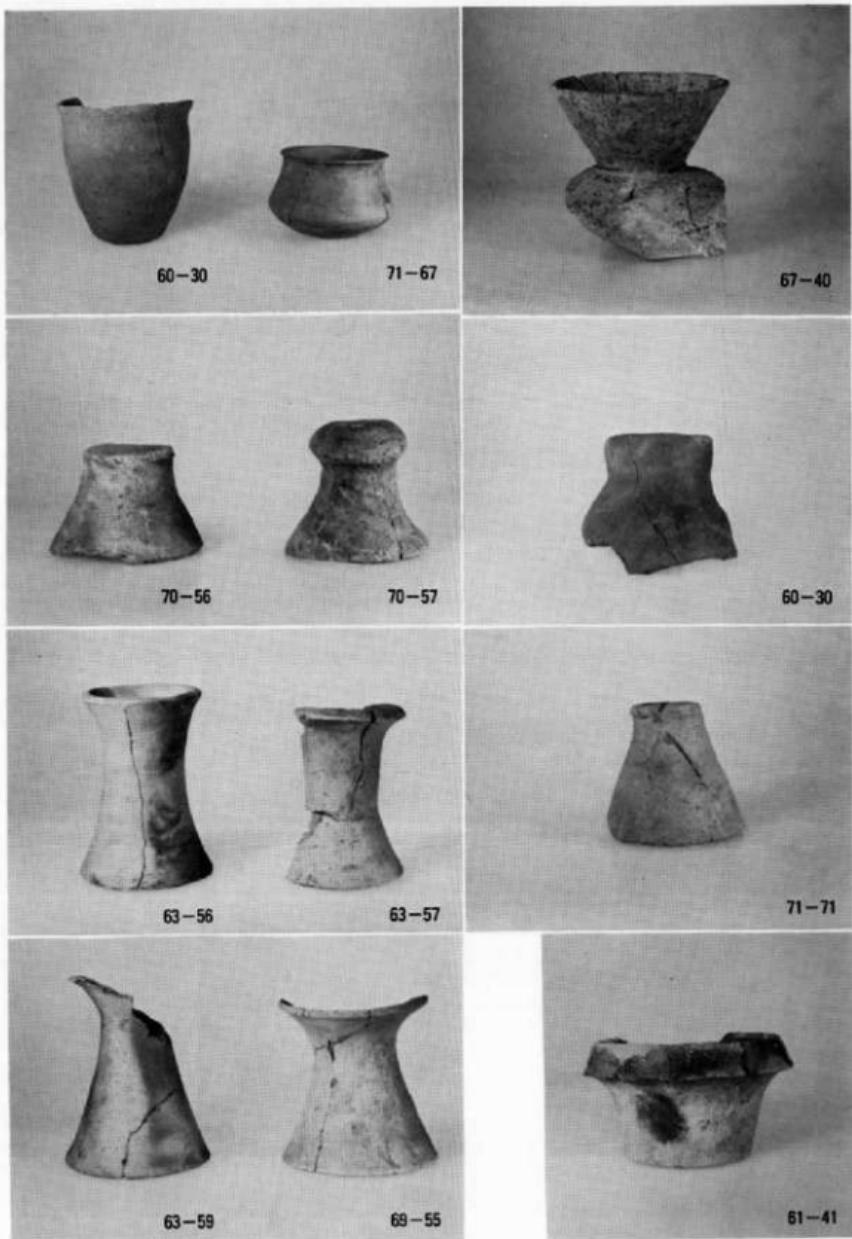
70-58



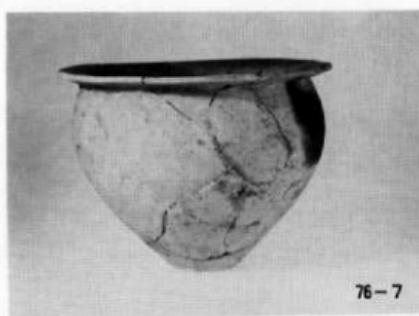
70-62



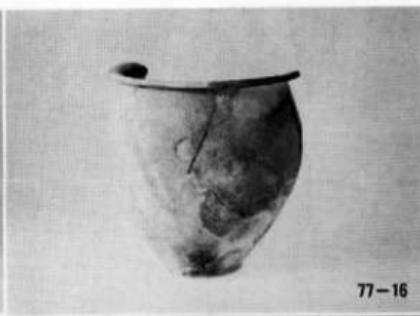
70-61



大溝1出土土器（その3）



76-7



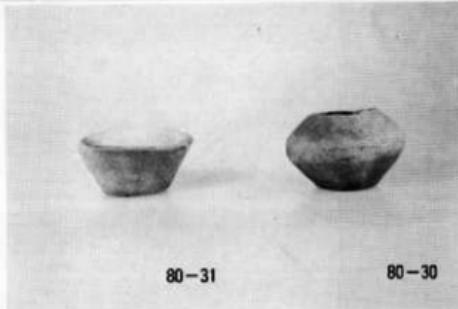
77-16



78-19



78-18



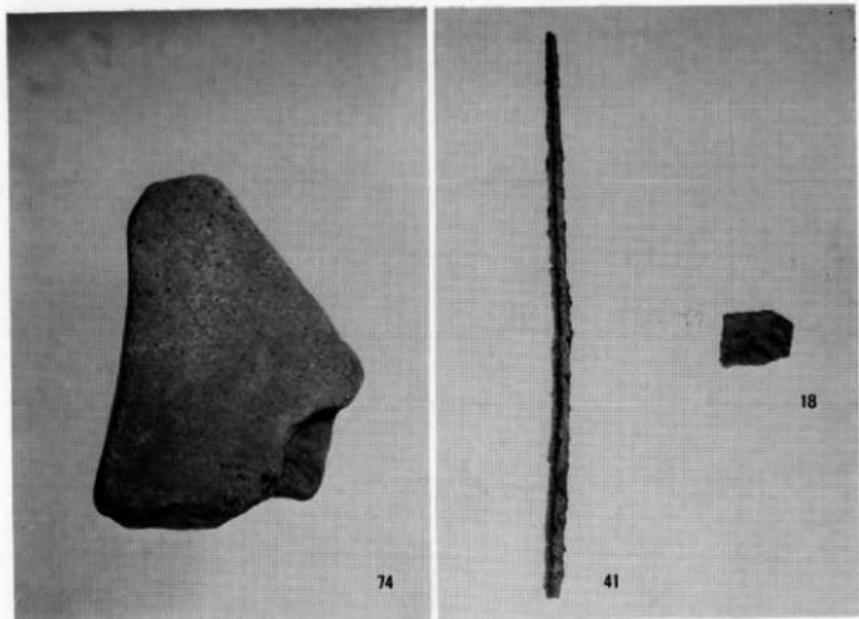
80-31

80-30

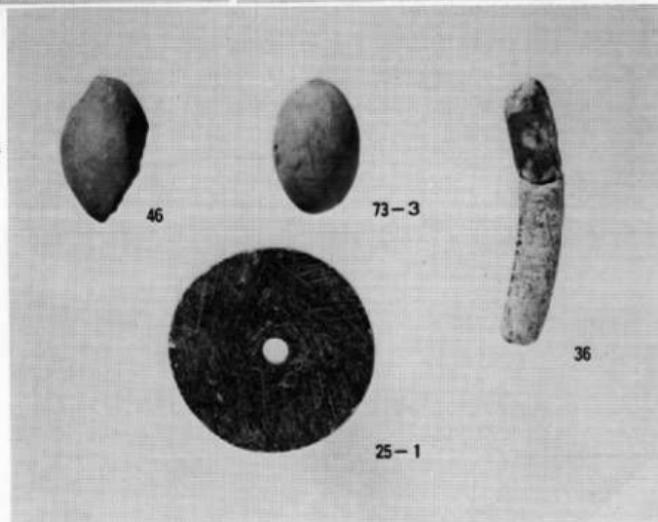


86-5

(1) 大溝2出土土器

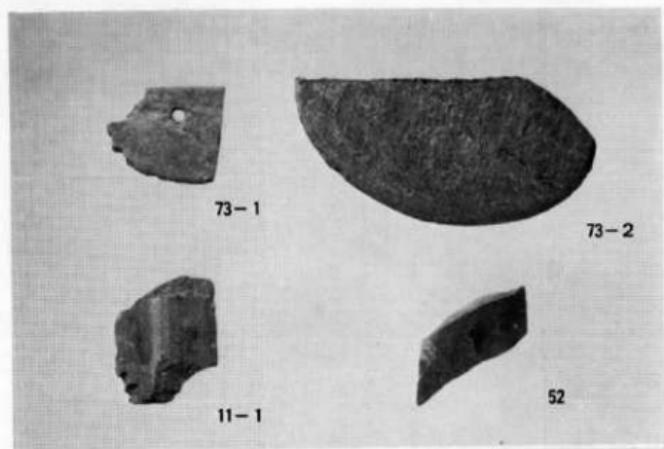


(1) 各遺構出土石器・鐵器

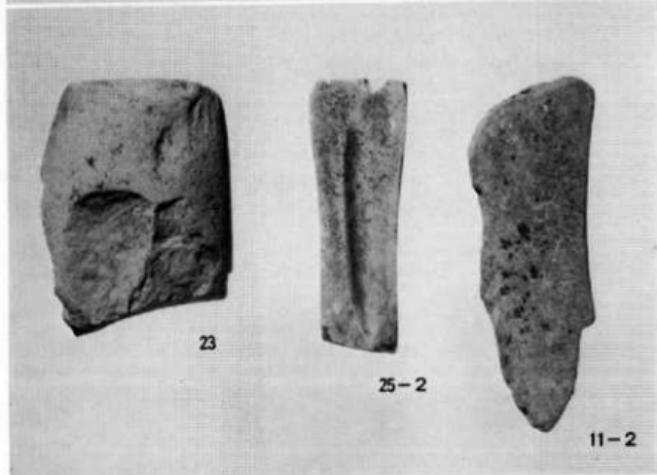


(2) 各遺構出土石器・
投弾・筋鍔車

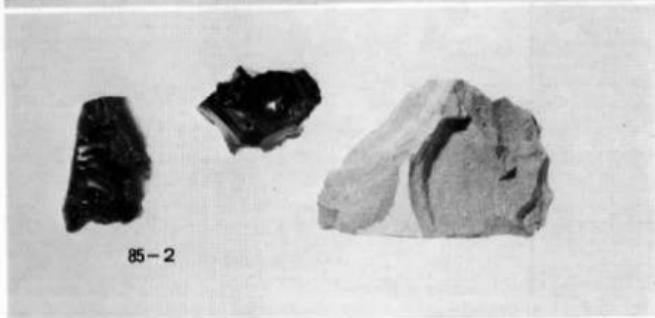
(1) 各遺構出土
石砧丁・石劍



(2) 各遺構出土
磨製石斧・砾石



(3) 各遺構出土
打製石器



九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—3—

昭和 59 年 3 月 31 日

発行 福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園 7 番 7 号

印刷 株式会社 川島弘文社

福岡市東区箱崎埠頭 6 丁目 4 番 4 号